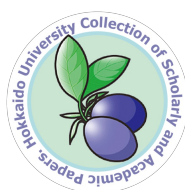




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	仕事は好きなんすよ。でもやっぱ、友達と家族が一番すね：北海道小樽市の「ノンエリート」青年
Author(s)	小西, 二郎
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 86, 179-250
Issue Date	2002-06
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.86.179
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28864
Type	departmental bulletin paper
File Information	86_P179-250.pdf



仕事は好きなんすよ。でもやっぱ、 友達と家族が一番すね

— 北海道小樽市の「ノンエリート」青年 —

小 西 二 郎

I Like to Work.
But Still, to Me, It's Best to Be with Friends of Mine and My Family

Tsugio KONISHI

目 次

1 はじめに	180
(1) 課題の設定 — 1990 年代以降の日本社会の変容との関わりで	180
(2) 方法について	181
① 調査について	181
② 本研究の方法的特徴	182
(3) 本稿の構成	182
2 小樽に生まれ育って	183
(1) 対象地・小樽	183
(2) 対象者のライフコースの基本的特徴	184
3 友人 vs 家族?	188
(1) 友人 vs 家族?	188
① 普段付き合っている人の構成について	188
② 気の合う親しい友人の構成について	190
③ 「結婚前は友人、結婚後は家族」か?	195
④ 小括	201
(2) 友人関係の内実について	202
① ネットワークとしての友人関係	202
② 創発性・自立性を担保する「場」としての友人ネットワーク	206
③ 小括	213
4 労働 vs 余暇?	213
(1) 現在の勤め先と仕事内容	214
(2) 企業社会の縮小・再編の、労働生活へのインパクト	218
① 高卒就職者と専門学校卒就職者の間の雇用をめぐる格差 — 雇用情勢の転換のインパクト	218
② 退社するに至った経緯にみる、企業社会の縮小・再編のインパクト	219

③ 現在の労働条件とそれに対する評価	223
(3) 「労働は嫌い」か?	227
(4) 企業と職業の狭間で	232
5 「ノンエリート」=落ちこぼれ? 負け犬?	234
(1) 学校歴主義に対する考え	234
(2) これからの生き方について	239
6 おわりに	244

1 はじめに

近年、青年に関する言説は、ユース・フォビア（青年恐怖症）の色彩を強めつつある。例えば、こうだ。「親にパラサイトしてお気楽なフリーターなんぞやって。それにいつキレるかわからない。実に無責任で危険だ」等々。こうした見方は、一面的で偏向している。それは、日本社会の変容と青年との関わりを捨象し、問題状況の要因と責任を一方的に青年とその家族に帰している。青年の実態にどのくらい肉薄しているのか疑わしく、リアリティを欠いている。

その意味では、こうした言説にとらわれることなく、青年、そして彼ら・彼女らを取り巻く状況をリアルに認識すること、それが、今、必要かつ重要なのはもちろんである。それには、何よりもまず、インテンシヴな実証研究によるアプローチを行なう必要があるのは、疑いを入れない。青年に関する事例分析を行なう本稿は、そうした研究の一環に位置付くといえる。

だが、ここで留意すべきことがある。確かに、ユース・フォビアは問題であり、是認すべきではない。しかし、そのあまり、反ユース・フォビアに傾いた研究スタンスをとってしまうと思わぬ陥穽にはまる危険がある。

反ユース・フォビア的な言説は、「まとも」で「前向き」な事例の提示や傾向の析出に意を尽くす。確かに、そうした事例や傾向の中には注目すべきものもあり、それらの把握の重要性は否定しない。しかし、何をもってして「まとも」であり、「前向き」と判断するのか、その前提が問われないで論じられている場合が多い。

前提としての分析枠組みが問われていないという点では、ユース・フォビア的言説も反ユース・フォビア的言説も同じである。つまり、分析者の視座が往々にして不問に付されているという点では両者は共通しているのだ。その上、両者には、分析者の嫌悪感と期待感が、無意識的にあるいは意識的に忍び込まされていることが多い。

青年の実態は大きく変容しており、既存の分析枠組みではとらえることができなくなっている。そうした認識の上に立つことがまずは必要なのである。

以上のような問題意識に立脚し、本稿では「ノンエリート」青年に関する事例分析を行なう。「ノンエリート」青年に着目するのはなぜか。それには、1990年代以降の日本社会の変容が関係している。その点について次に検討し、その上で本稿の課題を設定することにする。

(1) 課題の設定 — 1990年代以降の日本社会の変容との関わりで

1990年代以降、グローバリゼーションに伴って企業社会の縮小・再編が進行してきた⁽¹⁾。それは、以下のように、青年層に多大なインパクトをもたらしてきている(乾(2000), 中西(2000 a) (2000 b))。

企業社会の縮小・再編に伴って、新規学卒雇用慣行の崩壊が進行してきている。そうした変化は、単に雇用上の諸問題を惹起させるにとどまらない。新規学卒雇用慣行の崩壊は、「最終学校卒業→正規雇用者としての就社への連続的移行」という、これまでの標準的な進路を危うくし、ひいては青年のライフコースの不安定化を招いている（青年層における暴力現象もこのことと関係しているだろう）。

しかも、企業社会の縮小・再編は、青年層における転社・転職の困難化をも招来しており、そのことが青年のライフコースの不安定化をより一層深化させている。

こうした変化には、学校歴による格差・差異が伴っている。すなわち、青年のライフコースの不安定化には、学校歴による階層化が伴っている。

90年代以降、策定・実施されてきた教育改革は、「大衆的教育」から「階層的な教育」への転換を基調としているので、上記の変化をむしろ促進させることになると思われる（渡辺（1997）（1999）（2000））。

こうした一連の変化によって、「エリート」―「ノンエリート」の二極化が強まり、青年の中でも「ノンエリート」青年においてライフコースの不安定化の度合いが強まってきている⁽²⁾。

こうした状況の中で、「ノンエリート」青年は日々、どのような労働・生活を送り、どういった「社会」を形成（しようと）しているのか。本稿の課題は、事例分析を通してそうした点にアプローチすることである。

（2）方法について

① 調査について

本稿では、北海道小樽市にある道立A工業高等学校（以下、A工と略する）⁽³⁾造船科出身者（1クラス・全員男性、1992年3月卒業）を対象とした、高校3年生時からこれまでの約10年間に渡る縦断的調査の結果をもとに事例分析を行なう。この方々を対象として実施した主な調査は以下の通りである。

(a)1991年11月（高校3年生時）、1クラス39名中38名の方々に調査票を用いてお話をうかがった（1人当たりの所要時間1時間強）——対象者番号①～③⑨（②は病欠で調査不能のケース）

(b)1995年8月～96年2月、(a)調査で御協力頂いた38名中

○18名の方々に調査票を用いてお話をうかがった（テープレコーダー使用、1人当たりの所要時間2～3時間）——対象者番号①③⑤⑥⑦⑫⑬⑮⑯⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

○3名の方々にアンケート調査に記入していただいた——対象者番号④㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿（㉔の場合、その上更に母親にお会いしお話をうかがった）

○数名の方々の親に若干の聴き取りを行なった。

(c)2001年8～9月、(b)調査で御協力頂いた21名中

○11名の方々に調査票を用いてお話をうかがった（テープレコーダー使用、1人当たりの所要時間2～4時間）——対象者番号①③⑤⑥⑫⑬⑮⑯⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

○2名の方々の親に若干の聴き取りを行なった——対象者番号④㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

そのほかにも、A工の先生方を対象に主に以下のような調査も行なった⁽⁴⁾。

(d)1991年11月、担任、造船科長、進路指導部長にお話をうかがった。

(e)1992年3月、担任、造船科長、進路指導部長、生徒指導部長、生徒指導部生徒会担当教

論に調査票を用いてお話をうかがった（一部テープレコーダー使用）。

(f)2001年8月、進路指導部長にお話をうかがった（MDレコーダー使用，所要時間約4時間）。

本稿では，主に(c)調査の結果の一部にもとづき，その他の調査結果も交えながら論じることにする。なお，対象者番号は，(a)調査で把握した交友関係の状況をもとに設定した。具体的には，交友関係の中のクラスメートとの関係に関する，ソシオメトリ的手法による分析の結果にもとづいている⁽⁵⁾。クラスメート以外の人は，アルファベット（A～Z，a～z）で示した。

② 本研究の方法的特徴

本稿は主に，面接調査の結果に依拠している。どの面接調査においても，私は，かなりの数の項目からなる，しかも形式を整えた調査票を用いてお話をうかがった。しかし，その構成や内容をガイドラインとして重視しながらも，それらに緊縛されて1問1答方式にならないよう注意した。話の流れに応じてお聞きすることの順番を柔軟に変えたりもした。そして，私の考えの押しつけにならないよう注意しながらも，しかし「客観性」にこだわるあまり，その時々の中での私が感じたことや考えたことを排除するということとはなるべくせずに，それらをもとに質問や意見を適宜付加したりもした。そうした配慮をしながら，対話となるよう腐心したのである。

これは，調査がスムーズに行くための単なるテクニックではない。私は，「能動的なインタビュー」(Bellah et al. (1985=1991) pp. 364-7) を織り込んだ対話によって，言語化されていないことや，前提となっていることを浮かび上がらせるよう努めたのである。

こうした方法をとったのは，以下のような理由による。先述のように，今日，青年の実態は従来とは異なっている。私がお話をうかがった彼らの場合も例外ではなく，どのようにとらえたらよいかわからず，時には困惑することもあった。

なぜそうした事態に立ち至るのか。大抵，人は，自らの状況や認識・評価枠を分析的に意識化していない場合が多い。自分（たち）にとって至極自明のことについては特にそうである。自らの状況や認識・評価枠が他の（年代の）人達とどう異なるのかということ意識化していない場合も少なくない。そもそも他の（年代の）人達と異なっているということ自体，明瞭に認識していない場合もある。

彼らにおいても，そうしたことがあった。そのような場合，リジッドな調査スタイルで尋ねても，明示的に語られることはまずない。こうした場合には，対話を重ねる中で解釈し，そうすることで辛うじて臆げに結ぶ像を手がかりにしながら，また対話を重ねるという方法をとる必要がある。対話をしながら解釈し，解釈しながら対話をする。そうする中で実態が浮かび上がってくるのである。

よって，本稿では，分析方法としても，対話に関する解釈的方法を随所であつていいる。彼らの実態，とりわけ彼らの認識や価値観をとらえるには，私と彼らとのやり取りの中で垣間見たことが意味することを探る必要があるからである。掲載した対話が冗長なのは否めないが，御容赦願いたい。

(3) 本稿の構成

本稿は次のような構成をとる。

2章では、対象地・小樽の概況と対象者のライフコースの基本的特徴について述べる。

3章では、彼らの友人関係に着目する。彼らのほとんどが、日々の暮らしの中で友人関係を軸線を置いている。ここでは、2つの論点を中心にして検討する。第1に、彼らがつくる家族と友人関係との関係についてである。彼らは、結婚すると友人とあまり付き合わなくなり、人生の軸線を家族に移すことになるのだろうか。彼らのプライベートな人間関係は家族に内閉することになるのだろうか。第2に、友人関係の特質である。友人関係は、彼らにとって如何なるものとしてあるのか、そこから探ることにする。

4章では、彼らの労働について考察する。ここでは、彼らが労働に関してどういった志向性を有しているのかということを中心に考察する。彼らは、友人との付き合いも含めた非労働生活の中でいきがいや充実感を感じている。彼らにとって、労働は、生計費獲得のための単なる手段に過ぎないのだろうか。企業社会の変容がもたらす影響や労働条件も視野に入れて論じることにする。

5章では、労働・生活を通して、彼らが生き方に関してどういう考えを持つようになっているのかについてみる。「エリート」―「ノンエリート」の二極化は、学校歴主義にもとづいている。学校歴主義は、日常性のレベルでは「ランクの高い学校に入って、有名大企業に就職すれば、いい生活ができる」という考えとしてある。彼らは、こうした考えに対してどう思っているのか。そして、今後どのような生き方を望んでいるのか。友人との付き合いや労働に関する志向性との関係に留意しつつ分析することにする。

そして最後に、本稿のまとめに当たる6章では、本研究が示唆することについて述べることにする。

2 小樽に生まれ育って

対象者の11名は1973,4年生まれで、92年3月にA工を卒業、現在27,8歳である。11名中、㊸を除く10名が小樽市で生まれ育っている。このうち、千葉市に住む㊶と札幌市に住む㊸を除く8名が現在も小樽市に住んでいる。㊸は、小樽市の西隣りにある余市町出身で、この間、同町から転居したことがない。しかし、地元の中學卒業後は小樽市にあるA工に通い、A工卒業後も小樽市内で就労している。

本章ではまず(1)で、彼らが生まれ育った地であり、現在の労働・生活の舞台である小樽市について概観する。次いで(2)で、彼らのライフコースの基本的な特徴について述べる。

(1) 対象地・小樽

小樽は、札幌の北西に隣接する、日本海に面した港町である。古くから北前船による交易やニシン漁で栄え、大正から昭和の初めにかけて繁栄を極めた。

戦前の小樽には、いくつかの“顔”がある。第1に、商業・貿易都市としての“顔”である。明治以降、小樽は北海道の農林水産物や石炭の積み出し港として栄え、内地都府県や旧樺太、ロシア、中国、欧米諸国との交易・貿易を盛んに行なっていた。第2の“顔”は、そうした活発な商業・貿易を背景にした金融都市としてのそれである。小樽は、「北のウォール街」に象徴される金融都市でもあった。

戦前の小樽にはもう1つの“顔”がある。工業都市としての“顔”である。小樽は、水産加

工をはじめとする食品加工や縫製、木材加工といった軽工業から、ゴム製品や金属製品、機械、造船といった重化学工業までもを擁する製造業の街でもあった。こうした“顔”は、小林多喜二の小説によく登場する。

戦前、隆盛を極めた小樽も、戦後は高度経済成長に半ば取り残され、斜陽の街と化した。人口は、1964（昭和39）年の207093人をピークにほぼ一環して下降し、2000（平成12）年には152063人にまで減少した（小樽市（2001））。

近年、観光の街として再び脚光を浴びるようになった。時代の波に半ば取り残されたが故に手付かずのまま残されてきた運河や古い街並みのレトロな佇まいが、注目されるようになったのだ。しかし、小樽には、依然として、製造業の地場中小企業の街としての側面もある。A工生の親の一部やA工出身者の一部もそこで働いている。

戦後の小樽は、経済発展とは半ば無縁な歴史を歩んできた。小樽に本社を構える大企業は数少なく、これといったオフィス街も小樽にはない。支店経済の北の拠点である札幌に近接しているため、大企業の支社や支店もあまり置かれていない。他方で、小樽には様々な業種の中小企業が集積している。

小樽には、「この辺は労働者の街だ」という声が住民から聞かれる地区が依然としてある（拙稿（1995））。対象者の母親との世間話の中で、1950年代に小樽であった縫製工場のストライキのことが出てきたこともある。小樽は「ノンエリート」の街なのである。

（2）対象者のライフコースの基本的特徴

本節では、対象者である11名の方々のライフコースの基本的な特徴について述べる。

まず、彼らの出生家族の状況についてみよう。ここでは、彼らがA工の3年生であった1991年11月現在の状況についてみる（表1）。

両親の学歴は、ほとんどのケースで中・高卒となっている。父親の現在あるいはかつての仕事で特徴的なのは、自営業主である⑮③③以外のほとんどのケースにおいて、父親がブルーカラー労働に従事しているということである。

母親の仕事の特徴は以下の通りである。11ケースの全てにおいて母親は働いている。すなわち、11ケース全てが共働き家族である。「就業構造基本調査報告」（1992年、総務庁統計局）によると、40～44歳、45～49歳、50～54歳の既婚女性における有業者（すなわち共働き家族）の割合がそれぞれ68.4%、70.8%、66.7%であるから、この比率は高いといえる。

看護婦である③⑬を除く9ケースのほとんどの母親が、グレーカラーないしはブルーカラー労働に従事している。パートという不安定な雇用形態で就労している5ケースは、この層に集中している。

以上から、彼らは、「ノンエリート」の家族に生まれ育ってきたといえる。

次に、本人の学校歴や就労歴、現在の居住地と就労場所、仕事内容等についてみることにしよう。

情報系専門学校に進学した⑥以外の全員が、A工卒業後に就労している（表2）。初職を継続しているケースは11ケース中5ケース、高卒就職者では10ケース中5ケースとなっており、半数くらいが転社を経験している（表3）。

この11ケースを含めた対象クラスの人達の初職の継続・離職状況をとらえ、その特徴を析出することにしよう。表4は、対象クラスの出身者のうち、A工卒業後就労した人の、約3年半

表1 両親の属性(91年調査時)

対象者 No	続柄	年齢	最終学校	自営／勤め先	従業員 規模 (人)	雇用 形態	仕事内容	役職	月収
①	父	44	H工業大学	建築業のR社		正	家を建てる。設計も。	D.K.	③
	母	43	美容師の専門学校	書籍販売のI堂		パ	レジ係	なし	①
③	父	61	(旧制)O高等商業専門学校(小樽)	無職(元国鉄)			(赤帽の仕事)		
	母	52	専門学校	A内科医院		正	看護婦	なし	④
⑤	父	49	高卒	飲食店の営業、リゾート施設の宿泊等のN社	71	正	調理	なし	③
	母	41	高卒	Gボタン店		パ	洋裁	なし	①
⑥	父	52	中卒	食肉販売のSフーズ	7, 8	正	学校やホテル、店などへの配送	なし	②
	母	44	中卒	羽毛コート・ジャケット製造のI被服工業	80	正	工場での縫製作業	なしと思う	②
⑫	父	43	H高校(小樽、私立)	飲料品販売の小樽Y販売	31	正	自動販売機への商品の配送等	課長	③
	母	39	小樽F高校(私立)	デパートのM小樽店	1878	正	婦人服の販売員	なし	③
⑬	父	42	高卒	H建設-K工業(小樽、従業員53人)の子会社	43	正	ダンプの運転手(砂運び、雪運び)	なし	②
	母	42	専門学校	N.Q.		正	看護婦	なし	③
⑮	父	49	商業高校(小樽、道立)	珠算塾経営-市内に教室が2つ、週3・4日、生徒の数はD.K.	姉が家従	業主	珠算塾の経営、教師		D.K.
	母	46	中卒	パン屋のR(9月から入院)		パ	販売員。週6日勤務。	なし	②
⑰	父	45	中卒(小樽)	建築業者向けの木材販売のM木材		正	トラックで木材を配送	D.K.	D.K.
	母	42	S高校(小樽、私立)	スーパーの問屋のO社		パ	D.K.	D.K.	D.K.
⑳	父	44	中卒(小樽)	運輸業のN社	5037	正	荷物運び	なし	③
	母	45	中卒(小樽)	H病院	7	正	病院食の調理	なし	②
㉑	父	50	中卒(小樽)	Kハイヤー		正	タクシーの運転手	なし	③
	母	40	S高校(小樽、私立)	清掃関係の会社		パ	清掃	なし	D.K.
㉓	父	45	中卒	漁業自営		業主			③?
	母	40	中卒		家従				

(実態調査より作成)

- (注)・勤め先の事業内容や従業員規模については、北海道新聞社(1992)『北海道年鑑(名簿編)』(1992年版)、小樽市雇用促進協会編(1992)『92小樽企業ガイド』も参照。
・雇用形態：正＝正社員、パ＝パート、家従＝家族従業者。
・N.Q.＝質問をしていない、D.K.＝わからない
・月収の選択肢：①10万円未満、②10～20万円、③20～30万円、④30～50万円、⑤50～80万円、⑥80万円以上

の間の初職継続・離職状況を示したものである(1995年8月現在)。対象クラスの人達全体としては、3年以内の離職率は全国平均(表4のA)よりも低い。

しかし、初職の勤務地別でみると、かなりの格差がある。初職の勤務地が札幌圏の人の離職率は、全体のそれや全国平均と比してかなり低い。つまり、初職の定着率はかなり高い。一方、それとは対照的に、初職の勤務地が札幌圏外の人では、離職率が、全体のそれや全国平均よりも上回っている。しかも、2年以内という比較的短期間のうちに離職しているケースが多い。そして、離職者の半数以上が小樽にUターンしている(10人中6人)。本稿の主な対象者である11名の中では、⑬⑱がそれに当たる。

現在、小樽・余市以外の場所に居住しているのは2名で、①は千葉市、㉑は札幌市でそれぞれ1人暮らしをしている(以下、表2)。残りの9名が小樽ないしは余市に住んでいる。そのうち既婚者は3名で、皆、親から独立している(⑬⑳㉑)。未婚の6名中5名は実家に住んでいる。

小樽に住む8名中3名が札幌に通勤している。あとの5名は小樽市内で就労している。余市に住む1名は、小樽に通勤している。

現在の仕事の特徴は次のようなものである。実家が経営している食堂で働いている⑤、理容店に勤めている㉑を除く9名の中で、ブルーカラー労働に従事している人は6名(⑫⑬⑮⑱㉒)

表 2 本人と創出家族のフェイス・シート

対象者 No	続柄	年齢	最終学校	勤 め 先	全社の 従業員数	雇用 形態	勤務地	仕 事 内 容	役職	月収	年収	親と 同居
① 千葉市 居住	本人	27	A 工造船科	M造船から、M造船C 機工エンジニアリング ㈱プラント 部船装グ ループに出向	4747 人	正	千葉	2 年前から応援で、M 造船千葉事業所設計部 船装設計課防熱グル ープでメンブレン型 LNG 船のタンク内の 防熱関係の設計	なし	27	350	×
② 札幌市 居住	本人	28 ?	A 工造船科	化学機械、産業機械、 同装置の設計・製作・ 施工のH社石狩工場生 産部製作課の1つの班 に所属	105 人	正	札幌	高圧ボイラー、第1種 圧力容器等の溶接作業	伍長	25	350～ 360	×
③ 小樽 居住	本人	28 ?	A 工造船科	鉄道による旅客運送業 のJ社札幌駅営業係出 札	9897 人	正	札幌	窓口での各種切符・航 空券の販売とレンタ カーの受け付けと、契 約団体センターでの業 務	なし	22	330	○
⑤ 小樽 居住	本人	27	A 工造船科	家業の食堂		家従	小樽	調理	なし	N.A.	N.A.	○
⑥ 小樽 居住	本人	28 ?	S ソフト ウェア専門 学校情報シ ステム科	システム設計、ソフト 開発等のM社システム 開発部	30 人	正	札幌	H銀行系のシステム設 計の会社に事実上派遣 されて、飲料の自動販 売機の在庫・売り上げ 等の管理のソフト開発	なし	19	250	○
⑫ 小樽 居住	本人	28 ?	A 工造船科	外装・内装工事の会社	3 人	正	小樽	サイディング（外壁貼 り）と内装の作業	なし	22	250	×
⑬ 小樽 居住	本人	28 ?	A 工造船科	飲料・食品・雑貨配送 のCH社（飲料・食品・ 雑貨卸業のH販売の子 会社）	135 人	正	小樽	H販売小樽支社からト ラックでの商品の配送 と、営業	なし	24	300 ちょっと	○
				（副業）電話通信業のK 社の代理店の従業員の 下				携帯電話を渡して、そ の分のお金をK社の代 理店から貰う		4	40～50	
⑮ 小樽 居住	本人	28 ?	A 工造船科	駐車装置・荷役運搬機 械等の開発設計・製 造・据付け・メンテナ ンスのI機械東統括部 札幌第1センター	1352 人	正	札幌	機械式立体駐車場の保 守・点検・管理	なし	40 強	480～ 490	○
⑰ 小樽 居住	本人	27	A 工造船科	O石油の小樽Iスタン ド所属	52 人	正	小樽	主に重油の配達（船や 学校、病院、ゴルフ場、 銭湯、クリーニング工 場など）	なし	22～3	300 弱	×
	妻	27	小樽F女子高	主婦								
	長男	3										
⑲ 小樽 居住	本人	28 ?	理容関係の 専門学校 （通信制）	理容業のヘアーサロ ンF	1 人と 家従	正	小樽	理容師の仕事	なし	14 弱	180	×
				（副業）道路管理事務 所内の理容店	0	非	小樽	〃	なし	3	40	
	妻	28 ?	理容関係の 専門学校 （通信制）	実家の理容店	母と 本人	家従	小樽	〃	なし		100～ 300	
⑳ 余市町 居住	本人	27	A 工造船科	N札幌販売小樽支店 サービス	482 人	正	小樽	車の整備（車検点検、 一般修理）等	なし	20.5	300 ちょっと	×
	妻	28	後志管内の N商業高	家庭用雑貨の量販店の H		パート	余市	サービス・カウンター での業務	なし		100 未満	
	長男	2										

(実態調査より作成)

(注) ・全社の従業員数については、『北海道年鑑』（2001 年版、北海道新聞社）、『札幌商工年鑑』（2002 年版）、
シィ産業研究所『情報処理・ソフトウェア会社録 2002 年版』も参照。

表 3 初職勤務地×今の勤め先は何社目か

初職勤務地	現在の勤め先は何社目か								
	1社目	2社目	3社目	4社目	5社目	6社目	7社目	8社目	9社目
道 外	①			⑬					
札幌・小樽以外の道内									⑮
札幌	③⑮ ②⑥			⑥					
小樽・余市	③⑨	⑤		③⑦	⑫				

(実態調査より作成)

表 4 高卒就職者の初職継続・離職状況 (1995 年 8 月現在)

初職勤務地	92～95 年度に離職					初職継続
	92 年度	93 年度	94 年度	95 年度	離職の年度不明	
道外	*⑦ *⑩ *⑮ ②⑤	*⑬ ②①			*③②	① ④ ⑧ ⑮ ②② ②③ ③⑥
小計 14(100)	4(28.6)	2(14.3)			1(7.1)	7(50.0)
札幌・小樽以外の道内	*⑮ ③①			③⑤		⑨ ③④
小計 5(100)	2(40.0)			1(20.0)		2(40.0)
札幌						*③ *⑮ *⑮ ②④ ②⑥
小計 5(100)						5(100)
小樽			*②⑧ ③⑦			*⑤ *⑫ ②⑦ *③⑧ *③⑨
小計 7(100)			2(28.6)			5(71.4)
総計 31(100)	6(19.4)	2(6.5)	2(6.5)	1(3.2)	1(3.2)	19(61.3)
A (100)	(19.3)	(11.6)	(8.8)			

(実態調査より作成)

- ・ A → 1992 年 3 月高卒就職者の離職状況(労働省「新規学校卒業者の就職離職状況」より)
- ・ 不明の数ケースを除く。
- ・ 括弧内は%
- ・ *は、95 年 8 月現在、小樽・余市居住者。

③⑧) と多い。あとの 3 名はホワイトカラー労働に従事している。

しかし、プログラマーの⑥が勤めている会社は従業員が 30 人であり、しかも事実上は派遣会社である。①は、A 工時代、成績は常にオール 5 でトップ、3 年生の時には空手部の副部長を務め、しかも 3 年間皆勤であった。このように彼は、学業成績、課外活動、出欠状況のいずれもピンで揃え、A 工では数年ぶりに総合重機業界大手の M 造船に就職した。しかし、96 年 4 月に子会社に出向となり、今後、M 造船への復帰は望めないようである。しかも、2、3 年後には M 造船の事業所の統廃合に伴って岡山県玉野市の事業所に配転の予定となっている。

以上から、総じて、彼らは「ノンエリート」の仕事に従事しているといえる。

後述するように、彼らの給料は概して低い。既婚の 3 ケース中 2 ケースが共働き家族であるということ、同じく 3 ケース中 2 ケース (⑮③⑦) が家賃が安い公営住宅で暮らしているということには、そのことが関わっていると思われる。

3 友人 vs 家族？

本章では、友人関係に着目する。その理由は以下の通りである。彼らのほとんどが、仕事ではなく、余暇の中で生きがいや充実感を感じている（表5）。「仕事」を選択した⑬も、後述のように会社人間ではないし、友人との付き合いを大切にしている。

「友人との交際」、「家族とのつながり」を選択した人がそれぞれ3人いる。後者の3名の中の既婚者2名は、いずれも友人とは家族ぐるみの付き合いをしている。「スポーツ」を選択した①も、友人と硬式テニスや山登りなどを楽しんでいる。よって、彼らの多くが「友人との交際」の中で生きがいや充実感を感じているといえる。

本章では、2つの論点を中心にして検討を進めることにする。1点目は、彼らのプライベートな人間関係は「友人 vs 家族」という二項対立的なものなのかということである。

従来、人々の人間関係パターンは次のようなものであった。若く、未婚の時は友人と付き合い。しかし、結婚後、人間関係は変容する。しかも、そこにはジェンダー的な分断がある。夫の人間関係は職縁、とりわけ企業主義的なそれと家族、妻の人間関係は家族と若干の子どもを介した関係（子縁）等となる。プライベートな人間関係についてみると、夫も妻も、結婚前は友人と付き合っているが、結婚後は家族に内閉化する傾向にある。

果して、彼らにも、こうした従来のような人間関係パターンが当てはまるのか。この点については(1)で検討する。

2点目は、彼らの友人関係の内実に関することである。彼らの友人関係は位置関係が比較的に明確で、付き合い時や場所、一緒にやることが比較的に固定的な関係なのか。すなわち、集団なのか。そして、彼らの友人関係の特質は何か。彼らにとって友人関係とはどういう関係なのか。この点については(2)で検討する。

(1) 友人 vs 家族？

本節では、まず①において、普段付き合っている人を広く取り押さえ、その構成の特徴をとらえる。②では、その中の気の合う親しい友人との関係を取り上げ、その構成の特徴をとらえる。以上のことを踏まえて、③では、彼らのプライベートな人間関係が「結婚前は友人、結婚後は家族」という従来のパターンをとるのかについてみる。

① 普段付き合っている人の構成について

まず、彼らがどういった人達と普段付き合っているのかについてみることにしよう。表6は、彼らが普段付き合っている人の数、彼らとの関係・属性、知り合った時期の推移を示したものである。ここからは、彼らの人間関係の構成が、学縁から職縁へと年を追うごとに移行している傾向がみてとれる。これには、彼らが職場の中堅になってきたということが関係していると思われる。

そして、現在、普段付き合っている人の中に女性の知人・友人のいる人は11人中6人と半数

表5 生活全体の中でどんなこと・時に最も生きがいや充実感を感じるか

趣味・娯楽	③ ⑥
スポーツ	①
学習	
仕事	⑬
家族とのつながり	⑮ ⑬ ③⑤
友人や恋人との交際	⑤ ⑫ ⑫
宗教	
ボランティア	
貯金	
お金儲け	
その他	⑦

(実態調査より作成)

表6 普段付き合っている人の数・関係・属性・知り合った時期（その1）

知り 合った 時期	対象者との 関係・属性	①			③			⑤			⑥			⑫			⑬		
		91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査	91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査	91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査	91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査	91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査	91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査
中 学 以 前	91年当時A工生 クラスメート							2									1		
	部活が一緒	2									2						1		
	その他	2									1						1		
	91年当時他校生	6						2+2	3+3	2+1	4			1					
	〃 社会人													1					
	〃 無職																		
	〃 不明	1															0+1		
高 校 時 代	91年当時A工生 クラスメート	6			5	4	3	5	5		5	3	4	4			7	5	1
	部活が一緒	2															1		
	その他													6					
	不明																		
	91年当時他校生													4					
	〃 社会人													1					
	〃 無職																		
高 校 卒 業 後	〃 不明														2	1			
	職場・仕事関係		5	7+2		10			4	6+4			9+2		2				8+2
	専門学校で一緒											1							
	サークルで一緒																		7
	その他		1							1+1					10	2		0+1	0+2

(注) ・男+女

(実態調査より作成)

- ・職場・仕事関係の人にはその配偶者も含まれるケースあり。
- ・職場・仕事関係の人には以前の職場・仕事関係の人も含まれるケースあり。
- ・恋人も含む。

(その2)

知り 合った 時期	対象者との 関係・属性	⑮			⑮			⑮			⑮			⑮		
		91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査	91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査	91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査	91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査	91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査
中 学 以 前	91年当時A工生 クラスメート	2			1			2	1	1	1		1			
	部活が一緒												1			
	その他	2	3		6			2	1		3	1				
	91年当時他校生	5	1					1+6		1	1	1+1	1	2	1	
	〃 社会人	1									1	1	1			
	〃 無職				1						1					
	〃 不明				1								1+3			
高 校 時 代	91年当時A工生 クラスメート	6			3	1	1	8		1	5			5		
	部活が一緒						8							4		
	その他				5									0+1		
	不明													6		
	91年当時他校生		2		0+2						1			0+1		
	〃 社会人	3			0+2	0+1	0+1							1		
	〃 無職															
高 校 卒 業 後	〃 不明				3	1								1		
	職場・仕事関係		9	12		5+4	19		2	4		3+1	1+2		6	6
	専門学校で一緒															
	サークルで一緒															
高 校 卒 業 後	その他		0+1			1+1	3+2		0+1	0+1				0+2	3+2	1

(注) ・その1に同じ。

(実態調査より作成)

ほどであり、しかも相手の数が少ない。

ところで、彼らの職縁はどういったものか。彼らの場合、企業主義的な職縁は皆無である。それどころか、友人関係と職場社会が重なっている場合もあり、なかには労働社会⁽⁶⁾ともいえるべきものさえある。

⑬の場合がそうである(事例7)。飲料や食品の卸業界において道内大手のH販売という会社がある。⑬は、その子会社で、H販売から小売店までの配送を事業内容としているCH社に勤めている。彼は、H販売小樽支社から小売店までトラックで商品を配送し、合わせて注文を受ける等の営業も行なう「セールス・ドライバー」である。

H販売小樽支社は、後志地方の北半分を営業エリアとしている。その商品の配送を手掛けているのはCH社とE運輸の2社で、そのうち彼と同様の仕事をしている人は、CH社の2人(38歳, 25歳)とE運輸の3人(52歳, 38歳, 35歳)の計5人(全員男性)である。彼にとって職場の仲間とはこの5人を指す。

この職場では、病弱なため仕事が遅くなってしまう最年配の人を、彼を含めた他の5人で「フォローする」こと、遅くても文句を言わないことが、暗黙の了解の上でなされている。それは会社から言われたから行なっていることではない。「会社どうこうちゅうよりも、だから仲いいもんで、なんか1人辛いのに帰るのもあれだ、と。そういうなんか、和ができて。いつの間にか」という言葉に表れているように、あくまでも職場の仲間うちで行なわれている慣行である。

彼は、労働組合がないことに不便と憤りを感じている。そうした中であって、彼は、職場の不満や意見を集約してH販売小樽支社長に直接異議申し立てを行なっている。それだけではない。職場の仲間との遊びを企画し(飲み会: 月1回。キャンプ: 7月, 9月。海水浴: 年に2, 3回ほど)、その取りまとめも率先して行なっている。

彼は、6年前は「稼ぎ人」的であった。会社の定時は7時半から16時半までだが、「自分の仕事終わっちゃえば、やることないんで帰っていいちゅう」ことなので、3, 4時頃に退社することもあった。しかし今では、自他ともに認める職場社会の中堅へと成り変わっている。

② 気の合う親しい友人の構成について

次に、普段付き合っている人の中でも気の合う親しい友人はどういった人達なのかについてみることにしよう。表8は、普段付き合っている人の中の気の合う親しい友人について、その数、彼らとの関係・属性、知り合った時期の推移を示したものである。前項でみたように、普段付き合っている人全体では、学縁から職縁へと移行する傾向にあるのとは対照的に、気の合う親しい友人が現在、職場・仕事関係の人であるケースは3ケースであり、それほど多くはない。

これまでの3回の面接調査で気の合う親しい友人の中に女性がいたとするケースは11ケース中3ケースと少ない。つまり、彼らにおいては、ほとんどの場合、気の合う親しい友人は男性である(以下、表9)。しかも、その外の属性でもかなり共通している。学歴は概して高卒であり、仕事もブルーカラー労働ないしはグレーカラー労働である場合が多い。すなわち、彼らにとって気の合う親しい友人とは、まず何よりも「ノンエリート」の男性なのである。

彼らの中で、気の合う親しい友人関係は重なっているのか。③と⑥が、気の合う親しい友人としてそれぞれ⑤⑥③と、①③⑤③を選択している。①や⑤は、気の合う親しい友人として③⑥をあげてはいないが、お盆や正月などの際にこの5人で会うことがあるとしている。重なっ

事例7（その1）

○職場の同僚の間の申し合わせや暗黙の了解、配慮

⑬ やー、やっぱりだから、残業なんてしないに越したことはなく、うまく回るためにはどうしたらいいかって、すぐ結構話。それは仲いいんですね。全員。

筆者 ふんふんふんふんふん。

⑬ 早く終わりたいもんで、みんな。

……中略……

筆者 例えばどんな風にします？ そのために。

⑬ だからもう、やっぱり人それぞれで、早い人もいれば遅い人もいて、1つの仕事か。

筆者 はい。

⑬ 早い人が遅い人を、ま、フォローしたり。そういうのはもう当たり前。暗黙ですね。それこそ。

筆者 一応あれなんです。最初、（中略）割当ては、

⑬ そうです。ある。あるんです。

筆者 はい。

⑬ だからほんとが、昔は割当てが終わればもう帰れたんすよ。

筆者 はい。

⑬ けども、そういう訳にもなんか行かなくなって（苦笑）、あの、上、トップが代わる。

筆者 はあはあはあはあ。

⑬ みんなが、みんなで終わらせろと。だからもうなんか、そういう自分の分をほんとに終われば帰れるんだけど、遅い人も手伝うと。だから余別まで走って、こう、帰っ、帰ってきて、小樽市内やったり、そういうのはある。

筆者 それはあれっすか、会社から言われて？ あるいは、

⑬ いや、そういうのはないです。よね。

……中略……

⑬ だからH販売としてみれば、なるべく残業代は払いたくない。っていう感じ。

筆者 はあー。で、それとは別に働く人も残業は、働く側もしたくない？

⑬ したくないと。

……中略……

筆者 ⑬さん、早い方ですか？

⑬ 早いんですね。

筆者 あー。じゃ、もっぱらヘルプに回る方ですか？

⑬ ええ。

筆者 へえー。

⑬ いや、っちゃううか、1人なんです。よねえ（笑）。

筆者 あ、遅い人が？

⑬ 1人。6人いる中で1人は遅くて。

筆者 はあー。

⑬ まあ、あとの5人でフォローすると。

筆者 あー。

⑬ （ヘルプするのは）まず2回行って、3回目走るとき（積み込みは1日に1～3回）。

⑬ （仕事か）遅いのはやっぱり年いって人。（E運輸の）52（歳）、一番年いって人。

……中略……

⑬ なんか体弱いんすよねえ。弱いらしいんすよ。

筆者 はー。

⑬ 同じ50、その人の前にいた人が同じぐらいの年だけでも、僕たちとおんなじぐらい（働けたけど）。だから人それぞれ。だからそこはもう言わないけど。

⑬ だから会社どうっちゃうよりも、だから仲がいいもんで、なんか1人辛いのには帰るのもあれだ、と、そういうなんか、和ができて。いつの間にか。

○職場の人間関係、親会社との関係

筆者 あれですね。職場の人間関係、うまく行ってるみたいですか？

⑬ 人間関係はだから、極端な話ゆえば、第1線と、このH（販売の）、小樽の第1線と上じゃあちょっと食い違う。

……中略……

⑬ （トラックで商品の配送をやっている、自分も含めた）6人は、6人とプラス倉、（親会社の）H販売の倉庫の商品管理っちゃうんですけど、商品、商品課は仲がいいと。

筆者 ほおほほおほほ。

⑬ 下は一致団結してると（笑）。

筆者 ほおほほおほほおほおほおほ。はあー。H販売の商品課までは一致団結？ その上が、と、うまく？

⑬ いやー、これがもう、だから、トップ（＝H販売小樽支社の支社長）が全部確認してるんですね。トップ次第で。今、僕がこの会社に入って、トップ3人目なんです。

……中略……

⑬ （CH社とE運輸の）6人の中で3番目なっちゃうって。前は1番下だったんだけど。

筆者 そうですよ。

⑬ そうなると今度、性格的に仕切るタイプで（笑）。年上だろうが仕切って、あれなんすよ。中堅クラスになってる（笑）。もうね、何時の間にか。

筆者 はあー。じゃあ、6人の中で中心ですか？

⑬ 殆ど中心です。な、何やるにしても。

筆者 へえー。

⑬ あ、上に意見するにしても、集めて、僕が集めて、会議やってくれつつて、会議。

筆者 上はあれですか、えーと、直接。

⑬ 直接（親会社であるH販売小樽支社の）支社長に。

筆者 あっ、支社、支社長に。

⑬ 支社長に、課長にゆっても話にならない時は。

筆者 ほおあー。あー。へえー。なるほどね。

⑬ だからその辺がもう、なんか二重会社で（笑）。普通は、トップになんか話出来ないんだけど、バンバン言、言いに行く。組合が無いっちゃうのはね、こんだだけの大きき会社に組合が無いんですよ。持株制で、株持つ、持ちちゃうと組合作れないと。

……中略……

⑬ 持株制なんすよ、（親会社の）H販売は。僕たちはそんなことないんだけど。だから僕たちは作ろうと思えば作れる人だけど、僕たちが作ったとこで僕たちの作る労働組合はH販売には意見できない（笑）。そこがちょっと難しいんすよ。CH社なんで、あく、あくまでも。

筆者 で、支社長にどんな話ばしたんです？

……中略……

⑬ 「これはやめなかったら、これをやめてくれたら、もう、その通り絶対出来ますよ」。でも、支社長は「これは出来ない、これはやめません。でも、なんとかやってくれ」って（笑）。そういう曖昧な感じ。

筆者 で、⑬さん、それは無理ですよ、と？

⑬ いや、無理とは、もう、上司だから否定はしないけど、「いや、だったらいいです。やりますからどういう風にしたらいいですか」（って聞くんです）。したら苦しまぎれに、これゆってくるんすよ。

筆者 はあはあはあはあ。

⑬ 「分かりました、それをやります」。で、やると、今度うまく回らないんですよ。したら、あっちから「やめてくれ」と（笑）。自分でやったことを「やめてくれ」という（笑）、そこをゆわしたくてやるんすよ。

……中略……

⑬ （具体的には）その注文をいつまで受けるかっちゃう話なんすよ。出る間際まで受けて早く出れるかいつつたなら出れない。

……中略……

⑬ （朝、）もうこれから出発するっちゃう間際になって、これ追加、これ追加、これも積んでって、これも積んでって。それをやめないとうまく回りませんっちゃう（こと）。

……中略……

⑬ でも本社の言い分は、前、前もってゆえば分かってもらえるからゆってこいって支社長がゆわけてるんです。けど支社長は小売屋さんいい顔したいから、全部、「いいですよ、何時でもいいですよ」（と言ってる）。そこがまた。

○労働組合について

⑬ ボーナスがすごいカットなってんすよ、最近（笑）。ここ2年、3年。

……中略……

⑬ ボーナス、もう5割減だから。あれですよ、（1回）15万とか。

……中略……

⑬ いっちょ番悪いときが去年のな、冬で、12万ぐらい。

筆者 はあー。

⑬ その、カット、カットで。も、役職者ほどカットされてるんすよ。

筆者 あー、なるほど、なるほど。

⑬ なんか厳しいらしいですよ（笑）。だから、結構。

筆者 えっ、⑬さんも5割減なんですか？

⑬ そうです、そうです。だから役職者は8割減。

⑬ やあ、それ（＝労働組合）はあった方がいいんじゃないですか、絶対。

筆者 そうですね。

⑬ 誰も文句言えないですよ。だってボーナスが下がろうが、残業がカットされようが誰1人文句言う人がいなくて。

筆者 5割減だったら大抵の組合だったらやっぱり、少しは、

⑬ いやあ、ストライキ起こしますよ、絶対。

筆者 ですよえ。

⑬ ええ。そういう風潮じゃないですよ。なんか、うちの会社は。

筆者 いきなりなったんすか、5割減っていうのは？ ドンと来たんすか？

⑬ いや、最初は1割（減）だったんですよ。1割から、次5割で、それで6割じゃないですか。

で、前年度の2割つつたら今年度8割じゃないですか。あの、7割？ そういう感じで、3年、3年で減。減。減。前年度の減、前年度の減つつて積み重ねていくと。

筆者 複利計算みたいな感じですか？

事例7 (その2)

⑬ そんな感じだね(笑い)。

筆者 あー、それすごいですねえ。

⑬ だからまだ給料は多分同級生(の中)で人並みぐらいだと思うんだけど、で、ボーナスはほんとにだから少ないですよ。同級生でいえば、だから年取も少ない。ほかの人と比べれば。

○職場関係・仕事関係の人との社外での付き合い

	関係・年齢	今の所属	親しくなった時期ときっかけ
F ₁₃	38歳	CH社	・入って間もなくっすね(94年3月)。
G ₁₃	25歳	#	・去年入ってきたんですよ。
H ₁₃	52歳	E運輸	・(この人が入社したのが) ぼくの1年あとだから。
I ₁₃	38歳	#	・(この人) は、前からいたです。
J ₁₃	35歳	#	・僕を教えてくれた人がその人なんです。 (中略) でもその人は(元は) E運輸の大型の運転手なんです。 (中略) ヘルプで来ててほんとに教えてくれてたんです。(中略) (トラック1台減車になったため) 常動になっちゃったんすね。(中略) それが3年前くらいで、(中略) (でも、仕事の内容が変わったので) その人がこっちに常動になる時にぼくが教えたんです。
K ₁₃	27歳	H販売小樽支社営業	・(その人が入って来たのは) 4年ぐらい前。新入社員で。
L ₁₃	22歳 K ₁₃ の妻		・元H販売小樽支社の事務職
M ₁₃	22歳	H販売小樽支社業務	・去年(入社)。
N ₁₃	27歳		・元H販売小樽支社営業(3年前に辞めた)。
O ₁₃	N ₁₃ の妻		・元H販売小樽支社の事務職

⑬ みんなおなじなんすよ。みんな一緒にや、行くんですよ。

筆者 は、飲みに行くときも?

⑬ ええ。

……中略……

⑬ 団体が結構多いっすね。

筆者 8人、うん? ⑬さん含めてだから、えーと、6の、8人で?

⑬ (CH社とE運輸の6人とH販売の2人の計) 8人プラス、その、辞めて、辞めた奴とか。辞めても仲いい奴とかいるんで。

筆者 へえー。

⑬ だから10人ぐらいっすよ、大体だから、いつも。

……中略……

⑬ 前もって打ち合わせして。海行くぞっつたら集めて。

筆者 ほおー、へえー、あ、仲いいっすねえ。

⑬ ええ、ええ。その辺は。だからキャンプもするし。

……中略……

⑬ (飲みには) 月1回は行く。

筆者 日決めて?

⑬ そうですねえ。

……中略……

⑬ キャンプ、年に2回っすね。7月、9月。

筆者 へえー。海に行くのは?

……中略……

⑬ また、僕が、あの一、それぞれを連れていくんですよ。バラバラで。それ全員集めるとなると今度大人数になるから、殆ど僕と一緒に今度メンバーが変わってきつていう感じ。

筆者 あ、2、3人ずつぐらいとか?

⑬ 2、3人ずつぐらい。

……中略……

筆者 なんかまとめ役ですね? ⑬さん。

⑬ いやあ、もうだからキャンプとかも全然立ち上げ、あの、会費集めたりとかも全部やります。

筆者 (協会の相談を) される方ですか?

⑬ される方ですねえ。

……中略……

⑬ 上(の人で相談してくる人) は35(歳の人) ぐらいかなあ。35の人ぐらい。新婚さんなんすよ。

……中略……

⑬ うーんと、今年(結婚) 式あげたんだけど、それまでのどういう風にやっらしいとか、なんか、そういうの。

⑬ こ(う) やって言われた(と、仕事のことで同僚が相談してくる)。だから上のトップが個人的に攻撃してくるんすよ。こ(う) やって言われた。それを俺にゆつてくる訳。

筆者 あー。

⑬ 「したら、こうやってやっらしいんでないか」っちゃうのが。

筆者 さっきの話ですとあれですか。それを聞いて、いろんな人から聞いて、で、まとめて支社長に話をする?

⑬ だからもう、うーん、だから僕にはゆつてこないですよ。うるさいと思って。

(注) 下線部は筆者。

(実態調査より作成)

ているのはこの場合だけである。注(5)で述べたように、①から⑧までの人達は高校時代、親しく付き合っていた。それは成績優秀な人が多い、おとなしい人達の集まりで、これ以外に広く人間関係を持っている人は少なかった。

彼らは、気の合う親しい友人と数年以上の長い付き合いを重ねている。しかし、数的には縮小傾向にある。その背景には、少なくとも2つのことがある。

1つは、仕事の多忙化である。後でみるように、彼らの職場では概して仕事量が年々増大している。しかも、彼らの双肩には職場の中堅としての責任が加わるため、ますます忙しくなっている。こうした傾向は、彼らだけでなく、彼らが付き合っている友人にもあるだろう。よって、お互いに忙しく、なかなか会う時間がとれなくなっているのである。

もう1つは、結婚である。彼らの中の何人かは、「いやー、あいつは結婚したら電話もかけてこなくなったんですよ」というようなことを異口同音に語っていた。それは、彼らの友人の中には、結婚後、少なくとも付き合いの一部を希薄化させた人もいるということを示唆する。すなわち、彼らの友人の中には、結婚後は家族だけとの生活の方に比重を移し、その分、友人関係を縮小させた人がいるということである。

では、彼らも結婚すると、友人との付き合いから家族との生活の方へ比重を移し、やがてはプライベートな人間関係を家族に限定するようになるのだろうか。項を改めて分析することにして。

表 8 気の合う親しい友人の数・関係・属性・知り合った時期（その 1）

知り 合った 時期	対象者との 関係・属性	①			③			⑤			⑥			⑫			⑬		
		91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査	91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査	91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査	91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査	91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査	91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査
中 学 以 前	91年当時 A工生																①		
	クラスメート																		
	部活が一緒																		
	その他																		
	91年当時他校生							②+②	①	①									
	〃 社会人																		
高 校 時 代	〃 無職																		
	〃 不明																		
	91年当時 A工生	⑥			⑤	④	③				⑤	③	④				⑦	②	①
	クラスメート																		
	部活が一緒																		
	その他													⑥					
高 校 卒 業 後	91年当時他校生													④					
	〃 社会人													①					
	〃 無職																		
	〃 不明														①	①			
	職場・仕事関係	③	△+△							1									
	専門学校で一緒																		
高 校 卒 業 後	サークルで一緒																		
	その他														⑧				

(注) ・男+女

(実態調査より作成)

・○□◇△は同じグループや人を示す。

(その 2)

知り 合った 時期	対象者との 関係・属性	⑮			⑮			⑳			㉟			㉡		
		91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査	91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査	91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査	91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査	91年 調査	95・ 6年 調査	01年 調査
中 学 以 前	91年当時 A工生							1								
	クラスメート															
	部活が一緒															
	その他	①	① 1				①									
	91年当時他校生	⑤	①				①		①	①				①		
	〃 社会人									①						
高 校 時 代	〃 無職									①						
	〃 不明										N.Q.	1				
	91年当時 A工生				③											
	クラスメート															
	部活が一緒					N.Q.										
	その他													⑥		
高 校 卒 業 後	91年当時他校生															
	〃 社会人															
	〃 無職															
	〃 不明															
	職場・仕事関係		③												①	2
	専門学校で一緒															
高 校 卒 業 後	サークルで一緒															
	その他						1								③+②	

(注) ・その 1 に同じ。

(実態調査より作成)

表9 気の合う親しい友人の属性・その人との関係、親しくなった時期ときっかけ(その1)

対象者 No.	気の合う 親しい 友人	年 齢	学 歴 ・ 関 係	今 の 所 属	親しくなった時期ときっかけ	A
①	T ₁	28, 9 1つ上	●長崎市の県立工業高校出身。 ●以前、同じ寮にいた。今は結婚して他出。 ●元々、M造船千葉事業所設計部船装設計課管絃1グループにいた(①は94年から96年3月までそこにいた)。 ●同じ時期に、a ₁ ①と共にC機工に出向。 ●その後、M造船に戻った。	●防熱グループ	●入社したときにいましたね。 ●(防熱グループに移る前から)元々付き合いはありましたね。 ●最初の頃はあまりプライベート(の付き合いはない)っていうか、会社だけっていう(付き合いだった)。 ●(一緒に趣味をやりはじめたのは防熱グループに入る)前からです。 ●(防熱グループに移ってから)まあ、確かに急速っていうか、(親しくなった)。	○
	U ₁	33, 4	●大阪出身、北海道の国立工業大学卒 ●入社同期 ●きめが細かいという①の個性を評価して防熱グループに①を引っ張った。	●防熱グループ ●それまでは、M造船千葉事業所設計部船装設計課の色々なグループを転々としていた。 ●役職なし	●まあ同じ同期なんで、ずっと同じ船装設計課にいたんですよ。 ●防熱やってからですね、うん、特に話すようになったのは。	○
	V ₁	28, 9 1つ上	●千葉の工業高卒 ●元々は管絃2グループで仕事一緒(∴92-94年まで一緒)。 ●①がC機工に出向してから一緒。	●C機工で配管の仕事	●もう入社当時からいましたんで。 ●いろいろ世話してもらいましたね。	
	W ₁	26	●V ₁ さんの妻		●2年とちょっと(前から)ですね。	
	b ₁	26 1つ下	●高卒、結婚している。 ●元々防熱グループにいた(C機工の人だった)。01年2月に辞めた。	●千葉市内の電気器具の組み立て工場に勤務。	●(親しくなったのは)やっぱり防熱やってからですかね。もう席がすぐ側だったんで。隣だったんで。	○
③	⑤	27	●クラスメート(A工)	●実家の食堂で家従	●高校時代。話をしているうちに親しくなった(アルバイトも一緒だった)。	○
	⑥	27, 8	〃	●システム設計、ソフト開発等のM社	〃	○
	②	27, 8	〃			○
⑤	A ₅	27, 8 同い年	●大学中退 ●小・中一緒。	●郵便局に勤務。	●小学校から。	
	E ₅	27, 8 同い年	●前職(Sフェリー)で同期。	●新潟支社に勤務。	●入社して1年立ってから。 ●その友達が車がない時に家まで送ってったりは(した)。	
⑥	⑤	27	●クラスメート(A工)	●実家の食堂で家従	●③の友人だった。	○
	②	27, 8	〃		●今年(95年)なって会いました。	○
	③	27, 8	〃	●鉄道による旅客運送業のJ社	●1年の宿泊研修(4月19日～21日まで)、ニセコのスキー場。同じリフトに乗った。	○
	①	27	〃	●M造船C機工エンジニアリング	●③の友人だった。	○
⑫	S ₁₂	31, 2	●高校時代に入っていたロックンローラーのチームの先輩。 ●(95年調査時)同じラップのグループのメンバー。	●札幌在住。 ●電力会社の孫請けの会社(土木建設、海洋調査、電設工事)で土木作業。⑫もこの人のつてで一時この会社で働いた。	●知り合ったのは17(歳)ぐらいの時。 ●(結構遊ぶようになったのは)20歳ぐらいですか(働いて2年目、93年から)。 ●きっかけは、札幌と一緒に遊びに行くようになったんですよ。(筆者:札幌のディスコ?)ええ。	
⑬	⑩	27, 8	●公務員試験向けの専門学校卒 ●クラスメート(A工)、3年の後期にやったアルバイトも一緒。	●後志管内の共和町で郵便配達の仕事。	●高校1年の研修旅行(4月19日～21日)	
⑮	O ₁₅	27, 8 同い年	●高卒? ●同期	●同じ職場	●入社してすぐ。	○
	P ₁₅		〃	〃	〃	○
	Q ₁₅		〃	〃	〃	○

(注)・A:○→複数で付き合っている。

(実態調査より作成)

表9 気の合う親しい友人の属性・その人との関係、親しくなった時期ときっかけ（その2）

対象者 No.	気の合う 親しい 友人	年 齢	学 歴 ・ 関 係	今 の 所 属	親しくなった時期ときっかけ	A
⑬	e ₁₈	28, 9 1つ上	●飲みに行ったところで親しくなった。	●小樽の警備会社に勤務。工事現場で棒振りの仕事。	●親しくなったのは去年(94年)かな。 ●初め喧嘩しそうになって、して、止められて、スナックで。して、2回目会った時から何となく喋ったら趣味合って、話合って。してその日のうちにもう、うん、2, 3軒一緒に飲みに行っ、電話番号教えてもらって、こっちも教えて。	
⑳	A ₂₆	27, 8 同い年	●A工定時制卒 ●小・中同じ	●小樽の家電販売の会社(無店舗)に勤務。修理に行ったり、発注受けて品物を据えつけた。	●小学校からガッコ同じ。家近いし。中2から仲良くなった。 ●(91年調査時、一番親しい友人グループの1人) ●(95年調査時には時間的に合わなくて、付き合い無し) ●(01年調査時) (また会うようになったのは) 去年(=00年) ぐらいっすね。	
㉑	P ₃₇	27, 8 同い年	●小・中同じ	●東芝の照明器具の孫請け(札幌)。	●2000年1, 2月同窓会で会って。小・中の頃はそれほど親しくはなかった。	
㉒	b ₃₈	30	●以前、今の職場にいた先輩。	●新琴似支店(札幌)	●97年	
	c ₃₈	35	●Y高卒(余市、道立) ●R ₃₈ (職場の先輩、今は有線放送の会社に勤務、余市)の友達。R ₃₈ とY高同期。	●タイヤ屋の従業員	●98年6月ぐらい(㉒が営業に移って間もない時)。 ●(R ₃₈ の紹介で) 車の修理を殆どうちの方でやるようになったっていう。 ●(ほかに d ₃₈ , e ₃₈ も同じグループ。Y高の同期)。	

(注) ・A: ○→複数で付き合っている。

(実態調査より作成)

③ 「結婚前は友人、結婚後は家族」か？

彼らもまた、結婚後はプライベートな人間関係を家族に限定する傾向を強めるようになるのだろうか。この点についてみる前に、彼らの恋人あるいは配偶者の属性について確かめておくことにしよう(表10)。先述のように既婚者は3名いる。そして、未婚の8名中2名に恋人がいる。

彼らの恋人・配偶者の最終学校は、彼らと同様、概して非進学系の高校である。恋人の現在の仕事及び配偶者の結婚前の仕事についてみると、販売や理容師といったグレーカラー労働がそれぞれ1ケースずつ、営業・事務といったホワイトカラー労働が3ケースとなっている。

ホワイトカラー労働といっても、彼女たちの場合、「エリート」としてのそれではない。しかもそれは、男性労働者をサポートする補助的な仕事である。昇進は最初からデッドエンドであり、技能向上の可能性もかなり限定されている。それどころか、結婚後あるいは第一子誕生後ほどなくして退職することが半ば折り込み済みとなっており、勤続自体がそこでデッドエンドとなることが事実上、予め決まっている。事実、結婚前こうした労働に従事していた2名のいずれもが結婚後、退職している。そのうちの1名は再就職しているけれども、その仕事は家庭用雑貨の量販店でのパート労働であり、前職との連続性は全くない。

彼らの恋人や配偶者もまた、彼らと同様、「ノンエリート」である。しかしながら、彼女たちは、職場においてあるいは家庭において、男性のいわば「銃後の守り」を受け持っており、その点で彼らとは異なる。彼女たちのライフコースが、学校歴と性別によって二重に階層化されているということが示唆されているといえよう。

表 10 恋人・配偶者について

対象者 No.	A	年齢	最終学校	恋人あるいは配偶者の属性 勤め先	仕事内容	親しくなった時期ときっかけ
①	×					
③	×					
⑤	×					
⑥	×					
⑫	×					
⑬	○	30	(おそらく高卒)	駅前のアーケード街にある婦人服の店。	4店舗のうちの1つを任されている。雇われ店長。店長になってから10年以上。	(95年調査時には既に付き合っていた)
⑮	×					
⑲	◎	27	小樽F女子高(私立)	(現在)主婦 (95年)病院	医療事務。受付。	(95年調査時には既に付き合っていた)
⑳	○	24	札幌S高校(私立女子高)	札幌市役所	契約職員みたいな感じ。組合の書記。	(95年調査時には付き合っていない)
㉗	◎	28	商業高校(小樽, 道立) →理容関係の専門学校(通信制2年)	(現在)実家の理容店。 (95年)札幌の理容店	理容師。 理容師。	中学校, 同級生で彼女だった。高校時代は付き合っていなかった。卒業後, 同窓会で再会した。向こうが彼氏と別れてまた付き合うようになった。1992年10月27日。
㉘	◎	28	商業高校(仁木町, 道立)。㉘同様, 余市出身	(現在)家庭用雑貨量販店のH (95年)H信金本店(余市)	サービス・カウンターでの業務。 テラーの仕事。	去年(94年)の9月。Y ₃₈ たちの仲間うち。遊んでいるうちに(親しくなった)。去年(94年)9月, 十勝の走行会に一緒に行った。

(注) ・A→×は未婚で恋人がいないケース, (実態調査より作成)
○は未婚で恋人がいるケース, ◎は既婚のケース。

さて、彼らのプライベートな人間関係のパターンは、「結婚前は友人—結婚後はもっぱら家族」という二項対立的なものなのだろうか。既婚者の3名は、結婚しても気の合う親しい友人と付き合い合っている。しかも、3名とも、家族と完全に別立てで、そうした友人と付き合い合っているのではない。家族ぐるみの付き合いもしている。

表 11

③⑦ (家族ぐるみで付き合う時も) ありますね。うん。

筆者 仲間だけで付き合う時も？

③⑦ あります。うん。

③⑧ 30歳の先輩(b₃₈)んところは結婚してますから、子どももいますから、そこは大体家族ぐるみですけども。

表 12

⑬ その人も結婚して、子どもいて、して家が近所、今ね、そいで大体うちに、まあ奥さんと(1歳半の)子どもと3人で大体うちに来てうちで酒飲むって感じだな。今は。……中略……

⑬ 今月はね、3、3か、3、4回来たかな、もう。

筆者 はあー。はあー、なるほど。あれっすね、家族ぐるみの付き合い？

⑬ うん、殆どもう、うん、みんなそう、うん。あとは俺らがその、e₁₈さんの実家に酒飲みに行ったりとか、あの、家に。よ、呼ばれて。

……中略……

表 11 気の合う親しい友人との今後の付き合いについて

対象者 No.		
①	筆者 今後も、じゃああれですね。あの一、ずっとお付き合いを続けていくって、続けていけるってことになりますよね？ ① まあそうですよね。 筆者 うん。は一。で、もう家族ぐるみで付き合ってますもんね？	① まあ、そうですね。はい。 筆者 あれっすかね。あの一、①さんも結婚したらば、あの、奥さん共々付き合っていければいいなあって、やっぱ思いますもんね？ ① ま、なるでしょうね。うん、自然と。
③	○今後どのような付き合いをしていきたいか 筆者 今後は、あの、このお付き合いを続けて、 ③ うん、そうですね。 ○結婚後の付き合いは家族ぐるみか仲間ぐるみか ③ 家族よりはやっぱり仲間の方がいいと思うんですけど。	筆者 っていますのは？ ……中略…… ③ 言えない、言えないっていうか、いろいろなやっぱ話もあるじゃないっすか。(中略) 仕事関係とか。(中略) そういうのはやっぱり仲間内だけでやっぱ話したほうがいいとは思うんですけどね。
⑤	○今後どのような付き合いをしていきたいか 筆者 今後も A ₃ さん、E ₃ さんとはしたい？ ⑤ ですね。はい。 ○結婚後の付き合いは家族ぐるみか仲間ぐるみか ⑤ 相手にもよります。	筆者 (中略) 結婚する方にもよりますか。⑤さん自身はどうです？ できれば家族ぐるみ、したいです？ ⑤ どうなんだろう。うーん、基本的には、うん、奥さんがしなくていいってこうやって、あれしたらそれまでです。うん。
⑥	○今後どのような付き合いをしていきたいか ⑥ (今後もこれまでのような付き合いを続けたいか) そうですね。当分、こんな状態で行きますもんね。ええ、行きたいですね。	○結婚後の付き合いは家族ぐるみか仲間ぐるみか ⑥ これ (苦笑)、これは仲間だけでですね。
⑫	○今後どのような付き合いをしていきたいか ⑫ 普通にですね。 筆者 長く続けば、 ⑫ ま、例えば何ヵ月連絡取らなくても、電話かけたら普通どおりにまた話せば、今もそうすからね。 筆者 はあー。 ⑫ だ (から) そういうのがいいじゃないっすかね。	○結婚後の付き合いは家族ぐるみか仲間ぐるみか ⑫ いやあ、向こうはもう家族ぐるみなんで、僕もやっぱり奥さんできたら、あのまあ、連れて (笑い)。 ……中略…… ⑫ (S ₁₂ の家に) 行ったりして、奥さんも知ってるし、子ども 2 人も知ってますよ。
⑬	○結婚後の付き合いは家族ぐるみか仲間ぐるみか ⑬ そうですね。今も同じだから、多分なんも変わるんないじゃないっすか。	
⑮	○今後どのような付き合いをしていきたいか 筆者 えーと、今後もじゃあ一緒にゴルフ行ったりとかってことは続けたい？ ⑮ そうですね。	○結婚後の付き合いは家族ぐるみか仲間ぐるみか ⑮ うーん、別に、うん、そんな時にあれば、まあ付き合いますけど。別に。
⑰	○今後どのような付き合いをしていきたいか ⑰ 多、多分ずっ、ずっとこのままだね。 ○結婚後の付き合いは家族ぐるみか仲間ぐるみか ⑰ うちのおっちゃん自体も、そういう、普段 (e ₁₈ さん家族が) うちに來てる時の方がもう、酒飲めるみたいなんだよね。 ⑰ 向こうは向こうで、その、家族で来て、して向こうは向こうでうちに來て酒飲んでて夫婦喧嘩してみたりとか。 筆者 はあー。	⑰ したけど、俺らも別に、気になんないから。 筆者 逆もあります？ ⑰ 逆もあるし。 筆者 あー。 ⑰ そういうのは、相手もなんも気になんないから (笑い)。 筆者 あー。 ⑰ だ (から)、もう、何でも別にし出しても、いいっちゃうか。 ……中略…… ⑰ 昼間もたまに、1 人でいて (e ₁₈ さんの奥さんが) 家來てるみたいだし。
⑲	○今後どのような付き合いをしていきたいか 筆者 じゃ、今後もずっと付き合いは続けて行きたい？ ⑲ うーん、そうです。ね。	○結婚後の付き合いは家族ぐるみか仲間ぐるみか ⑲ 将来的には、家族ぐるみで付き合う予定なんです、ほんと、2 人の中では (笑い)。
⑳	○今後どのような付き合いをしていきたいか ⑳ (今後もこれまで同様の付き合いをしたいか) ええ、もちろんです。 ○結婚後の付き合いは家族ぐるみか仲間ぐるみか ㉑ (家族ぐるみで付き合う時も) ありますね。うん。 筆者 仲間だけで付き合う時も？ ㉑ あります。うん。	筆者 両方で行きたい？ ㉑ そうですね。 筆者 はあー。 ㉑ やっぱり女だったら女なの、女の子同士の話、会、会話もあるだろうし、男は男同士の会話もあるし、グループならグループなりの盛り上がり話もあるだろうしっていうか、ま、それぞれ分けて、分けてるっていう訳じゃないけど、それぞれのやっぱそういう時、気分があったりするから、それに合わせて臨機応変にやりますよ。
㉑	○今後どのような付き合いをしていきたいか ㉑ ま、そうですね。このまま (今の付き合いを) 継続して行きたいですね。 ○結婚後の付き合いは家族ぐるみか仲間ぐるみか	⑳ 30 歳の先輩 (b ₃₀) さんは結婚してますから、子どももいますから、そこは大体家族ぐるみでですけども。 筆者 はい。 ㉑ c ₃₈ さん (との付き合い) は個人的とか、個人ですね。

(注) ・下線部は筆者。

(実態調査より作成)

⑬ (その時は e₁₈ さん家族も) 来ててとか、あとは俺らが先に行ってて、後から、うん、来るとか。

⑮ うちのおっちゃん自体も、そういう、普段 (e₁₈ さん家族が) うちに來てる時の方がもう、酒飲めるみたいなんだよね。

……中略……

表12 気の合う親しい友人との付き合いの内容(その1)

対象者 No.		
①	月／週に何回くらい会った、一緒にどんなことをするのか ① (T, U, とは) テニスとか、山登ったりとか。はい。まあ、たまに飲みに行くという(98年頃から、毎週金曜日の夜に2時間くらい、船装設計課の若い人を中心とした8人ぐらいと硬式テニスをやっている。97年頃から、ほぼ同じメンバーと年に2、3回ぐらい、富士山や中央アルプス、谷川岳などに山登りや、尾瀬などに旅行に行っている。 ① (b₁とは) その人も同じく、その、山登り、テニス、あと、うん、飲みに。(中略)今は結構、交替制だからなかなか会わないんですけどね。 筆者 あれですか、①さん含めて4人で飲み会? やるんですか? ① まあ大体そうですね。うん。ま、予定がなければ、その人の。 ……中略…… ① (月に) 1回とかそのぐらいですね。 筆者 どういったところですか? 居酒屋行っ、 ① そうですね。居酒屋とか、はい。 筆者 その後は? ① その後、その後はまあ大体、決まりはゲームセンターとか。まあ、そんな。 筆者 あー、なるほど。カラオケは? ① カラオケはしないですね、最近は。 話の内容 ① どちらか(て)いうと、僕は聞く方が多いですね。(聴き取り不能)まあ、大体上司の悪口とか。そんな。うん。そんなもん。 ……中略…… 筆者 どんな悪口出ます? ① うん。 筆者 ここだけの話。 ① えっ、やあ、あの人は動かないとか、なんか。	……中略…… ① うーん。もう、自分のことしかやらないと。そんな話。 ……中略…… 筆者 そういう上司は多いです? ① まあ、そうですね。結構、やる、うん、やる気のない人は結構多いですね。(聴き取り不能)では。うん。結構、もう、ねえ。その、上司が、その上の上司が、ね、無理な要望とか言ってるから。うん。それに対してもう、やる気がないっていうか。 ……中略…… ① 上司はなんも知らないから。うん。 筆者 はあー。 ① うん。4人だけに任せるとか、そんな話ですからね。 筆者 はあー。 ① あと、うん、現場の人が動かないとか。 ……中略…… ① あとはまあ、こっちと意見が合わ、違うとか。 ……中略…… ① 自分のあれしか考えてくれないとか、面倒だとか。こっちはどちらかというと、トータル・コストダウンっていうか。 筆者 はい。 ① うん。どっちがやった方がコストがダウン出来るんだって、そっちの方を考えるから。だから意見が合わない。 筆者 あー。 ① うん。うちがやっていると現場がやるのとどっちが安いんだとか。うん。トータル・コストダウン。 ……中略…… 筆者 コストの話は現場から出ます? ① は出ないですね。うん。結局要は、面倒だからって、そういう話になって。 ① まああとは、普通、普通の世間話ですね。うん。僕はどちらかいうと聞く方が多いですね。
③	月／週に何回くらい会った、一緒にどんなことをするのか ③ 最近会っていないなあ。正月ぐらいかなあ、あの一(中略)⑤とあと⑥? あと⑥と4人、3人か(と会った)。 ③ うんやっぱり飲みに行ったり。カラオケ。ボーリング	話の内容 ③ やっぱり仕事の話だとか。 筆者 ああ。 ③ とか、うん、いろいろと。そういうのメインにして、ま、あとはいろいろ馬鹿げた話ばして(笑)。 ……中略…… ③ (高校時代の話は) うーん、ちらっとすけどね。
⑤	月／週に何回くらい会った、一緒にどんなことをするのか ○A₅ ⑤ 週1で(会う)。 ……中略…… ⑤ だから、うん、空いた時間2人でどっか適当に喋ったり。 筆者 車流したり? ⑤ うん、どっか行ったり。 ○E₅ ⑤ 今向こう転勤してるんで、電話ぐらいですね。帰ってきたら遊びますけど。 ……中略…… 筆者 じゃ、年に1、2回ですか? 会うのは。 ⑤ そうですね。大体。うん。 ……中略…… ⑤ 電話しちゃ、メールですね。	⑤ (帰ってきたら) 飲みに行ったり、買い物行ったり。 筆者 カラオケ行ったり? ⑤ 何でも(笑)。 話の内容 ○E₅ ⑤ メールっても日常の出来事するぐらいで。 ……中略…… ⑤ まあ、その中に仕事(の話)も入ってますからね。うん。改まって仕事だけちゅう感じとかはなんない。 筆者 世間話とか? ⑤ 世間話から何から全部。
⑥	月／週に何回くらい会った、一緒にどんなことをするのか ⑥ いやあ、これこの頃全然いんすよ。 筆者 ああ、忙しいですもんねえ。 ⑥ 年1回会うだけなんですけど。 ⑥ 遠出行って飲んで終わって感じじゃないっすかね。 (……中略……) で、適当に回った後、今度飲んでカラオケして、うん、解散って。 話の内容 ⑥ もう、仕事(の話)っていうより、それぞれの愚痴言い大会なってますけど。	……中略…… ⑥ もう、大、大体聞けば、残業多くて給料安いっていうパターンなんですけど。 ……中略…… ⑥ あと休みないだの。あとはその次に自分とこの利点言い合ったりして。 筆者 はおー。 ⑥ フォロー的な感じなんすかね。 ……中略…… ⑥ まあ大体仕事か。まあ、車、車ちょっと話すぐらいっすかねえ。 ⑥ あとは、まあ、元A工生の消息についてとか。
⑫	月／週に何回くらい会った、一緒にどんなことをするのか ⑫ 付き合いはあんまりそう頻繁に(はない)、向こうは家庭持ってるんで。 ……中略…… 筆者 ってことは月に1回会うか会わないか? ⑫ そうっすね。最近だと。 ……中略…… ⑫ (自分が)札幌行ったりとか。向こう実家小樽にあるんで、そんときとか。 ……中略…… ⑫ 外であつたりとか。ええ。まあ、酒飲みに行ったりとか。そういう感じ	ですね。 ……中略…… ⑫ その人と行くときは全くもう普通のスナックとか、そういう類っすね。 話の内容 筆者 えーと、悩みの相談といえます? ⑫ いや、まあいろいろっす。ま、今回引越す、ま、小樽に帰って来ることも相談しましたし。仕事のこ、前の仕事の事でも、相談したんすよ。ええ、もう、全般ですね。何でも。

(実態調査より作成)

表 12 気の合う親しい友人との付き合いの内容 (その 2)

対象者 No.		
⑬	月／週に何回くらい会った、一緒にどんなことをするのか ⑬ まだ、いまだに、ずっと、1 か月に4、5回は毎週のように会う感じ。 ……中略…… ⑬ だから毎日会う時もあるし。 筆者 えっ、毎日？ ⑬ 3、3日連チャンとか。冬なると結構会う、会ったりする。スノーボードで。 ⑬ えーと、だから(⑩)は実家に帰ってくる。あつちはやっぱ公務員だから、休み多くて。それでよくちょくちょく帰って来て。(その時に会う) 筆者 はあー。へえー。 ⑬ 札幌にいた時はもう、行き来してたんだけど。 筆者 あ、⑩さん、札幌にもいたんですか？ ⑬ ずっと札幌にいたんです。 ⑬ まあ、カラオケ、酒、スノーボードと。基本の。 ……中略…… 筆者 小樽の飲み屋？ ⑬ はい。飲み屋っていうよりも、食べ物屋さん。 筆者 はおはおはおはお。で、行って、二次会でカラオケ？ ⑬ カラオケはまた別で。 ……中略…… ⑬ いや、個々の彼女と3人で、とか。こっちの彼女と4人でとか。 筆者 あー、あ、なるほど。へえー。スノーボーは全道？ ⑬ 全道っちゃうか、こっち側ですよね、やっぱり、やるんなら。ニセコとか、後志方面は多いすから。 話の内容 ⑬ いや、もう何でもしますよ。だから、ほんと宗教の話から政治の話まで(笑)。 筆者 へえー。あ、宗教の話っていいますと？ ⑬ や、もうなんか、深い、深い話？ 酔っぱらってるから、よくわかんない(笑)。 筆者 あれですか、オウムの事件とか、ライフスペースの話とかですか？ ⑬ ああ、なんか、自分のあれとか。自分だったらどうだとか。 筆者 はー。政治の話っていいますと？ 例えは。 ⑬ だから、あつちは郵便局で、今なんか、民営化になるだのどうのこうので、騒いでて。	筆者 小泉改革で？ ⑬ 改革で(笑)。それで、何年前からやってましたよ、それ。政、だから、前まで選挙行っても、選挙行くんですけど結構。 筆者 はあはあ。 ⑬ 自民党に入ってたのが、なんか、この頃民主党だとか。 筆者 あ、⑩さん？ ⑬ ええ。 筆者 あー。あつ、 ⑬ や、自分の立場が危うくなるから。 ……中略…… 筆者 やっぱ民営化、反対ですよね、⑩さん？ ⑬ やあ、もちろんそうじゃないですか。やっぱり。 ……中略…… ⑬ お互いの仕事の話もそうだし。 ……中略…… ⑬ 老後の話とか(笑)、もう全部ですよ。だからもう、これだけなんです。あ、俺の全部を受けて話せ、聞いてくれるのは。 筆者 へえー。 ⑬ ほかに人にゆったら茶化されるっていうような話でも茶化さないで、普通に聞ける。そういう。直ぐにはそういう関係にはなかったけど。 筆者 はあー。何時ぐらいからそういう風になりました？ 親しくなりました？ ⑬ いやあ、もう…5、6年(前か)かなあ、やっぱり。5、6年。 ……中略…… 筆者 あれっすか、あの一、⑩さんが話をするとか、どっちが話をするっていうのじゃなくてお互いですか？ ⑬ ずっと喋ってますよ、2人で。ええ。 筆者 はー。 ⑬ もう、黙ってないで。どっからずっと喋ってる(笑)、感じて。 筆者 へえー。いいすねえ。 ⑬ ええ。 ……中略…… ⑬ (老後の話とは)や、もう年金の話で。 筆者 あー。 ⑬ うん。あいつの勤めで、自分で(⑩の姉が勤めている保険会社の個人)年金掛けるくらい。 ……中略…… ⑬ 年金なんか当てになんないつって。自分でかけるべ、つつって。
⑭	月／週に何回くらい会った、一緒にどんなことをするのか ⑭ (ゴルフ行くこと)が、多いですね。今は。 筆者 うーん。仕事の後飲み、あの一、6年前ですとね、仕事の後みんな、あ、飯食いに行ったり、飲みに行ったり。最近ないすねえ。 話の内容 ⑭ 愚痴みたいのはいいますけどね。 筆者 あ、お互いに？ ⑭ うん。	筆者 仕事のこと、それからゴルフのことですよ？ ⑭ うん。あと別に下らない話(笑)。 筆者 ふーん。仕事の話でどんな話がよく出ます？ ⑭ うーん。文句とかも出ますけどね(笑)。愚痴とか。 筆者 はあはあ、どんなようなことですか？ ⑭ 誰々の愚痴とか(笑)、下の後輩とかのこともありますけどね。 ……中略…… ⑭ あまり、ずるいっちゃうか、なんか、自分で行動しない、あんまり動かないすからね。
⑮	月／週に何回くらい会った、一緒にどんなことをするのか ⑮ その人も結婚して、子どもいて、して家が近所、今ね、そいで大体うちに、まあ奥さんと(1歳半の)子どもと3人で大体うちに来てうちで酒飲わって感じだな。今は。 ……中略…… ⑮ 今月はね、3、3か、3、4回来たかな、もう。 筆者 はあー。はあー、なるほど。あれっすね、家族ぐるみの付き合い？ ⑮ うん、始どもう、うん、みんなそう、うん。あとは俺らがその、e18さんの実家に酒飲みに行ったりとか、あの、家に。よ、呼ばれて。 ……中略…… ⑮ (その時はe18さん家族も)来ててとか、あとは俺らが先に行って、後から、うん、来るとか。 ⑮ うちのおっちゃん自体も、そういう、普段(e18さん家族が)うちに来てる時の方がもう、酒飲めるみたいなんだよね。 ……中略…… ⑮ ただ最後はみんなもう、酔っぱけてしまって、訳わかんないし、うん、いつ帰ったかわかんないこともあれば、うん、表(を)ってみたら吐いてることもあるし。 筆者 (笑)なるほど。 ……中略…… ⑮ だ(から)、やっぱり、旨い酒が飲めるっちゃうか。	話の内容 ⑮ して、まあ、ね、仕事の話もすれば、そういう…趣味の話っちゃうかな、そういう、なんかかんか、うん、話してんだべね。 ⑮ 子どもの話とか。 ……中略…… ⑮ だから子どもの話したり、うん、あとはま、仕事の話したり。 筆者 はあー。 ⑮ あとは何ちゃうの、その時その時の話で、テレビみててなんか面白いことやってれば、うん、だからそういう話してみたり。 ……中略…… ⑮ あとはま、一緒に子ども連れて？ どこに行くとか、どうこうってそういう相談とか。 筆者 ほおー。 ⑮ ま、相談っちゃうてもただ話だけで、何時行っちゃう話になんないけど。 筆者 あー。お忙いすもんね。 ⑮ お、お互い、ね、仕事あるから。ただ、行きたいあっていう話とか(苦笑)。 筆者 あー。どこ行きたいす？ ⑮ 取り敢えず、来月(札幌円山)動物園行ってみるかっというような話だけども。

(注) ・下線部は筆者。

(実態調査より作成)

表12 気の合う親しい友人との付き合いの内容(その3)

対象者 No.		
㉔	月/週に何回くらい会った、一緒にどんなことをするのか (会うのは)2ヵ月に1回くらいかな。 ㉔ 大体会う時はお酒飲む。 ㉔ 1ヵ月に1回くらい(電話で話す)。 話の内容 筆者 えーと、仕事のことは結構色々話をします? ㉔ ええ、そうです。 筆者 将来のことも? ㉔ はい。 ㉔ 将来の、うん。 筆者 先程の(転職のことを)、相談して? ㉔ そうですね。あんまり他人には、具体的に言わないんですけど、彼には。 筆者 …で、あの、職員の教員になるってことも彼に? ㉔ はい。 ……中略…… ㉔ うん、(アドバイスなどが)あったけど、そんなに覚えてないですね。 ……中略……	㉔ ぼくはこう何でも悩むタイプなんですけど、彼は何でも行動しないとダメだって言うんですよね、ぼくに。 筆者 ほおー。どっちだったのあれっすか、あの一、背中ば押してくれる? ㉔ うん。 筆者 ほおー。あれっすね、心強い友達? ㉔ うん、ですね。 筆者 はあー。あの一、話は取り敢えず、まず最初に聞いてくれます? ㉔ かなり、聞いてくれます。 ……中略…… ㉔ 大体会う時はお酒飲むから、たまに聞いてくれない時ありますけど(笑い)。喧嘩になりそうな時もありますけど(笑い)。 ㉔ そういふの(=女性の友達)が2人いて、たまに会っていることについて)も怒られたりしますけどね。 ……中略…… ㉔ 彼女にそんなに、言えないですよ。女の子と遊びに行っていく風、ぼくは。 ……中略…… ㉔ 彼女に説明できないのに、どうして遊んでるのっていう風に怒られるんです。 ……中略…… ㉔ 怒られることはなんもないんですけど。
㉕	月/週に何回くらい会った、一緒にどんなことをするのか 殆ど飲みに行くことが多い。(中略) 筆者 月にどれくらいですか? ㉕ うーん、多い時で、やっぱ多、多くても4回くらいかな。札幌だから、こっち帰って来た時しか会えないんですね。	話の内容 ㉕ 何の話してんだろなあ。うーん、女関係の話かなあ、殆ど。 ……中略…… 筆者 仕事の話とかは? ㉕ は、しないっす。 筆者 うーん。女関係の話っていうのは、あの、P₃₇さんの付き合ってる? ㉕ の、話もあるし、いろいろ。メル友の話とか。
㉖	月/週に何回くらい会った、一緒にどんなことをするのか ○C₃₈と ㉖ うーん、最近では1ヵ月に1回も会ってないっすね。 ……中略…… ㉖ 電話で話したり。 筆者 それは結構ありますね? ㉖ ええ。 ○C₃₈と ㉖ 大体2ヵ月に、 筆者 1回くらい? ㉖ 1回くらいっすか。 ㉖ 電話はそんなでもないっすけど、営業やってる時(98年5月~01年4月末日)はもうしょっちゅう顔出しましたね。サボりに(笑い)。 筆者 はあはあはあ。 ㉖ タイヤ屋さんですから、やっぱ、暇な時期っちゃうのありますから。 筆者 はあー。 ㉖ 忙しい時期はたまにこっちが暇であれば手伝ったりして。	話の内容 ○C₃₈と ㉖ 車の話から始まって、それから、まあいろんなドンドンいろんな話になっ て。 筆者 はい。仕事の話も? ㉖ 仕事の話は、まあ、たまにしますね。 筆者 あ、そんなに多くはないと? ㉖ ええ。 ……中略…… ㉖ 車から、ま、あった出来事ってのもありますし。 筆者 出来事っていうのはそれぞれのことにあった? ㉖ うん、そうですね。「昨日こういうことあったんだよなあ」とか。 筆者 うーん。 ㉖ 「今日混んでた」とかって(笑い)、そういう下らない話からなんです。 ……中略…… ㉖ 新型車出れば、「この車どう思う?」とか。 筆者 ほおー。 ㉖ N社の車であれば、「これどうなんだ?」とか。 筆者 ほおー。

(実態調査より作成)

18 ただ最後はみんなもう、酔っぱけてしまって、訳わかんないし、うん、いつ帰ったかわかんないこともあるし、うん、表(を)って見たら吐いてることもあるし。

筆者 (笑い)なるほど。

……中略……

18 だ(から)、やっぱし、旨い酒が飲めるっちゃうか。

表11

18 向こうは向こうで、その、家族で来て、して向こうは向こうでうちに来て酒飲んで夫婦喧嘩してみたりとか。

筆者 はあー。

18 したけど、俺ら別に、気になんないから。

筆者 逆もあります?

⑮ 逆もあるし。

筆者 あー。

⑮ そういうのは、相手もなんも気になんないから（笑い）。

筆者 あー。

⑮ だ（から）、もう、何でも別に出しても、いいっちゃうか。

そして、2001年11月に結婚予定の⑬も、気の合う親しい友人と、双方の恋人も交えた恋人ぐるみの付き合いをしている。

表12

⑬ （一緒にやることは）まあ、カラオケ、酒、スノーボードと。基本の。

……中略……

筆者 小樽の飲み屋？

⑬ はい。飲み屋っていうよりも、食べ物屋さん。

筆者 ほおほおほおほお。で、行って、二次会でカラオケ？

⑬ カラオケはまた別で。

……中略……

⑬ いや、個々の彼女と3人で、とか。こっちの彼女と4人でとか。

彼は、結婚後もこうした付き合いは「多分なんも変わらないんじゃないっすか」（表11）と述べている。同じく恋人がいる②⑥も、気の合う親しい友人と家族ぐるみで付き合うことを望んでいる（表11）。

恋人がいない6名では、結婚後、気の合う親しい友人との家族ぐるみの付き合いを望んでいるのが2名、「わからない」とするのが2名、望んでいないのが2名となっている。

表11

筆者 あれっすかね、あの一、①さんも結婚したらば、あの、奥さん共々付き合っていければいいなあって、やっぱ思いますもんね？

① ま、なるでしょうね。うん、自然と。

⑫ いやあ、向こうはもう家族ぐるみなんで、僕もやっぱり奥さんできたら、あのまあ、連れて（笑い）。

……中略……

⑫ （S₁₂の家に）行ったりして、奥さんも知ってるし、子ども2人も知ってますよ。

全体としてみると、気の合う親しい友人と恋人ぐるみないしは家族ぐるみで付き合っている人と、結婚後、家族ぐるみで付き合いたいとしている人を合わせると7名となり、多数を占めている。

このように、彼らのプライベートな人間関係は、「結婚前は友人—結婚後はもっぱら家族」というパターンをとっていないし、今後もとらないと予想される。彼らの多くが、結婚後も気の合う親しい友人と会っているし、もしかもしばしば家族ぐるみで付き合っている／今後そうすることになる。彼らの家族は、友人関係を介して開かれているのである。

④ 小括

以上、本節で述べてきたことをまとめると次のようになる。彼らは、「未婚の時は友人—結婚

後は、企業主義的な職縁と家族」という、従来、男性労働者に多くみられた人間関係パターンをとらないと予想される。プライベートな人間関係についていうと、家族への内閉化の傾向は見当たらない。彼らの多くが気の合う親しい友人と恋人ぐるみ・家族ぐるみの付き合いをしているか、今後、そうした付き合いをしたいと思っている。

彼らにおいては、気の合う親しい友人の多くが男性であり、「友人は同性、異性とは恋人・夫婦といった性愛関係」というジェンダー的な分断がみられる。しかし、上記のような、気の合う親しい友人との恋人ぐるみ・家族ぐるみの付き合いによって、友人関係のジェンダー的分断が、部分的にせよ乗り越えられている／乗り越えられることになる。

しかし、そうしたいわば“ぐるみ”のイニシアティブは、男性である彼らが握っている。つまり、彼らにおける“ぐるみ”は、あくまでも男性である彼らと同性の友人との関係を基軸にし、そこに双方の恋人あるいは妻が加わるという形をとっている。彼らにおける“ぐるみ”は、男系なのである。

こうした“ぐるみ”は今後、どう推移するのか。その点に関しては、今後、また彼らとお会いし、お話をお聞きする中で確かめて行きたい。ここでは、差し当たり2つの課題を設定しておく。その1。今後、女系の“ぐるみ”はつくられないのだろうか。今のところ“ぐるみ”のイニシアティブが彼らに握られているとしても、彼らの恋人や妻の友人関係が彼らの統制下に完全に置かれているという訳ではあるまい。彼女たちには彼女たち独自の友人ネットワークがあるだろう。そうした中から、彼女たちと、その女性の友人との関係が基軸となり、そこに彼らと、その女性の友人の恋人あるいは夫とが加わるような関係はつくられないのだろうか。

その2。男系の“ぐるみ”が、今後とも男系であり続けるとは必ずしも限らないのではないか。初めのうちは男同士が親密だったのが、そのうちに双方の恋人や妻同士の方が親密になり、イニシアティブが逆転するということも起こり得るのではないか。そうした展開になるかもしれない事例が既にある。⑬の妻と、彼の気の合う親しい友人である e_{18} の妻は、時折2人で会っているという。

⑬ 昼間もたまに、(妻が)1人でいて(そこに e_{18} さんの奥さんが)家来てるみたいだし。

家が近所で、共に乳児を育てている彼女たちが、夫たちよりも親しくなることは十分考えられる。こうした“ぐるみ”におけるイニシアティブの逆転(“下克上”)は起こるのだろうか⁷⁾。

(2) 友人関係の内実について

気の合う親しい友人との関係は集団として理解してよいのだろうか。そして、そうした友人関係の特質は何か。本節では、この2点を中心に検討する。

① ネットワークとしての友人関係

彼らを取り結んでいる気の合う親しい友人との関係は集団なのだろうか。本項ではまず、このことについてみることにしよう。その点で示唆的なのが、③⑦の言葉である。

③⑦ リーダーはいない分、うん、自由なんすよ、みんな、だから。
……中略……

③⑦ 統一しないからまともな性はわるいけども自由だから、それが楽しいんでしょうね。こうしたことは、③⑦の友人関係にのみ当てはまることではない。対象者全員が異口同音に同

様のことを語っていた。

③⑦の言葉には、彼らの友人関係に共通する2つの特徴が端的に示されている。第1に、彼らの友人関係には定まった位置はなく、リーダーもいない。そこでは、個々人は互いに対等である。それは、次の⑬の言葉にも端的に示されている。

⑬ お互い腹立ったら腹立ったっていうし。相手に対してね。

……中略……

⑭ 向こうも言うし。

……中略……

⑮ (e₁₈さんは1つ年上だが) 対等。まるっきり対等かな。

互いに対等でなければ長続きしないし、気の合う親しい友人関係にはなり得ない。そう彼らは感じている(表14の⑫も参照)。

第2に、彼らの友人関係においては、関係の切り結びや相互行為の内容決定が比較的フレキシブルになされている。つまり、付き合う時や場所、一緒にやることを選択したり決める際の個々人の自由度が高いのである。よって、明確な共通目的にもとづいて相互行為がなされているとは必ずしも限らない。

以上から明らかなように、彼らの友人関係は集団ではない。個々人の自由度が比較的高く、選択的で、対等的な関係、すなわちネットワークとなっているのである⁽⁹⁾。

では、彼らは、友人ネットワークにおいてどういった付き合いをしているのか(以下、表12)。プライベートで会う頻度や一緒にすること、話の内容についてみることにしよう。

彼らの中で、気の合う親しい友人と年に2、3回しか会っていないのは、③と⑥の2名である。その他の人達はそれ以上の頻度で会っており、多い場合で週1回強、少ない場合で2ヵ月に1回くらいのペースである(電話やメールだと頻度はそれより高い)。

一緒にどんなことをするのか。彼らの中の何人かと一緒に趣味を楽しんでいる。①は、気の合う親しい友人も含めて8人ほどと硬式テニス(毎週金曜日の夜、2時間ほど)や山登り(年に2、3回、富士山や中央アルプス)をしているし、⑤はドライブ、⑮はゴルフを気の合う親しい友人としている。

⑬は、A工時代、サッカー部に所属していた。この頃、A工サッカー部は後志管内では無敵で、全道大会の常連であった。小学校4年からサッカーをやってきた彼は、1年生の時からレギュラーとして活躍した。A工卒業後も彼はサッカーを続けた。A工卒業後、入社した鉄鋼・総合重機メーカー大手のN社でもサッカーをやり、そこを退社して小樽に戻ってきてからも、A工サッカー部の先輩が作った社会人のサッカー・チームのCに入り、プレーを続けた(93、94年と連続して小樽地区リーグ1部で優勝し、全道大会に出場した)。2000年12月にこのチームは解散し、彼も事実上、引退した。

彼にとって気の合う親しい友人である⑩も、中学時代とA工1年の時、サッカー部に所属していた。彼もこの間、小樽市内の社会人のサッカー・チームに所属し、プレーを続けてきた。

このように、この2人にとってサッカーは、この間、ずっと共通の趣味であり続けた。彼らにはもう1つ共通の趣味がある。スノーボードである。彼らは冬になると、それぞれの彼女も交えて、主にニセコ方面のスキー場でスノーボードを楽しむ。

⑩も、気の合う親しい友人と、かつては一緒に趣味をやっていた。彼は、高校2年(1990年)の8月に「ロックンローラーのチーム」に入った。現在、彼にとって気の合う親しい友人であ

るS₁₂は、当時、そのチームの先輩であった。⑫はそれ以前、ロック・バンドをやっていた(例えば、80年代に、アメリカ・イギリスでネオ・ロカビリー旋風を巻き起こしたアメリカのバンド、STRAY CATS(ストレイ・キャッツ)のコピー)。それで髪型をリーゼントにし、皮ジャンを着て街を歩いていたら声をかけられ、それがきっかけとなってこのチームに入ったのだ。91年頃では、毎週土曜日の午後9時に集合して、朝方まで車で流すのがこのチームの“活動”の1つとなっていた。

このグループは、後にHIP HOPのグループになり、年に2、3回、小樽でパーティーを開いていた。その時のメンバーは⑫も含めて10人で、⑫はDJとラップ、S₁₂はDJを担当していた(残りの人は、DJが1人、ラップが2人、ダンスが5人)。その後、このグループは内紛もあり、解散した。S₁₂はもうHIP HOPをやっていないが、⑫は今でも、友人がやっているバーなどでDJをしている。

ちなみに彼は、J-HIP HOPではDRAGON ASH(ドラゴン・アッシュ)のようないわゆるメジャー系ではなくアングラ系、例えばNITRO MICROPHONE UNDERGROUND, DABO(ダボ), SUIKEN(スイケン), DS455(ディー・エス・フォー・ダブル・ファイヴ)を、US HIP HOPではAZ, B.G., Snoop Doggy Dogg(スヌープ・ドギー・ドッグ)などをよく聴いている。

彼らにとって趣味は、単なる楽しみ以上のものとなっている。趣味を楽しむという行為、そこでの文化的事物の使用や加工を伴う行為は、享受そのものであると同時に、人と人を取り結ぶ媒介的行為となっている。1人で籠もって趣味を楽しんでいる人は彼らの中にはほとんどいない。パチンコでさえも、1人きりでやる趣味とはなり得ない。彼らの場合、小樽では、パチンコ屋でも知り合いや友人に出会ってしまうからである。しかも、頻繁にである。彼らは、趣味を介して他者とつながっているし、つながってしまうのである。

友人と一緒にすることの中で見逃してはならないのがカラオケである。カラオケは、1980年代以降、青年の余暇において欠かせないものとなった。実際、彼らの中にも、気の合う親しい友人とカラオケに行っている人が何人かいる。しかし、その人達は、歌を歌ってそれでお終いという付き合いをもっぱらしている訳ではない。カラオケに行く人も含めて、彼らは全員、仕事の話も含めて様々な話をしているし(表12)、相談したり、意見を求めたりしている(表13)。

表12

⑬ いや、もう何でもしますよ。だから、ほんと宗教の話から政治の話まで(笑い)。

……中略……

筆者 は一。政治の話っていいますと? 例えば。

⑬ だから、あっちは郵便局で、今なんか、民営化になるだのどうのこうので、騒いで。

筆者 小泉改革で?

⑬ 改革で(笑い)。それで、何年か前からゆってましたよ、それ。政、だから、前まで選挙行っても、選挙行くんですけど結構。

筆者 はあはあ。

⑬ 自民主党に入れてたのが、なんか、この頃民主党だとか。

筆者 あ、⑩さん?

⑬ ええ。

表 13 気の合う親しい友人に困っていることや心配事を相談するか・意見を求めるか

対象者 No.	困っていることや心配事を相談するか	意 見 を 求 め る か
①	① 仕事はよく、わからないところはもう全部、今、今だったら U ₁ さんですね。	N.Q.
③	③ いや、相談とかほしないうすけどね。 ③ 逆はどうです？ 相談されるとか。 ③ いや、逆も、相談されることはない。	N.Q.
⑤	⑤ 全部します。何から何まで。 筆者 今のお仕事のこと？ ⑤ 仕事から何から全部。 筆者 あ、あれですか、辞めるときも相談はしました？ ⑤ 相談というか報告というか（笑い）。	⑤ （仕事のことやプライベートのことで）意見というか報告というか。うん。
⑥	⑥ 相談しないす。されることもないすけどね。	N.Q.
⑫	⑫ いや、まあいろいろす。ま、今回引越す、ま、小樽に帰って来ることも相談しましたし。仕事のこ、前の仕事の事でも、相談したんすよ。ええ、もう、全般ですね。何でも。	⑫ あります。 筆者 逆に聞かれることは？ ⑫ ありますよ。
⑬	⑬ なし。	⑬ 心配とかじゃなくて、あ、相談でもないかなあ。「どう思う？」って聞く感じ。「こういうことがあったんだけど、どう思う？」。ええ。心配ではないんだけど、意見を聞きたい。「お前ならどうする？」っちゅう。そんな話ばっかり出てくる。 筆者 ふーん。もっぱらやっぱ仕事ですか？ 仕事上のこと？ ⑬ うーん。仕事が多くなってきてるかもしんない。仕事の話が。あっちもあっちで大変で。 ……中略…… ⑬ 元来公務員向きじゃない奴が公務員、自分のために我慢してやってるから。 筆者 はあー。 ⑬ なにかとストレス溜まるみたいで。 ……中略…… ⑬ ⑩は共和町の小規模の郵便局に勤務しているのだから、ちっちゃいとこ行くとか貯金から保険から全部やんなきゃなんない、と。少人数で。 ……中略…… ⑬ 僕たちは、あの、後悔したくないかなるべく、今こういう状況はなんだっちゅう。 筆者 はあはあはあはあ。 ⑬ だからいく（＝良く）考えるようにお互い励まし合う感じ。 ……中略…… ⑬ だから、⑩の場合は、いずれ希望出しておお、おっきいところにいけば、郵便も出来るんだし、保険も貯金も何でも、こう、今のうちに覚えとけばどこ行たってなんだって出来るでしいうちゅう。 筆者 はい。 ⑬ で、あっちはあっちで…（ばくに対して）結構時間がある時とかあって、勉強する時間があんなら今のうちに資格取っとけ、と。 ……中略…… ⑬ （2級）ボイラー、ボイラー勉強してんですよね。 ……中略…… ⑬ そこを後悔しないように、今思っただからそれを、やれば全然あれでしいうちゅう（ことを言ってお互いに励ましてくれる）。
⑮	⑮ 同期の連中にそういうのはあんまりないからなあー。 筆者 されること、ありますか？ ⑮ 特にないうすねえ。みんな、そんなに…。うん。	N.Q.
⑯	⑯ あんまり、心、心配事も困ってることもないのかな、お互いにね、大してね。	⑯ こういうことは一切ない。
⑳	筆者 先程の（転職のことを）、相談して？ ⑳ そうですね。あんまり他の人には、具体的に言わないですけど、彼には。 筆者 …で、あの、職訓の教員になるってことも彼に？ ⑳ はい。 ……中略…… ⑳ うん、（アドバイスなどが）あったけど、そんなに覚えてないですね。 ……中略…… ⑳ ぼくはこう何でも悩むタイプなんですけど、彼は何でも行動しないとダメだって言うんですね、ぼくに。 筆者 ぼおー。どっかあったらあれすか。あの一、背中ば押ししてくれる？ ⑳ うん。 筆者 ぼおー。あれっすね、心強い友達？ ⑳ うん、ですね。 筆者 はあー。あの一、話は取り敢えず、まず最初に聞いてくれます？ ⑳ かなり、聞いてくれます。 ……中略…… ⑳ 大体会う時はお酒飲むから、たまに聞いてくれない時ありますけど（笑い）。喧嘩になりそうな時もありますけど（笑い）。 ⑳ （相談することは）仕事と女性ですね、やっぱ。 筆者 はあはあはあはあ。お互いに、ですか？ ⑳ はい。	⑳ ええ。
㉑	㉑ 些細なことなら。 ……中略…… ㉑ 仕事で、例えばなんかこう腹立、なんだ、あったりすると愚痴聞いてもらいうようなことはありますよね。	N.Q.
㉒	○ C ₁₈ に 筆者 悩みの相談といいますが、仕事上のことですか？ ⑳ そうですね。それが多いです。 筆者 といいますとあれですか、あの一、うちの今工場こうなってるんだけどどうしような話ですか？ ⑳ ええ。 筆者 はあー。人間関係のこととか含めて？ ㉒ まあそうですね。先輩は特にそういうのは多いです。普段のことからも、夫婦関係のことからでも多いすから。 ○ C ₁₈ に ⑳ うーん、うーん多いのは、うーん。心配事、まあ、たまにあま相手は独身なんですけど、その、結婚生活のことで（こちらから）話してみたり。 ……中略…… ⑳ 逆に、その一、今こういう人と付き合ってるんだけどっていうことで相談受けたこともありましたけどね。 筆者 はあー。 ⑳ その、その会社の社長、タイヤ屋さんの社長のこととか。	○ C ₁₈ に ⑳ ありますね。 筆者 ぼおー。やっぱ仕事上のことですか？ ⑳ そうですね。 筆者 あ、じゃプライベートなことでもやっぱりある？ ⑳ ま、ありますよ。 筆者 ふーん。うんうんうん。…逆もあると？ ね？ ⑳ 逆もありますね。

(注) ・下線部は筆者。

(実態調査より作成)

筆者 あー。あっ、

⑬ や、自分の立場が危うくなるから。

……中略……

⑬ お互いの仕事の話もそうだし。

……中略……

⑬ 老後の話とか（笑い）、もう全部ですよ。

⑬ だから子どもの話したり、うん、あとはま、仕事の話したり。

筆者 はあー。

⑬ あとは何ちゅうの、その時その時の話で、テレビみててなんか面白いことやってれば、うん、だからそういう話してみたり。

……中略……

⑬ あとはま、一緒に子ども連れて？ どこに行くとか、どうこうってそういう相談とか。

筆者 ほおー。

⑬ ま、相談っちゅってもただ話だけで、いつ行くっちゅ（う）話になんないけど。

筆者 あー、お忙しいっすもんね。

⑬ お、お互い、ね、仕事あるから。ただ、行きたいなあっていう話とか（苦笑）。

筆者 あー、どこ行きたいっす？

⑬ 取り敢えず、来月（札幌の円山）動物園行ってみるかっっていうような話だけでも。

そうした話は、酒を飲みながらされることが多い。場所は居酒屋やスナック、⑬のように自宅などである。

② 創発性・自立性を担保する「場」としての友人ネットワーク

彼らの友人ネットワークの特質は何か。彼らにとって友人ネットワークとは如何なるものなのか。本項ではこの点について検討する。

このことに関しては、次のようなエピソードが解明の糸口となった。面接調査では、まず最初に、労働生活についてお聞きする。大抵、そこは快調に進み、話が盛り上がる。それから家族生活やサークル・団体での活動、趣味についてうかがい、次に普段の人との付き合いや友人関係についてお聞きする番になる。そこではまず、普段、付き合っている方々、その中の気の合う親しい友人の属性や彼らとの関係、所属先、親しくなった時期やきっかけ、付き合いの内容等をお聞きする。そして、いよいよ気の合う親しい友人と一緒にすることや話の内容について詳しくうかがう段になる。それこそが本題だと私は考えていた。

しかし、なぜか会話はそこでトーン・ダウンしてしまうのである。例えば、こんな調子である。私：「どんな話ばします？」。彼ら：「うん？ いやあ、まあ、いろいろですね」。私：「例えば、どんなことです？ 仕事の話とかします？」。彼ら：「ええ、しますよ」。私：「ほかにはどうです？」。彼ら：「あとは、まあ、いろいろですね」。

あいつとはこんなことを一緒にやってるんですよ、こんな話を普段してるんですよ、そんな時が一番楽しいんです、というように話が盛り上がるだろうという私の予想は外れることが多かった。会話が滞りがちになることも一度や二度ではなかった。

決して、彼らが私に不信感を抱いた訳ではない。一緒にすることや話の内容について時に執拗にお聞きする私と、「それがそんなに重要なことなのかな」と内心思っているであろう彼らとが完全にすれ違っていったのだ。それでいて、彼らの多くが友人との付き合いで生きがいや充実感を感じるとしていた。このギャップをどう理解したらよいのか。私は手詰まりの状態になり、途方にくれた。友人関係を研究の中心に据えていた私にとって、それは重大なことであった。

そしてある時、はたと気がついた。彼らにとっては、友人と一緒にやることや話の内容よりも、むしろ一緒に何かをやったり、話をしていること自体、すなわちそうした行為が可能となっており、実際にそうしていること自体の方が大切なのだ。つまり、彼らにとっては、関係よりも、それを成り立たしめる「場」が存在するということの方が、より重要なのである。

それから質問項目を幾つか新たに設定し、更に順番を若干変えてみた。その結果、次のことが浮かび上がってきた。彼らは、上記のような、関係の前提としての関係である「場」を作ったり維持する際の作法に、さり気なく、しかし敏感に留意しているようである。その作法として少なくとも次の3つがある。

第1に、対等性の保持である。これは、前項でも触れた。彼らはそのために配慮をしている。それは、次の⑫の話に端的に現れている（表14）。

⑫ （前略）みんなそうなんすけど、やっぱ年離れてても結構対等に付き合ってくれたりする人がやっぱ、うん、そういう人にしか多分、やってかないんじゃないかな、と。

筆者 はあー。

⑫ で、ぼくの1人友達、後輩ですけど、やっぱそいつにもやっぱ気使いますもんね。その、気使うっていうか、まあ、むしろ対等なぐらいで、自分は、やっぱ。それは基本ですね、ぼくの。

……中略……

⑫ 年の違う者同士、やっぱ付き合うときには、やっぱり対等じゃないとダメだと思うんすよね。

……中略……

⑫ うん。いや、暗黙の了解ではあるんすよ、年上と年下と。でも、普段、例えば、まあほんとと些細なことですよ、ジュース自分が飲みたいとしても、「買ってこいよ」じゃなくて、「一緒に行こうよ」っていうのが。

筆者 友達関係って、そうなんですよ、対等じゃないと友達じゃなくて、

⑫ じゃないんすよ。

筆者 そうですよ。長続きしないんすよね。

⑫ 長続きしないんすよ、だから。

友人との間に年齢差がある場合、年齢規範から完全に自由である訳では必ずしもない。しかし、より対等であるよう気が配られている。それこそが相互に友人たり得る基本条件であることを、彼らはよく知っているのである。

第2に、自立性の保障である。これが意識されるのは、相手が困難な状況にある時である（以下、表15の⑬）。その事と次第にもよるが、彼らはなるべく「お互いの手貸さない」方がよいと考えているようである。何と友人らしからぬ、冷たい態度なんだ、と思う向きもあるだろう。しかし、彼らにとっては、逆に友人だからこそその配慮である。相手の自立性を損なわないようにするには、そうした気遣いが必要なのだ。

表14 気の合う親しい友人はほかの友人とどう違うか

対象者 No.		
⑤	○A₅ ⑤ 波長が合う。性格は違う。 ……中略…… ⑤ ないものがある。 ……中略…… ⑤ いや、もう何ゆっても、うん。	○E₅ ⑤ 基本的に性格が合う。 ……中略…… ⑤ 考え方とか、うん、一緒だったり。 筆者 はあー。 ⑤ (一緒に)いて飽きないっていうか。うん。話してて疲れないっていうか。 ま、A₅もそうですけどね。
⑥	⑥ まあ、少なくともそのメンツ相手には敬語使わなくて済むっちゃうのがあるんですけどね。	
⑫	⑫ やっぱり、あれなんすよね、一番自分を知ってるじゃないですか。付き合いが長い分だけ。 筆者 はい。 ⑫ だから、あれなんすよね、やっぱ年、みんなそうなんすけど、やっぱ年離れてても結構対等に付き合ってくれたりする人がやっぱ、うん、そういう人にしか多分、やっかないんじゃないかな、と。 筆者 はあー。 ⑫ で、ぼくの1人友達、後輩ですけど、やっぱそいつにもやっぱ気使いますもんね。その、気使っているか、まあ、むしろ対等なぐらいで、自分は、やっぱ、それは基本ですね、ぼくの。 筆者 はあー。 ⑫ うん。結局、自分やられて嫌なことはしないすよ。 ……中略…… ⑫ (対等であるということ)はまあ、暗黙の了解ではありますけど、 付き合いて気をつけていること ⑫ また新たに友達ができるとしたら、やっぱり、あれっすね、包み隠さず	やっぱお互い出したりとか、そういうのとか、だからやっぱり大事なんじゃないっすかね。と思いますよ。 ……中略…… ⑫ そいか(=それとか)やっぱ時には相手もこっちに合ったり、こっちも相手に合ったりとか、うん、しなきゃなんないんじゃないっすか。 筆者 うんうんうんうん。 ⑫ やっぱりこう、年の違う、さっきもゆったんすけど、年の違う者同士、やっぱ付き合うときには、やっぱり対等じゃないとダメだと思うすよね。 筆者 あー、なるほど、意味深ですね。そうですね。 ⑫ うん。いや、暗黙の了解ではあるんすよ、年上と年下と。でも、普段、例えば、まあほんとと些細なことですよ、ジュース自分が飲みたいとしても、「買ってこいよ」じゃなくて、「一緒に行こうよ」っていうのが。 ……中略…… 筆者 友達関係って、そんなですすよね、対等じゃないと友達じゃなくて、 ⑫ じゃないんすよ。 筆者 そうですすよね。長続きしないんすよね。 ⑫ 長続きしないんすよ、だから。
⑬	⑬ 酒飲んでも、楽しい。 ……中略…… ⑬ (他の人と酒飲んでも)楽しいことは楽しいんだけど、うん、やっぱり、こう、うん、ま、話の内容大した変わんないけども…うん、例えば、羽目外せるとか。 ……中略……	筆者 はあー。他の人には外せない時でも外せる？ ⑬ 外せる、うん。 ……中略…… 筆者 じゃー一番付き合い、 ⑬ 付き合い長いね。
⑳	㉔ 思ったことをはっきりと、はっきりと強く自分にゆってくるんすよ。 筆者 はあー。はい。 ㉔ うん。話聞いてくれる人はさっきの中でも沢山いるんですけど、強く返してくれる人はあまりいないんで。 筆者 はあー。ふんふんふんふんふん。結構ズキッとやっていうことあります？	㉔ そうですね、はっきり言われて。 筆者 はあー。あんまり腹は立たない。 ㉔ うん、立たないです。 筆者 はあー。逆もあります？ ㉔さんも、 ㉔ ああ、言います。
㉔	㉔ お互い、その、理解し合えるっていうか。 筆者 はあー。 ㉔ 話聞いてくれますし、ぼくも話聞きますから。 筆者 はあー。 ㉔ うん、意外と悩む事とか、そういうのも話してくれますから。 筆者 あー。 ㉔ うん、年はほんとと全然離れちゃってるんですけど。	筆者 ぼおほおほ。 ㉔ ま、片や独身なんですすよね。C₃₈さん、独身なんで。 筆者 ぼおー。 ㉔ だ(から)、結婚のことになるとぼくの方が知ってますし。もう結婚生活、もう5年にもなりますから。 ……中略…… ㉔ 「結婚したらどうなるー」とか、そういう風な相談は。

(注) ・①③⑬⑮⑰には N.Q.

・下線部は筆者。

(実態調査より作成)

こうした相互配慮と対をなす形で、困ったことがあっても「なるべく自分で何とかするようにお互い(している)」。もしも逆に、「はじめからそ(う)やって手を貸してもらうとか、ね、はじめからそやっちゃって(=そのように)喋るんだったら別に誰でもいいこと(に)なっちゃう」、つまり、そうなると友人ではなくなる。彼らはそう感じているようである。

第3に、互いに受けとめ合うことである。例えば、彼らは友人との関わりの中で、互いに相手の話をよく聞いている。

表14

⑳ お互い、その、理解し合えるっていうか。

筆者 ぼおー。

⑳ 話聞いてくれますし、ぼくも話聞きますから。

表 15 「自分には気の合う友達がいるんだ」ということで安心感や安定感を感じることはあるか (その1)

対象者 No.		
①	① ま、困った時はなんかしてくれるっていう安心感がありますよね。 筆者 頼りがいある先輩です?	① そうっすね。その、特にU ₁ さんは仕事ではやっぱり凄いらから。
③	③ うん、そうですね。うん。	
⑤	⑤ ありますね。うん。 筆者 ですよ。ふーん。あれですかねえ。うーんと、拠り所っていうとちょっと重すぎますか? かといって、あの、軽、軽くてどうでもいいって訳じゃ全然ないですよ? ⑤ うん。ですね。 ……中略…… ⑤ うん、だから改めてなんかっゅう感じじゃないのが、うん、 筆者 友達? ⑤ うん。	筆者 はあー。 ⑤ 何時、何時でも連絡してとか、うん。 筆者 で、何時でも話ができるし。 ⑤ うん。逆に何時でも来たり? 筆者 はい。 ⑤ だから、うん、だから何でも言えるっゅう、うん、そういうのが。 筆者 あー。 ⑤ 気使わないのかいいのかな。
⑥	⑥ まあ、まあ、どう、どうでしょうね(苦笑)。この頃友達という概念自体薄れてきてるんで。	筆者 あー、なかなか会えないですもんねー。
⑫	筆者 えーと、悩みの相談といますと? ⑫ いや、まあいろいろっす。ま、今回引越す。ま、小樽に帰って来るとも相談しましたし。仕事のこ、前の仕事の事でも、相談したんすよ。ええ。もう、全般ですね。何でも。 筆者 じゃもう頼りにしてる方なんすね? ⑫ してますね。ええ。 ⑫ 相談してもこう、返ってくるんすよね、すぐ。即答で。 ……中略…… ⑫ 俺の気持ち踏んでこう、「そうかな」っていう答えを一番出してくれるの	はS ₁₂ さんですね。 ……中略…… ⑫ 「いや、それちょっとあれじゃないの?」とかって。「だいじょぶか?」ぐらいに。 ……中略…… 筆者 心強いんですね? ⑫ ええ。 筆者 はあー。はー。…拠り所っていうと、心の拠り所っていうとちょっと重すぎますかね? 言葉としては。 ⑫ いやあ、みんな3人ともやっぱりそんな感じですよ。
⑬	⑬ だからもう、これだけなんですよ。あの、俺の全部を受けて話せ、聞いてくれるのは。 筆者 へえー。 ⑬ ほかの人にゆったら茶化されるっていうような話でも茶化さないで、普通に開ける。そういう。直ぐにはそういう関係にはなかったけど。 筆者 はあー。何時ぐらいからそういう風になりました? 親しくなりました。	⑬ いやあ、もう…5、6年(前から)かなあ、やっぱり。5、6年。 ⑬ いやだから、分かってくれる奴はいないと思ってたから…うん、そういう意味では。多分こんなことゆってもみんな引くだろなっゅう(ことを言っても)。 筆者 はあー。でも、@さん、引かなかった? ⑬ 引かないでちゃんと受ける。と。
⑮	⑮ 別にー(笑い)。特に(笑い)。	
⑰	⑰ (心強いと感じることは)あ、そういうのはあるね。 ……中略…… 筆者 なんかん時にやっぱり頼れる人? ⑰ いや、頼れるっゅうか、うん、あっても別に、まあ相、相談とかもなんも、しないっていえないけども、まあ多分酒飲んでればポロッとゆつ、ゆつてるのかもしない(笑い)けども。ただ、あれだね、そやって話できるだけでいいっゅうか。 筆者 うーん。 ⑰ うん。困ってるから助けてくれっゅうことは言わないけども、ただ話できる。 筆者 あー。 ⑰ うん。うん。何でも言える。 筆者 ふーん。 ⑰ して、そやってゆっても相手は相手で、うん、「まあ何とかなるんでないか」ぐらいの(笑い)、うん、「それぐらい大したことでない」みたいな感じだから、「ああそうだよな」って話終わるし。 筆者 うーん。はあー。 ⑰ だからはじめから相手に頼るとかじゃなくてね。ただ話できるだけいいし。	……中略…… ⑰ だからもう、何でも話が、うん、するし。 筆者 あー。 ⑰ うん。したけど、はじめからそやって手を貸してもらうとか、ね、はじめからそやって喋るんだったら別に誰でもいいことなっゅうし。 筆者 はあー。 ⑰ したから、そやってゆってもお互いの手貸さないっゅうか。 筆者 はあー。なるほど。なるほど。 ⑰ まあ、そのことにもよるけどね。 筆者 はあー。 ⑰ うん。そんなの自分で何とか出来るべやって、なるべく自分で何とかするようにお互い(している)。 ……中略…… ⑰ ただ一緒にいて、酒飲んで喋ってるだけで、うん、何とかなるかなあみたい感じになる。 ……中略…… ⑰ いや、そういう方がいい。俺としてはね。 筆者 ほおー。 ⑰ うん。いい関係だな。
⑲	⑲ ばくはこう何でも悩むタイプなんですけど、彼は何でも行動しないとダメだって言うんですよ。ばくに。 筆者 ほおー。どっかついたらあれっすか、あの一、背中押してくれる? ⑲ うん。 筆者 ほおー。あれっすね、心強い友達? ⑲ うん、ですね。 筆者 はあー。あの一、話は取り敢えず、まず最初に聞いてくれます? ⑲ かなり、聞いてくれます。 ……中略…… ⑲ 大体会う時はお酒飲むから、たまに聞いてくれない時ありますけど(笑いの)。喧嘩になりそうな時もありますけど(笑い)。	筆者 あれっすよね。あの一、A ₃₄ さんがいるっていうことで安心感とか安定感ありますでしょ? ⑲ はい。 ……中略…… 筆者 受けとめて、受けとめてくれるっていう感じありますでしょ? ⑲ ええ。
⑳	⑳ 安心感あるからいるんでしょうね。 筆者 はあー。 ㉑ うん、言いたいこといえる。言いたいことっゅうか、こう、隠し事み	たいなもの友達には言えたりするから。うん。カミさんには言えなくても友達には言えたりするから。ま、そういう訳ではやっぱり、どっかで安心してるんじゃないですかね。

(注) ・下線部は筆者。

(実態調査より作成)

表 15 「自分には気の合う友達がいるんだ」ということで安心感や安定感を感じることはあるか (その2)

対象者 No.	
㊤	㊤ ありますね。 ……中略…… ㊤ いざなんかあった時相談出来る人いないと。やあ、やっぱ親に言いづら いってこともあります。 筆者 うーん。 ㊤ 結局親って自分の味方にしかなくなってくれませんか。 筆者 ほおー。はいはいはいはい。 ㊤ ええ。で、友達っていうとやっぱり、こうやっぱり、返ってくる答え違 いますから。 筆者 はい。ふーん。 ㊤ うん。そっちの方がおっきいと思うんで。 筆者 ふーん。 ㊤ これはおもしろい話、嫁さんなんてそうなんですよね。友達が少ないん で、結局頼るのは親しかないんですよ。 筆者 はあー。 ㊤ だから、親は自分の味方ですから、結局そこで嘘を言おうが、ちょっ と大げさに言おうが信じてくれますから。 筆者 うーん。はあー、あれっすか、あー、なるほど、友達は敵ではないが かといって、あの、全、絶対的何時でも味方って訳でもないから、時に厳
	しいこともゆうって感じですか？ ㊤ そうですね。 筆者 あー。いろいろ指摘もしてくれる？ ㊤ ええ。 筆者 あー。 ㊤ だから c₃₈ とか、その 30 歳の先輩 (b₃₈) は大体そういう風な人ですから。 筆者 ほおー。あー。なるほど、あの、自信を持、持てよっていうこともそう ですし、不味い点とか言ってくれます？ ㊤ そうですね。 ……中略…… ㊤ 30 歳の先輩 (b₃₈) には、あの、「自分を守るな」とはよくゆわれました ね。 筆者 ほおー。自分を守るな？ ㊤ ええ。結局仕事をしてても、これやばいかなと思えば、ま自分のせい にしないような感じになっちゃったり、「俺悪くねえよ」っていう(笑い)、「こ れは違うよとか、そういう風に思うな」って。うん。うん、仕事したら全部 自分に責任あるんだから、とにかくまあしっかりやれちゅうのか。

(注) ・下線部は筆者。

(実態調査より作成)

表 15

㊤ だからもう、これだけ (=こいつだけ) なんです。あの、俺の全部を受けて話せ、
聞いてくれるのは。

筆者 へえー。

㊤ ほかに人にゆったら茶化されるっていうような話でも茶化さないで、普通に聞ける。
そういう。直ぐにはそういう関係にはなんなかったけど。

……中略……

㊤ いやだから、分かってくれる奴はいないと思ってたから…うん、そういう意味では。
多分こんなことゆってもみんな引くだろなっちゅう (ことを言っても)。

筆者 はあー。でも、㊤さん、引かなかった？

㊤ 引かないでちゃんと受ける、と。

㊤ うん。困ってるから助けてくれっちゅうことは言わないけども、ただ話できる。

筆者 あー。

㊤ うん。うん。何でも言える。

筆者 ほおー。あれっすね、心強い友達？

㊤ うん、です。

筆者 はあー。あの一、話は取り敢えず、まず最初に聞いてくれます？

㊤ かなり、聞いてくれます。

相手の言うことを受けとめるということは、相手の考えに全て同意するという事ではない。
そこでは、当然、違和感や考え方の相違を感じる時があるし、場合によっては、異議を差し挟
むこともある。しかし、あくまでもそれは、相手の話をきちんと聞き、なおかつ相手の持ち味
を考慮した上でなされることである。だから、喧嘩に至ることはないようである (表 16 の㊤参
照)。

むしろ、そうしたことは相手に対する理解を深めたり、自分の見方や考え方をとらえ返す契

表 16 気の合う親しい友人との付き合いの中で、自分の性格や持ち味、長所・短所をとらえかえすことはあるか

対象者 No.	
①	① まあ、どっちゃっていうと、聞き手に回ってというのが自分らしさだから。
③	③ 俺もあんまり喋らない方、喋らないっていうかおとなしい方なんで、だから、やっぱり喋る、いろいろそういう面白い話とかしてる時に？ あの結構、自分の、その、違う？ とかっていうのはやっぱり気づくんすよね。
⑤	⑤ あります。
⑫	⑫ だから一時期病んでた時（去年の8月頃）の、時に、お前ってやっぱりやさしい、人に。やさしいところがあるから、そういう自分に戻、戻れとかいわれた。うん、やっぱお互いに、やっぱ自暴自棄であると思うんすよね、何かあった時に、こう。 筆者 はあー。 ⑫ うん。お互いやっぱ、時期がやっぱ似てるんですよ。向こうから相談受けますよね、なんか、「こういうことあってさあ」って。したら、俺も同じようなことがあったりとか、するんですよ。 筆者 はあー。 ⑫ そういうサイクルが一緒で、たまたま一緒だったこともあって、やっぱお互いあれん時もあったっけ。 （……オフレコ……）
⑬	⑬ だから似たところあるんですよ。でも、基本的には、基本的には違うんすよね。考え方が、 筆者 似たところがあるけど、 ⑬ あっちはこまい、こっちが大、大雑把で。 筆者 はあはあはあ。 ⑬ でも、なんか、向かう方向が一緒なんだけど、その過程が全然違うとか。 筆者 はあー。 ⑬ おんなじことやるにしても、あっちは遠回りするタイプ、俺、こっちは近道するタイプ。そういう感じ。 ……中略…… ⑬ で、そこで、そこがぶつかるとこなんです。だから。 筆者 ぶつかる？ ⑬ ぶつかるってこなんす。あーの、言い合、言い合うとこなんすよ。「俺の近道のいいところは、こういうとこだ」、あっちの「遠回りのいいところは、こういうとこだ」と。そこがぶつかるじゃないですか。それで妥協。「あー、なるほどねえ」って。で、ちょっと変えてみたり。あっちもちょっと変えてみたり。 筆者 ぶつかって、お互いに「いやあ、俺の方がいいんだ」とはならない武ですか？ ⑬ あ、そう、そういうのはない。 筆者 はあー。「あ、違うな」と。「あ、なるほどねえ」みたいな形になんですか？ ⑬ そうです、そうです。 筆者 はあー。 ⑬ （向かう方向が同じとは具体的にいうと）損しないで行こうっちゃう感じ。この時代。これからの時代。なんか損する側に回らないで行くためにっちゃう話。 ⑬ 損しないでっちゃうのは、もう、極端な話いえば首になったりとか。首になることですよ。自分の落ちること、今の現実から。それが損することだよ。 ⑬ 自分を有利にするのに、動かしていこうっちゃうのがよく言う話で。自分が利用されるぐらいなら、利用していこうちゃう（笑い）。 筆者 はあはあはあはあ。 ⑬ で、自分を上げていこうって。 筆者 はい。 ⑬ うーん、それの動、人の動かし方が違う。あ、やー、ちょっと。これ、だから、ピンとこないかもしれないけど、あいだったらピンとくるんすよ。 ……中略…… ⑬ だから、そこまでなくてもいいんじゃないのっちゃうタイプ。そこまではなくて、使っ、こっちが利用してるんだから、そこまではやんなくていいんじゃないのっちゃうタイプ。同情とかそんなのはいらんんじゃないのっちゃうタイプ。こっちは同情でちょっと動いちゃうタイプ。 ……中略…… ⑬ 人は使うけどちょっと情が入るタイプ。あっちは人使うけども、利害。情なんて入んないタイプ。 筆者 はあー。 ⑬ うん。ちょっと可哀相って思ったら、「可哀相じゃないって」（笑い）、「自分の方が可哀相だと思え」っちゃうタイプ。 ⑬ （人を利用していこうというのは）同じ会社内だったら、ま、上司であれば、その人と仲いい人と、に自分を売り込んでいい査定をしてもらおうと、それを、そういう利用ですね。
⑮	⑮ ああ別に普段、そんな、地っていますからね。
⑮	⑮ いや、別にないね。
⑳	⑳ 自分…八方美人。 筆者 はあー。 ㉑ 彼は全く正反対なんですけど。 筆者 はあ。はあー。でー、八方美人だって思って、それがまずい？ あるいはオッケイ？ 場合によってはまずいとか？ ㉒ 全然いいと思ってるんですけど、ばく。 筆者 はあはあはあはあはあ。…ふーん。Aさん、その、㉑さんがその、何てゆうんすかね、八方美人だっていうこと、いいと？ ㉒ いや、ダメだよ。 筆者 でも、㉑さんはオッケイと？
㉓	㉓ 自分で自分がわからないっていう時ありません？（笑い） 筆者 ありますねえ。ええ、しょっちゃうです（笑い）。 ㉔ 「もう何やってんだらう、俺」とか（笑い）。 筆者 はいはい。はー。 ……中略…… ㉔ もう、ちょっと違う部分から自分を見てみようっていう風に思いましたね。 筆者 うーん。それ、普段の話をしてる中で？ ㉔ ええ。で、その、性格のことをやってもらえるのがそのCさんとその、もと同じ会社の先輩さん（Bさん）なんですよ。 筆者 あー。 ㉔ 「お前こんなだからこうしろよ」っていう、命令形で先輩（＝Bさん）は来るんですけども、やっぱそれで「ああ」って思う時ありますから。 筆者 はあー。 ……中略…… 筆者 どういうタイプだったっていう風に、あの、㉑さんのこというんすか？ ㉓ あーの、まずその自分に自信持てなかった部分はまあ自分でも気づいてたんですけども、まあこんな感じにいいのかなと思うと（＝思ってたけど）、やっぱ先輩に言われてからやっぱり、ちょっともうちょっと自分に自信持って、行動しようとか、そういう風には考えたことありましたし。 Cさんにもゆわれたことがあるんですよ。「自信持てけ」。 筆者 あー、「もっと自信持つんだぞ」って？ ㉔ ええ。 筆者 おおおおおおおお。 ㉔ だ（から）カラオケなんて全然歌わなかった人間が今すごい歌いますからね（笑い）。 ……中略…… ㉔ 昔はちょくちょく歌ってたんですけど、嫁さんに言われてから、「あんた下手なだから歌うんじゃない」って言われてから、もう全く歌わなくなつた。 ……中略…… 筆者 （Bさん、Cさん）はなんか背中を押してくれる感じですよ。 ㉔ そうですね。

(注) ・⑥と⑦はN.Q.

(実態調査より作成)

機となると受け取っている人もいる。

表 16

- ⑬ おんなじことやるにしても、あっちは遠回りするタイプ、俺、こっちは近道するタイプ。そういう感じ。

……中略……

- ⑬ で、そこで、そこがぶつかるそこなんです、だから。

筆者 ぶつかる？

- ⑬ ぶつかるそこなんです。あの一、言い合、言い合うそこなんっすよ。「俺の近道のいいところは、こういうとこだ」、あっちの「遠回りのいいところは、こういうとこだ」と。ここがぶつかるじゃないですか。それで妥協。「ああー、なるほどねえ」って。で、ちょっと変えてみたり。あっちもちょっと変えてみたり。

筆者 ぶつかって、お互いに「いやあ、俺の方がいいんだ」とはならない訳ですか？

- ⑬ あ、そう、そういうのはない。

以上みてきたような気遣いが「場」の作法としてあるので、友人ネットワークにおいてなされる相談では、単なる忠告や助言ではなく、相手の持ち味を考慮した上で、相手の自立性を尊重し喚起するような励ましがいっぱいなされる。

表 13

- ⑬ 俺たちは、あの、後悔したくないからなるべく。今、こういう状況はなんだっちゃん。

筆者 はあはあはあはあ。

- ⑬ だからいく（＝良く）考えるようにお互い励まし合う感じ。

- ⑫ ぼくはこう何でも悩むタイプなんですけど、彼は何でも行動しないとダメだって言うんですね、ぼくに。

筆者 ほおー。どっちかったらあれっすか、あの一、背中ば押してくれる？

- ⑫ うん。

表 16

- ⑫ だから一時期病んでた時（＝自暴自棄になってた時。具体的には去年の8月頃）の、時に、お前ってやっぱりやさしい、人に。やさしいところがあるから、そういう自分に戻、戻れとか（言われた）。

- ③⑧ （前略）やっぱ先輩（＝b₃₈）に言われてからやっぱり、ちょっともうちょっと自分に自信持って、行動しようとか、そういう風には考えたことありましたし。c₃₈にもゆわれたことがあるんですよ。「自信持ってけ」。

……中略……

筆者 （b₃₈さん、c₃₈さんは）なんか背中を押してくれる感じですね。

- ③⑧ そうですね。

こうした友人ネットワークがあるということで、彼らは安心感や安定感を感じている。それは、表 15 からうかがえる。

以上のように、彼らにとってより重要なのは、友人との関係、すなわち行為の具体的な内容よりも、関係の前提としての関係である「場」が存在するという事の方である。すなわち、彼らにとっては、友人との相互行為の具体的な展開やその結果、つまり「社会」よりも、そうしたことを可能にし、成り立たしめる「場」が存在することの方がより重要なのだ。

そして関係の具体的な展開、すなわち「社会」形成は、そうした「場」における創発性に委ねられている。そこでは偶発性・偶有性と創発性がループ的に連関している。何をするか、そこで何が起こるのかはその時の状況次第である。よって、「社会」形成の方向性は必ずしも定まっているわけではない。しかし、それだからこそ生じる「隙間」が、お互いの自立性を担保している。

こうした「社会」形成は、運動論的な「社会」形成——すなわち、明確な目的性を有し、組織化を通じてなされる「社会」形成——とは異なるものである。それは、多くの「ノンエリート」青年にとっておそらくは馴染みであろう⁽⁹⁾。

③ 小括

彼らの友人関係は集団ではなく、個々人の自由度が比較的高く選択的で、対等的な関係、すなわちネットワークとなっている。そして、彼らにとってそうした友人ネットワークとは、何よりもまず創発性・自立性を担保する「場」としてあり、そしてこうした「場」においてなされる行為の過程であり、その結果である。

なぜそうなっているのか。おそらく、関係に対する再帰性がそのことに関わっていると私は考える。彼らの場合、関係に対する再帰性が、言うなれば、関係のアプリケーション・プログラムという表層レベルを越えて、その深層レベルにある OS（オペレーティング・システム）にまで及んでいると考えられる。よって、彼らは、関係について次のように認識していると思われる。

そもそも他者との関係は、実は、他者そのものとの直接的な関係ではない。「場」を前提とし、そこに参入する限りでの他者と自己との関係である。

この「場」は、常に明瞭に意識化されるとは限らない。ある時代以前に生まれた人にとっては、むしろそうした「場」は自明であり、意識される場合が非常に少ないのではないかと思う。そういう人達において他者との関係は、あくまでも私とあなた（達）との直接的な関係として理解されていると思う。

しかし、彼らの場合は違う。彼らにおいては関係の前提としての関係である「場」と、そこに参入するものとしての他者や自己とが、時間的には同時的かもしれないが、別のものとして二重にとらえられているのではないかと私は考える。

そして、「場」があるということ、すなわち、それゆえ、友人たる他者と相互に関わることが可能となっていることが如何に基盤的でかつ重要であるかに、彼らは気づいていると思われる。「場」の形成・維持のための作法に彼らが留意するのは、それゆえだと思う。

4 労働 vs 余暇？

前章の冒頭でみたように、彼らが最も生きがいや充実感を感じるのは仕事ではなく、余暇においてであった（表5）。彼らにとって余暇は重要である。では、労働はどうか。労働は、彼らにとって、生計費獲得のための単なる手段なのだろうか。彼らにおいては、労働の手段主

義的志向が強いのだろうか。本章では、彼らにおける雇用・労働の具体的な状況と、労働に関する志向性についてみる。

以下、まず(1)で、彼らの現在の勤め先と仕事内容について再度確認する。

次いで(2)で、企業社会の縮小・再編が、彼らの労働生活にどういったインパクトをもたらしてきたのかについてみる。彼らの場合、リストラや劣悪な労働条件が退社の要因となっていることが少なくない。そして、現在の労働条件も決して良好とはいえない。これらのことには、企業社会の縮小・再編が少なからず絡んでいる。

そして(3)以降では、労働に関する彼らの志向性をとらえ、考察する。決して良好とはいえない労働条件の下で働いている彼らにとって、労働は生計費獲得のための苦役にすぎないのだろうか。彼らは、嫌々ながら、そして半ばいい加減に働いているのだろうか。

(1) 現在の勤め先と仕事内容

本節では、彼らの現在の勤め先と仕事内容について詳しくみる(表2参照)。

2章・(2)でみたように、彼らにおいては、ホワイトカラー労働に従事しているのが3名、サービス職の仕事に従事しているのが2名、ブルーカラー労働に従事しているのが6名であった。順次、現在の勤め先と具体的な仕事内容についてみていくことにしよう。

第1に、ホワイトカラー労働に従事しているのは、①③⑥の3名である。

①は、A工卒業後、総合重機業界大手のM造船(本社・東京)千葉事業所に入社した。96年4月に、子会社のM造船C機工エンジニアリング(以下、C機工と略する)のプラント部船装グループに出向となった。99年以降は、そこから、M造船千葉事業所設計部船装設計課防熱グループに応援に出されている。

M造船は、M重工業と共同で、日本で最初のメムブレン型LNG(liquefied natural gas: 液化天然ガス)船の開発を行なっている。彼が所属している防熱グループでは、その防熱に関する設計をCAD(computer-aided design: コンピューターを利用した設計・製図)によって行なっている⁽¹⁰⁾。このグループは当初6人であったが(当時は東大出身者も配置されていたという)、しばらくして4人になり、現在は3人と、縮小されてきている。その中で彼が担当している仕事はサブ的なもののようである。

同僚の2人は、彼にとって気の合う親しい友人の一部である。大阪生まれのU₁は33, 4歳で、北海道の工業系の国立大学出身である。1つ年上のT₁は長崎の県立工業高校の出身で、①と同じ時期に、C機工に出向になったが、その後、M造船に戻っている。

このように、彼にとって実質的な職場である防熱グループにおいて、現在も出向者なのは彼だけである。この仕事は02年3月までには終わる予定だが、その後、自分がどこに配属ないしは応援に出され、どういった仕事を担当することになるのかまだわからないという。99年以降、彼の給料はC機工から支払われるようになっているし、健康保険の保険者もM造船からC機工に移っている。彼は、早晚、C機工に転籍になるのではないかと思われる。

③は、A工卒業後、鉄道旅客運送業の大手であるJ社(本社・札幌)に入社した。札幌駅営業係改札を経て、95年5月に同係出札に配属となった。それ以来、彼は、窓口での各種切符や航空券の販売とレンタカーの受付を行なってきた。2000年4月からは、契約団体センターでの業務も兼務するようになった。その仕事は、旅行代理店が企画したツアーに組み込まれているJ社オプション部分に関するもので、具体的には列車の座席の確保、クーポン券と切符の引き

換えの段取り、支払いの手続き等である。

⑥は、96年8月、彼にとっては4社目になるM社（札幌）に入社した。従業員が30人のその会社は、システム設計・ソフト開発等を事業内容としている。彼はそこのシステム開発部に配属となり、念願のプログラマーとして働くことになった。しかし、この会社は、会社側は否定しているが、事実上、派遣会社である。彼がこの会社内で働いたのは最初の2ヵ月間で、それ以降は他社で働いている。「派遣」期間は、短い時で1年、長い時には4年に及んでいる。

現在、彼は、北海道の地方銀行では上位3行に入るある銀行の系列企業に「派遣」されている。その会社は、システム設計の会社（札幌）で、そこで彼は、飲料の自動販売機の担当者や在庫、売り上げ等を管理するソフトの開発を行なっている。

第2に、サービス職の仕事に従事しているのは、⑤と⑦の2名である。

⑤は、A工卒業後、7年間勤めたSフェリーを99年3月に退社し、同年4月から家業の食堂で働いている。現在、両親と彼の3人でその店を切り盛りしており、彼は調理の一部を担当している。

⑦は、A工卒業後、道内有数のディーラーであるST自動車に入社し、車の整備に携わってきた。95年1月末、そこを退社し、同年4月から札幌の理容店に勤め始めた。既に理容師になっていた“彼女”（中学時代、同級生で“彼女”。92年10月からまた付き合うようになった。現在の妻）から誘われたことが、きっかけであった。将来、一緒になる予定だから、同じ仕事をするのもいいかもしれない。それに30歳前後で理容店のオーナーになるのも夢ではない。そう考え、決心したのだ。

彼は、99年3月までその店に勤めた。その後、小樽に戻り、1つの店を経て、2000年3月に今の店に移った。現在、オーナーとその妻、彼の3人でその店を切り盛りしている。彼は、この他に、小樽市内の公営の道路管理事務所の中にある理容店を1人で営業している。この店は、同事務所の福利厚生事業の一環として設けられたもので、毎週火曜日のみ営業となっている。彼は、非常勤である。

第3に、ブルーカラー労働に従事しているのは、⑫⑬⑮⑰⑲⑳㉑の6名である。そのうち、必要とされる技能水準が比較的高い仕事に就いている人が3名（⑮⑲㉑）、必要とされる技能水準がそれほど高くない、いわゆる「不熟練労働」と目される仕事に就いている人が3名（⑫⑬⑰）である。

まず、前者の、必要とされる技能水準が比較的高い仕事に就いている3名についてみよう。

⑮は、A工卒業後、総合重機業界大手のI社の系列のI機械（本社・東京）に入社した。この会社は、駐車装置・荷役運搬機械・物流・建設機械の開発設計、製造、据付け、メンテナンスを主な事業内容としている、大手企業である。彼は、東統括部札幌第1センターないしは第2センターに所属してきた。

この間、彼は、機械式立体駐車場の保守・点検作業に携わってきた。最初の1年間は、off-JTとOJTによってみっちり仕込まれ、その後は、数々の物件をこなす中で、すなわちOJTによって技能を向上させてきたという。職場で仕事が一人心前とは「取り敢えず1人で故障直したりできるようにすること」で、そうなるのに1年ちょっとかかったという。

現在は、札幌の南半分を営業エリアにしている札幌第1センターに所属している。そのほか、毎月1週間、小樽勤務をしている。小樽市内にある事務所や自宅で24時間待機し、要請があれば作業に出かけるのである。

②⑥は、A工卒業後、化学機械・産業機械・同装置の設計、製作、施工の企業としては道内多数の、中堅企業のH社（本社・札幌）に入社した。最初の配属先は、本社工場の生産部製作課溶接班であった。入社して約3年半後の95年10月に、同社のビルド部門である石狩工場の生産部製作課に配転となり、現在に至っている。

彼は対象者の中で唯一、役職についている人である。彼は、97年以来、この会社の最末端職制である伍長の職位にある。しかし、彼は名目上の管理職にすぎない。彼の班には、彼を含めて5人いる。そのうち4人は製缶作業に従事している。溶接作業に従事しているのは彼だけであり、彼には事実上、部下はいないのである。

この会社は、食品工場や薬品工場などの製造プラントに設置される高圧ボイラーや圧力容器の製造では定評があり、道外や海外にも製品を出荷している（日本経済新聞社編（1991）、『日本経済新聞』（北海道版）1998年12月15日付）。

彼の仕事は、そうしたボイラーや容器をアーク溶接することである。これらの製品は、ステンレスなどの特殊な素材でできており、また高圧に対する耐性や高い精度を要求されるものである。そのため、その溶接作業ではかなり高い技能が必要となる。なかには、ボイラー溶接に関する国家資格の保持者でないとやってはいけな作業もあるという。彼はそうした資格や、JIS（日本工業規格）にもとづいた特殊な溶接の資格（3年ごとの更新制）などを持っている。しかし、自分はまだ1人前ではないと彼はいう。

②⑧は、A工を卒業してからこれまで、ディーラーのN札幌販売小樽支店に勤務してきた。セールスの仕事をした98年5月から2001年5月までの3年間を除いて、この間、彼は車の整備に携わってきた。

車の整備を行なうには、かなりの知識と技能が必要である。車は、構造的に、大きくいってエンジンとシャシに二分される。エンジンは燃料系統、エンジン本体、潤滑系統、冷却系統、電気系統に、シャシはクラッチ、トランスミッション、ステアリング、足まわり、デファレンシャル、サスペンション、電気系統にそれぞれ分かれている。これら全般を整備できるようになるのに数年を要するという。彼の場合も、5年程かかったという。

セールスに配属されていた3年間のブランクがあるとはいえ、彼は、通算すると6年以上、整備の仕事をしてきた。その間に、彼は、3級自動車ガソリンエンジン整備士の資格（国家資格）を取得している（1996年取得）。2001年8月下旬にお会いした時には、2級自動車ガソリンエンジン整備士の資格を取るべく6月から受講してきた整備技術講習会での講習（北海道自動車整備振興会が主催）が終盤にさしかかっていた。よって、知識・技能を充分身につけたのかということ、そうではないという。自動車は日進月歩で進化している。特に、近年、コンピューター制御がどんどん導入されてきているし、しかもその機能の向上は目覚ましい。そのため、常に勉強し、かつ実際の整備をこなしていけないと、立ちどころに知識・技能は陳腐化するという。彼もまた、自分はまだ1人前ではないと考えている。

次に、後者の、必要とされる技能水準があまり高くない仕事に就いている3名についてみよう。

②⑨は、2000年8月に、5社目となる現在の会社に入った。その会社は、外装・内装工事の会社（小樽）で、妹の夫が経営している。この会社は従業員3人の小さな会社で、従業員の給料は日給月給制である。また、健康保険や年金に関して、会社側は一切ノータッチだという。

彼は、これまで主に、サイディング（外壁貼り）の仕事をしてきた。最近、この会社が内装

も手掛けるようになったため、彼もその作業を行なうようになった。

⑬は、3章・(1)で述べたように、飲料・食品の卸売業では北海道有数のH販売の子会社で、同社の商品の配送を受け持っているCH社（本社・札幌）に、94年3月に入社した。その会社は、彼にとって4社目になる。

彼は、H販売小樽支社から小売店にトラックで商品を配送し、合わせて注文も受ける仕事をしている。H販売小樽支社の営業エリアは後志地方北部なので、彼は、小樽市内だけでなく、小樽の西に隣接する赤井川村や積丹半島も回っている。荷物の積み込み（1日3回）も配送も1人で行なっている。彼の職場で仕事が一人前とは「1人で与えられたとこ回れる（こと）ぐらい」で、そうなるのに1ヵ月しかかからなかったという。

彼はこの仕事のほかに、97年から、携帯電話を無料で提供し、その台数分のお金を電気通信業界大手のK社の代理店から貰うサイドビジネスをしている。しかし、K社のライバル企業であるNTTドコモがIモードの携帯電話を商品化してからは、この商売はあまりふるわないという。

⑭は、97年4月半ばに、O石油（本社・小樽）に入社した。彼にとってその会社は9社目となる。この会社は、従業員52人の小さな会社で、小樽のほかに滝川、芦別、深川、留萌に、計6つのSS（サービス・ステーション）を置いている。

彼は主に、重油をはじめとする各種燃料（ほかに軽油、灯油）の配達を1人で行なっている。重油の配達先は漁船などの船舶や学校、病院、ゴルフ場、クリーニング工場、銭湯などである。冬になると、ストーブの分解掃除の仕事が加わる。

以上、現在の勤め先と仕事内容についてみてきた。その特徴をまとめると以下ようになる。

ホワイトカラー労働に従事している人達の場合、バブル崩壊後の悪化した雇用情勢にさらされた⑥（後述）を除く2名（①③）はいずれも、1度も転社せずに、かなりの規模の大企業に勤め続けてきた。しかし、両者の仕事はサブ的なものである。しかも、①のように、大企業の長期雇用層から外される人も出てきている。大企業に入ったからといって安泰だとはいえない状況になってきている。

必要とされる技能水準が比較的高いブルーカラー労働に従事している3名も、1度も転社していない。勤め先は、規模的には準大手から中堅クラスの企業である。仕事はいずれも比較的高い水準の知識と技能を要するもので、彼らはそれらを主にOJTによって身につけている。

これらの人達と対照的なのが、必要とされる技能水準があまり高くない、いわゆる「不熟練な」ブルーカラー労働に従事している3名である。この3名の勤め先は大きくない。⑫に至っては零細企業である。しかも、後でみるように、労働条件は良くない。

ホワイトカラー労働や「熟練的な」ブルーカラー労働に従事している6名とこの3名との違いは何によるのか。それは転社経験の有無である。

表3で示したように、本事例全体（11名）の中で転社経験者は6名いる。その中で現在、一般企業に勤めているのは、家族従業者となった⑤と理容師になった⑦を除く⑥⑫⑬⑭の4名である。そのうちの⑥を除く3名は、この「不熟練な」ブルーカラー労働者である。しかも、この3名は全員、転社を3回以上経験している。

この3名は、必ずしも、最初から「不熟練な」ブルーカラー労働に従事してきたのではない。それに、1社目の会社は、何れの人の場合も今の勤め先よりはるかに規模が大きかった（表17）。

⑬がA工卒業後、入社した会社は、鉄鋼・総合重機業界大手のN社であった。そこで彼は、

主にエンジン周りのパイプの取り付けを行っていた。⑬はA工卒業後、道内のディーラーでは有数のST社に入社し、そこで車の整備の仕事をしていた。

⑫はA工卒業後、各種燃料・冷暖房空調設備・浴室・厨房関連機器の卸小売等を事業内容とし、小樽と余市で主としてガソリン・スタンドを経営しているT社に入社し、スタンド勤務と灯油の配達を行っていた。その仕事は、⑬⑭の場合と異なり、確かに「不熟練な」ブルーカラー労働である。しかし、T社の規模は今の勤め先よりも大きい。それに、T社に勤めていた95年の月給、年収は、現在とそれほど変わらない額であった。もしもT社を辞めないで勤め続けていたら、間違いなく収入は今よりも多くなっていただろう。しかも、T社は月給制を取っている上に、社会保険や年金にも関与していたのに対して、今の勤め先は日給月給制を取り、社会保険や年金に関与していない。

このように、転社すると、勤め先の規模は縮小し、労働条件は悪化し、一般的に「不熟練な」労働と目される仕事に就く可能性が高まるといった傾向が彼らにおいてもみられる。

(2) 企業社会の縮小・再編の、労働生活へのインパクト

1章・(1)でも述べたように、1990年代以降、グローバリゼーションに伴って企業社会の縮小・再編が進行してきており、そうした変化は青年の雇用・労働にも多大な影響を及ぼしている。彼らにも、その波が押し寄せている。本節では、企業社会の縮小・再編が彼らの雇用・労働にどういった影響を及ぼしているのかについてみることにする。

①では、高卒就職者と専門学校卒就職者の雇用状況の比較をする。両者の間には、バブル崩壊を境にした雇用情勢の大転換がある。それは、企業社会の縮小・再編に起因している。

②では、退社するに至った経緯に注目する。彼らの場合、リストラや劣悪な労働条件が退社の要因となっていることが少なくない。

③では、現在の労働条件とそれに対する彼らの評価についてみる。現在の労働条件も良好とは決していけない。そうしたことに、企業社会の縮小・再編が関係している。

① 高卒就職者と専門学校卒就職者の間の雇用をめぐる格差

——雇用情勢の転換のインパクト

1990年代、雇用情勢は大きく転換した。とりわけ新規学卒者の雇用情勢は、激変ともいえるべき大転換を遂げた。バブル期、労働力需要が増大し、新規学卒者にとっては売り手市場の状態が続いた。しかし、バブル崩壊後、状況は一変する。労働力需要が低迷し、新規学卒者の就社が次第に困難になった。

そうした大転換を如実に示す例が彼らの中にもある。それは、高卒就職者と専門学校卒就職者との間の雇用をめぐる、“天国と地獄”ともいえるべき落差である。

高卒就職の10名は、1992年3月にA工を卒業した。その頃、既にバブル景気は崩壊していたが、労働力需要はそれほど衰えてはいなかった。例えば、2000年度中にA工に寄せられた求人企業数が441社だった（就職者は103人）のに対して、この年度（91年度）中にA工に寄せられた求人企業数は2508社であった（就職者は248名）（A工進路指導部「進路指導統計」より）。依然、雇用吸収力が大きかったことがうかがわれる。本事例における高卒就職者（⑥以外の10名）も全員、91年度内に内定を取り、92年4月に揃って就職している。

一方、専門学校に進学した⑥の場合は、それとは対照的だった。彼は、A工卒業後、Sソフ

トウェア専門学校（札幌，2年制）の情報システム科に進学した。その学校の2年生であった93年11月末の時点で、彼は、就職は「全く無理じゃないっすかね。求人はいくらでも無理じゃないかな。この業界は」と述べていた。

こうした状況にあったのは彼だけではない。この専門学校全体の就職状況は、「就職決まった人は、うちのクラスで42,3人中10人くらい。学科によっては（4,50人中）2,3人のところもあります」、「就職課には求人はいくらもないんじゃないかと就職課の先生も言っていた」というくらい厳しい状況であった。結局、彼の科の最終的な就職率は5割程度にしかならなかったという。

彼はその5割に入れなかった。卒業後も彼は就職活動を続けた。しかし、その努力はなかなか実らず、94年4月から9月末までの約半年もの間、失業状態にあった。その後、年末まで2社でアルバイトをし、翌95年1月から就職活動を再開した。彼が正規雇用者として就社することができたのは、同年10月になってからだった。結局、同年9月までの9ヵ月間、再度失業を余儀なくされたのだった。彼の失業期間は、通算すると15ヵ月に及ぶ。

このように、高卒就職者と専門学校卒就職者の間のタイムラグには、雇用情勢の変化が明瞭に現れている。多くの企業が新規学卒雇用を手控えるようになったことが、両者の明暗を分けたのだ。こうした新規学卒雇用のダウンサイジングは、企業社会の縮小・再編の一環に他ならない。

② 退社するに至った経緯にみる、企業社会の縮小・再編のインパクト

彼らの中で転社を経験した人は6名いる（表3）。先述のように、現在、サービス職の仕事に従事している2名と「不熟練な」ブルーカラー労働に従事している3名は皆、この間、転社を経験している。後者の3名の場合、全員が3回以上転社している。

転社経験者の6名は、現在は、正社員ないしは家族従業者として就労しているが、表17に示したように、そこに至るまでの間に失業を経験した人はそのうち4名（⑥③⑦⑫⑬⑭）いる。この4名中⑥⑫⑬の3名は、非正規雇用ないしは日給月給制・保険無しといった不安定就労と失業との間を行ったり来たりした経験を持つ、いわゆる「フリーター」経験者である。そのうち⑫⑬は、「不熟練な」ブルーカラー労働に従事している3名の中の2名である。4回以上転社しているのは、彼らの中ではこの2名だけである。

「不熟練な」ブルーカラー労働に従事している人において、労働生活はとりわけ不安定な傾向にある。

次に、転社を経験した6名がどういった理由や事情でそれぞれの会社を退社するに至ったのかについてみることにしよう。

青年の離職に関して、次のような見方がある。青年層においては自発的離職が多く、その背景には就労意識の変化がある。それは大きく分けて2つある。

第1に、青年は1つの企業に長く勤めたいとは思わなくなっている。こうして高まりつつある転社・転職志向が青年の離職率を押し上げている。

第2に、多くの青年が親に依存するようになってきていることも、離職率の上昇に関係している。今の青年の親世代は比較的豊かである。しかも、子どもの数が少ないので、彼ら・彼女らがかじることのできる「脛」は相対的に大きい。それゆえ、彼ら・彼女らは経済的にそれほど困難を感じていない。だから、ちょっとでも気に入らないことがあると、いとも簡単に会社

表17 就労歴

対象者No.		94年4月～9月末	9月末～10月末	10月末～12月末
ホワイト カラー 労働者	⑥	失業（小樽）	倉庫管理の請負企業（札幌） B：非 C：S 急便の倉庫でトラックの荷物の積み降ろし D：アルバイト情報誌 E：仕事がついての。	印刷会社のS社（札幌） A：社員400人 B：非 C：年賀状印刷の字のチェック D：アルバイト情報誌 E：期間限定の仕事
		95年1月～9月	10月初め～96年7月末日	8月～
サービス	⑤	失業（小樽）	印刷会社のS社（札幌） A：社員400人 B：正 C：スーパーのチラシを作る。 E：以前、今の会社（M社）に履歴書を送った。 そこから誘われたから。	システム設計、ソフト開発等のM社システム開発部（札幌） A：30人 B：正 C：プログラマーとして、H銀行系のシステム設計の会社に事実上派遣されている。
		92年4月～99年3月		99年4月～
職労働者	⑦	Sフェリー小樽本店 A：399人 B：正 C：船客旅客係や貨物係で電話応対や窓口業務、車の積み込みの案内 D：大企業だから。他の会社より待遇が良いから。 E：職場全体の仕事量の増大・リストラに起因する仕事量の増大と上司との軋轢		家業の食堂（小樽） A：父、母、本人 B：家従 C：調理の一部
		92年4月～95年1月末		95年4月～99年3月
		ディーラーのST自動車小樽支店 A：1070人 B：正 C：整備士 D：能力を公平に評価してくれそうな会社だから。大企業だから。 E：“彼女”から誘われて。	失業	理容業のLグループのKの本店（札幌） A：本店5人、支店3人 B：正 C：理容師をしながら、Lグループの学校（認定職業訓練校）に1年通い、 11月から通信教育（学科2年、インターン1年）も受ける。 E：結婚したが、妻が実家で働くようになった。小樽に親がいるし。
		～99年6月	～12月	2000年1月～3月半ば 2000年3月半ば～
「不熟練な」 ブルー カラー 労働者	⑧	失業（小樽）	理容業のS（小樽） A：5人 B：正 C：理容師 D：貼紙 E：合わなかったから。	失業（小樽） 理容業のヘアーサロンF（小樽） A：本人のみ（その他にオーナーとその妻） B：正 C：理容師 D：職安
		92年4月～97年2月		～97年4月半ば
		各種燃料・冷暖房空調設備・浴室・厨房関連機器の卸小売等のT社のガソリンスタンド（小樽） A：73人 B：正 C：スタンドでの作業と燃料の配達 D：地元で就職したかったから。小樽市内では賃金が良い会社だから。 E：何やってんだらうと思うようになって。	失業（小樽） その間、東京に1ヵ月、ニューヨークに2週間いた。	病院などのボイラーの配管を事業内容とする会社（小樽） A：4人 B：正 C：配管作業等 D：スタンドのお客さんの知り合いのつて E：同僚や元請の人と合わなかったから。
		～6月	～2000年6月	～7月
ブルー カラー 労働者	⑨	3ヵ月失業	H電力の2次下請企業（札幌） A：15人 B：正（日給月給） C：電線の地下敷設工事など D：気の合う親しい友人（S ₁₀ ）のつて E：会社の業績不振による給料減	何でも屋（札幌） A：1人 B：正（保険無し） C：絨毯の取り換え、草むしりなど D：ラップをやっている知人の紹介 E：経営者の知り合いのヤクザによって組員にきされそうになったから。
		92年4月～93年4月		～94年2月
		鉄鋼・総合重機のN社T製作所（三重県） A：22346人 B：正 C：製造技術職。外業第2工場でエンジン周りのパイプの取り付け。 D：業績が安定した会社だから。見学に行った時上司がいい人だったから。 E：腰を痛めて。	電話機の訪問販売のW社札幌支店 B：正 C：電話機の訪問販売 D：給料が高かったから。そこにいた知り合いの紹介。 E：飽きたのと、自分の時間がなくなるのと。	手形割引と融資のN社小樽支店 A： B：正 C：営業 D：つては職安 E：仕事に飽きたから。時間が不規則だし、残業代がつかないから。
		94年3月～		飲料・食品・雑貨配送のCH社（小樽） A：135人 B：正 C：H販売小樽支社からトラックで商品の配送。営業 D：残業代がちゃんとつくから。つては職安。
ブルー カラー 労働者	⑩	92年4月～93年1月半ば		～94年10月20日
		ディーラーのST社岩見沢営業所 A：1020人 B：正 C：整備士 D：整備士にならなかったから。 E：上司と合わなかったことと、長時間労働。	スナック（小樽） B：非 C：バーテン D：経営者が知り合い。 E：親からの反対もあって。	建築業者向け木材販売のM木材（小樽）A：3人 B：非 C：木材の配達 D：父の勤め先。次の仕事がつくまでのつなぎ。 E：工場長と合わなかった。工場長は自分のミスを人のせいにして、うそをつく人だった。
		～12月	12月～96年4月	5月～7月
		失業（小樽）	H社小樽SS B：非 C：スタンドでの作業と燃料の配達 D：その主任から父に話があった E：そのSSが閉鎖に話がついた	A運送（小樽） A：4人 B：正 C：4トントラックでダンボールの配達 D：つては職安。 E：怪我をしたから。会社側は復帰を望んだが、迷惑かけられないので辞めた。
ブルー カラー 労働者	⑪	～11月半ば		～97年4月半ば
		2ヵ月半入院。失業（小樽） 労災が下りた。	S商社のガソリンスタンド（小樽） B：非 C：灯油の配達など。 D：職安に行ったら、H社に商品を購入していた業者の人に会って。その人の紹介。 E：今の会社から声がかかったから。	O石油の小樽Iスタンド A：52人 B：正 C：主に重油の配達。

(注)

(実態調査より作成)

- ・A＝全社の従業員規模、B＝雇用形態：正＝正社員・非＝非正社員・家従＝家族従業者、C＝仕事内容、D＝入社理由・つて、E＝退社理由
- ・従業員規模については、小樽市雇用促進協会『92小樽企業ガイド』、『北海道年鑑』（1992年版、2001年版、北海道新聞社）、『札幌商工年鑑』（1992年版、2002年版）、シイ産業研究所『情報処理・ソフトウェア会社録』（2002年版）も参照。

を辞めてしまう。

しかし、本稿の事例の場合、表 17 からわかるように、上記のような見方で説明できるケースはその中にはない。彼らは、ずっと親に依存しようとは思っていない。それに、条件さえ良ければ 1 つの企業に長く勤めたいとほとんどの人が思っている。一般に「フリーター」と称されるような経過的存在に自らを留めておきたいとは思っていないのだ。

にもかかわらず、彼らが退社するのは別の要因による。その中には、リストラやそれに伴う労働条件の悪化が関係している場合がある。本項では、そうしたケースを取り上げることにする。

⑤は、99 年 3 月に S フェリーを退社した。それにはリストラが関係している。彼の職場であった営業課船客旅客係では、職場全体の仕事量が増えたにもかかわらず、人員数は減少していた。減員分が補充されなかったからである。そのしわ寄せが、当時、職場の中堅であった彼にも及んだ。そのことが彼の退社に関係している。彼によれば、この会社では入社して日の浅い人と、彼のような中堅層で退社する人が多く出るという。

⑫は、98 年 6 月に、電力会社の 2 次下請企業（札幌）に入社した。この会社は彼にとって 3 社目であった。この会社には、彼にとって気の合う親しい友人である S₁₂ が既に勤めていた。この人のついでに入社したのだ。この会社は、土木建設・海洋調査・電設工事などを事業とする会社で、従業員は 15 人ほどであった。彼は、夜間に行なわれる電線の地下敷設工事などに携わっていた。

彼は、2 年後の 2000 年 6 月にこの会社を辞めた。親会社の H 電力からのこの会社への発注が一時、途絶えたのだという。彼の仕事は現場での作業であり、しかも日給月給制だったので、受注減はストレートに収入に響いた。おまけに、保険もつかなくなった。それゆえ彼は、退社した。こうしたことがなければこの会社にずっと勤め続けていたと彼はいう。

こうした事情には規制緩和が関係していると思われる。電力業界では、95 年 12 月の電気事業法の改正以降、規制緩和が進行している（谷江・青山（2000）pp. 23-5, p. 207）。2000 年 3 月には、99 年 5 月に改正された同法の施行によって、電力小売の部分自由化や電気事業者の兼業規制の廃止等が実施に移され、電力市場への他業種企業の新規参入が可能となった。

こうした中であって H 電力は、電力市場における競争で生き残るための方策の 1 つとして 2000 年 3 月に『経営効率化計画』（H 電力（2000））を策定した。そこでは、事業所の縮小・廃止や人員削減とともに、設備投資の抑制が、経営効率化への取り組みの一環として打ち出されている。その中でも、流通設備（送電・変電・配電設備）への投資の目標削減率はとりわけ大きく設定されており、それに向けた工事全般に渡る設計・施工の内容・範囲・方法や更新時期の見直しも提起されている。この計画は同年 4 月以降、実行段階に入った。

⑫が勤めていた会社は、この H 電力の流通設備を担当する下請企業の 1 つである。H 電力からの受注減はこの計画の実施によるものと思われる。彼のこの退社は、自由化・規制緩和の、大企業一下請中小企業の二重構造の下で強化されたしわ寄せの結果といえるだろう。

⑬の場合、1 社目の企業を退社したのは怪我をしたからである。彼は、A 工卒業後、鉄鋼・総合重機の大手企業である N 社津製作所（三重県）に入社した。外業第 2 工場に配属され、主にエンジン周りのパイプの取り付けの仕事を行っていた。しかし、入社して約 1 年後の 93 年 4 月に彼は退社した。「腰傷めて。重い物持つんで。1 回、腰、ぎっくり腰みたいのやっちゃって」、それで辞めたのである。

この業界では、既に70年代半ばから、リストラによるスリム化が進められてきた。彼の怪我には、そのことが関係しているのではないかと推察する。

その後、彼は93年の春から夏まで、電話機の訪問販売を事業とするW社札幌支店に勤務した。彼は、電話機のセールスの仕事をしていて、そこを辞めた理由の1つは長時間労働である。

⑬は、A工卒業後、道内のディーラーでは有数のST社に入社した。彼は、岩見沢営業所で車の整備の仕事をしていて、約1年後の93年1月に退社した。その要因の1つも、長時間労働である。彼によると、冬は車検が集中することもあると、多忙を極めるといふ。退社は「早くて10時とか11時」で、それから「寮帰って雪投げ(=除雪)して、寝て、また朝起きて雪投げして、してまた会社行ってって感じだった」。それでは「体もたないものもあるし」、辞めたのだ。こうした長時間労働には、人員数の据え置き、あるいは削減が関係していると思われる。

その後、彼は、94年12月に5社目に当たるH社に入り、小樽市内のSSで働くようになった。アルバイトであるにもかかわらず、仕事内容、労働時間ともに正社員と何ら変わりなかった。

割に合わない思いを抱えながらも彼は勤めを続けた。彼は、年上の正社員をアゴで使うくらい仕事をきっちりこなしていたという。それでも96年4月一杯で彼は解雇された。働いていたSSの閉鎖に伴う人員整理の対象となったのだ。彼は非正規雇用者だったので、真っ先に首を切られただろう。

この頃から、一方で閉鎖されたSSが、他方で大型SSが各地で目につくようになった。この業界では、規制緩和によって競争が激しくなっていたのだ。

1980年代後半以降、石油業界では規制緩和が進められてきた。90年代前半には、特別石油製品輸入暫定措置法(特石法)廃止などの自由化本番をにらんで、石油元売業者が国内シェアの拡大を目論んで、石油製品の増産を行なった。そして販売面では、石油元売業者やその他大手販売業者が大型SSの新設を進めた。そのため、特石法が廃止される(96年3月)前段階のこの時期でも、石油販売業界においては既に競争が激化していた(青森銀行(1998))。

そして、収益が悪化したSSは整理されていった。彼が勤めていたところも、そうした中で淘汰されたのだと思われる。

それから彼は、父親の勤め先のM木材で、木材を建築業者に配達するアルバイトを3ヵ月程行ない、96年7月にA運送に正社員で勤めることになった。彼の仕事は4トントラックでダンボールを配達することであった。しかし、9月頃、仕事に誤ってダンボールを左足の甲の上に落とし、剥離骨折してしまった。会社側は労災認定の手続きを直ちにとった。そして彼の会社復帰を望んだ。しかし彼は、会社に迷惑をかける訳にはいかないと退社した。

同年11月半ばには怪我が回復し、彼はS商事のガソリン・スタンドでアルバイトを始めた。そこで働いている時に、今の会社から声がかかり、97年4月半ばに転社したのである。

以上のように、彼らが退社するに至った経緯には、人員不補充・人員削減・事業所の閉鎖といったリストラや、それに伴う仕事量の増大・長時間労働及び職場における軋轢の増大が少なからず関係している。勤務中の負傷も、こうしたことを背景にしているのかもしれない。

このように、彼らにおいては、企業社会の縮小・再編と退社との間に関連性が見受けられる場合がある。換言すれば、彼らにおける転社歴は、企業社会の縮小・再編のインパクトに晒されてきた歴史でもある。とりわけ、現在、「不熟練な」ブルーカラー労働に従事している人達において、そうした傾向が強い。しかも、そうした企業社会の変容に、グローバリゼーションとそれと呼応した新自由主義的改革が関与していることを示唆する事例もみられた。

A工卒業後、これまで1度も退社せずにずっと勤め続けてきた人も、こうした動きと必ずしも無縁ではない。今後、こうした変化が一層進めば退社するかもしれないと考えている人もいる。総合重機メーカーに勤めている①がそうである。

近年、総合重機各社では、事業所の統廃合が進められている。しかもそれは、1企業グループに視野を限定してなされているのではなく、業界再編をにらみ、それと連動した形で進められている。とりわけ韓国の攻勢が目覚ましい造船部門では、国際競争力の向上を目的に企業の集約が進められており、他部門よりも早いピッチで統廃合が進められることになっている。

彼が籍を置いているM造船も、99年にK社との間で商船部門の包括提携をしている。今後、M造船とK社、それにI社も加えた3社は造船部門を統合する予定でいる(古賀他(2000) pp. 100-2, 『毎日新聞』2001年4月4日付)。それをにらんでM造船では、この数年のうちに、岡山県玉野市の事業所に造船部門を集約することになっている。そうすると、①もこの事業所に配転することになる。その場合どうするか。①は退社も視野に入れて考えている(表22・23)。

③ 現在の労働条件とそれに対する評価

本項では、現在の労働条件(収入, 休日, 勤務体制等)とそれに対する彼らの評価についてみることにする。まず、現在の労働条件についてみることにしよう。

表18は、主な労働条件を示したものである。この中の月収・年収の数値は、諸手当や税金, 社会保険料, それと年収の場合には更に賞与等も含めた額であることに注意してほしい。厚生労働省の「賃金構造基本統計調査」によると、勤め先の企業規模が10~99人, 学歴は高卒, 年齢が25~29歳, 勤続年数が1年未満の男性労働者の, 00年6月の所定内給与額の平均は, 219800円となっている((a))。所定内給与額であるから, これには超過労働給与額は含まれてい

表18 労働条件

対象者 No.	転社 回数	月 収 (総支給) (万円)	総残業 時 間 (月)	そのうち 残業手当が 出た時間	年 収 (総支給) (万円)	休 日	休 日 出 勤	当直制 の有無
ホワイト ①	0	27	50	42	350 弱	週休2日(土・日)	0	無
カラー ③	0	21.9	2, 3	2, 3	330	月11日	0	有
労働者 ⑥	3	19	26	26	250 弱	週休2日(土・日)	0	無
				30時間以上 はサービス 残業			忙しいと 土曜出勤	
サービス ⑤	1	N.A.	N.A.	N.A.	N.A.	週休1日(水)	0	無
職労働者 ⑦	3	13.5 (副業3)	24 以上	0	182 (副業36)	4週6休(火, 第2・3月)	0	無
「熟練的な」⑮	0	40 強	30	30	480~90	週休2日(土・日)	3, 4	有
ブルー ②⑥	0	25	20	20	350~60	週休2日(土・日)	0	無
カラー ③⑧	0	20.5	10	8.75	300 強	週休2日(火, 変則的にもう1日)	0	無
労働者				上限あるが 必ず出る				
「不熟練な」⑫	4	22	10	10	250	週休1日(日)	たまに	無
ブルー ⑬	3	24	30	30	300 弱	週休隔週2日(土・日)	1 代休を平 日取る	無
カラー ⑭		(副業4)		何時間でも 出る	40~50			
労働者	8	22~3	56?	?	300 強	月2回(日)あるかないか	2 以上	無

(注)・N.A.=No Answer(答えるのを拒否)。

(実態調査より作成)

ない。しかも、勤続1年未満の場合である。一方、彼らの場合、今の会社での勤続年数は1年以上であり、表18の数値には、当然、超過労働給与が含まれている。にもかかわらず、(a)と同じくらいかそれ以下の月収の人が10名中6名もいる(N.A.の⑤を除く)。彼らの収入は概して低いといえる。

理容師の③⑦と、事実上、派遣労働者である⑥の収入はかなり低い。③⑦の場合、妻と共働きだから生活が成り立っているという。そして⑥の場合、通勤手当さえ不十分だという。

ホワイトカラー労働に従事している3名のうち、⑥を除く2名(①③)の年収は共に330万円を越えており、総残業時間や残業手当を考慮に入れると、彼らの中では高めだといえる。

ブルーカラー労働に従事している6名の場合、必要とされる技能水準が比較的高い労働に従事している3名(⑮⑳㉓)の年収よりも、そうでない労働に従事している3名(⑫⑬⑱)の年収の方が低い。前者では300万円から400万円台後半なのに対して、後者では200万円台後半から300万円となっており、両者は300万円を境にして分かれている。

休日についてみると、違いがはっきりする。ホワイトカラー労働に従事している3名と、技能水準が比較的高いブルーカラー労働に従事している3名の勤め先は、概ね週休2日制で、休日は月に8日以上ある。一方、技能水準が比較的低いブルーカラー労働に従事している3名とサービス職の2名では、休日は月に6日以下となっている。

表19の「会社に着く時間」と「会社を出る時間」は、普段の場合である。これをみるに、彼らは普段から長時間働いていることがわかる。これは全員に共通する特徴である。彼らにおい

表19 勤務時間

A	対象者 No.	転社 回数	勤務 体制	家を出る 時間	会社に着く 時間	勤務時間	会社を出る時間	家に着く 時間	備 考
(a)	①	0	日 勤 〃 〃 当 直 〃	7:15	7:40	8:00~17:00	19:30	20:15	当直は月3,4回 1ヵ月前まで 22:00 退社
	③	0				8:00~16:20 ~18:20 8:45~19:30 9:00~翌朝 9:00 8:20~翌朝 8:20			
	⑥	3		7:00過ぎ	8:50		19:00	21:00	
(b)	⑤	1		9:30	9:40		22:00	22:00 過ぎ	
	③⑦	3		8:00	8:30		19:00 ちよつと過ぎ	20:00	
(c)	⑮	0	日 勤 札幌の 当 直 小樽の 当 直	7:00	8:10	定時は8:30~17:30 日勤の後、17:30から 当直。翌日通し番。 24時間、小樽の事務 所と自宅で待機(携帯 電話所持)	終業時刻まちまち		月に2, 3回 月に1週
	⑳	0		7:10	7:40		19:15	20:00	
	㉓	0		8:00	8:30		19:00	19:30	
(d)	⑫	4	早 出	7:00	7:15		18:00	18:15	15, 16時に昼食 をとる時もある し、とれない時 もある。
	⑬	3		7:15	7:30 (普 段は8: 30)		19:50	20:00 過ぎ	
	⑱	8		5:00過ぎ	5:10 頃		18:00 19:00~20:00の時 もある		

(注) ・A→(a): ホワイトカラー労働者, (b): サービス職労働者, (c): 「熟練的な」ブルーカラー労働者, (d): 「不熟練な」ブルーカラー労働者。 (実態調査より作成)

ては概ね、実働 9 時間以上の長時間労働が常態化しているといえる。

こうした中で、特に過酷な勤務をしているのは、⑬である。前述のように、彼の主な仕事は重油の配達である。漁船がその得意先なので、彼は、午前 5 時 10 分には会社に着き、それから通常でも午後 6 時まで、遅い時には午後 8 時まで働いている。昼食を取れない時さえあるという。実に、13 時間以上もの長時間労働を日々行なっている。

しかも、休日は、月に 2 日取れるか取れないかだという。彼が勤めている会社の小樽の SS で重油の配達を担当しているのは彼だけである。タンクに重油を入れることは、誰もが代わりにできるほど容易なことではない。だから、なかなか休めないのだ。これだけ働いても、月収は 22, 3 万、年収は 300 万を越えるのがやっとである。

一方、⑮は、彼らの中では段違いに高い収入を得ている。彼は 98 年に、30 年の住宅ローンを組んで家を改築した。1 階が車庫、2・3 階が居住部分となっているその家で、彼は、父親、離婚して戻ってきた姉とその 2 人の子ども（小学校 3 年と 1 年の男の子）と共に暮らしている（母親は 92 年 5 月に肺がんのため死去）。自分名義のローンも含めて、自力で家を改築ないしは新築した人は他にいない。こうしたことが可能だったのも、彼の収入が高いからである。

しかし、彼の高収入は、定時の勤務だけから得ているのではない。定時勤務に加えて、月 30 時間の残業と 3, 4 日の休日出勤、そして時には完全な通し番にもなる、月に 2, 3 回の札幌での当直勤務、それと 24 時間待機となる、月に 1 週間の小樽での当直勤務、これらがあってはじめて手にしている額である。すなわち、長時間労働や夜勤と引き換えに、彼は高収入を得ているのである。

こうした勤務体制は、彼にとって決して楽なことではない。彼は退社も考えている。夜勤や通し番のない勤務を望んでいるのだ。多少の収入ダウンは覚悟の上である（表 22・23）。

以上のような長時間労働の常態化や休日の少なさには、職場全体の仕事量の増大と人員数の据え置きないしは削減が関係している（表 20）。この間の職場全体の仕事量と人員数の両方の変化を把握し得た、「熟練的な」ブルーカラー労働に従事している 3 名と「不熟練な」ブルーカラー労働に従事している 3 名の場合についてみることにしよう。

前者の 3 名のうち、⑮⑯では、職場の人員数はこの間、変わらないものの、職場全体の仕事量が増えている。よって、1 人当たりの仕事量は増えており、勤務時間も長くなったという。

⑳の場合、職場全体の仕事量は減ったが、人員数も減っている。かつては、溶接作業をする

表 20 職場全体の仕事量と人員数・1 人当たりの仕事の種類の变化

A	対象者 No.	職場全体の仕事量	職場の人員数	1 人当たりの仕事の種類
(a)	① ③	D.K.	減った 変わらない	
(b)	③7		減った	
(c)	⑮ ⑯ ⑳	増えた 減った 増えた	変わらない 減った 変わらない	増えた ちょっと増えた
(d)	⑫ ⑬ ⑭	増えた 増えた 増えた	減った 減った 変わらない	増えた 増えた 変わらない

(注) ・⑤⑥は N.Q.

(実態調査より作成)

・ A→(a): ホワイトカラー労働者, (b): サービス職労働者, (c): 「熟練的な」ブルーカラー労働者, (d): 「不熟練な」ブルーカラー労働者。

人達で独自の班を構成していた。彼も、95年12月の時点では、5人いる溶接班の一員であった。しかし、その後、溶接の仕事が下請に外注に出されるようになり、彼の会社で行なわれる溶接作業は減った。溶接の担当者もそれに応じて減らされてきたという。よって、彼の仕事量は減っていない。むしろ逆に、95年の頃よりも、勤務時間が長くなっている。しかも、担当する仕事の種類も増えているという。

後者の「不熟練な」ブルーカラー労働に従事している3名では、1人当たりの仕事量の増大が明瞭である。職場の人員数が据え置かれたあるいは減らされた上に、職場全体の仕事量が増えているからである。しかも、⑫⑬では、1人当たりの仕事の種類も増えている。

このように、彼らの勤め先では、概ね、増大した仕事量を、据え置かれた、ないしは不補充や削減といったリストラで減らされた人員でこなしている。彼らにおける多忙化は、こうしたことによってもたらされたとみてよいだろう。

以上みてきたように、彼らにおいて労働条件は決して良好とはいえない。給料は安く、労働時間も長い。彼らはそれをどう評価しているのだろうか。表21は、現在の勤務先で不満なことについてみたものである。「2. 休日が少ない」、「6. 夜勤がある」、「7. 通し番がある」、「3. 残業が多く、手当もちゃんと出ない」、「1. 給料が安い」といった給料や労働時間に関することで不満に思っている人が多いことがわかる。

ホワイトカラー労働に従事している3名は全員、給料が安いことと労働時間が長いことに対して不満を感じている。サービス職の仕事に従事している2名では、給料が安いことに関して2名ともが、労働時間が長いことに関しては1名が不満に思っている。「熟練的な」ブルーカラー労働に従事している3名では、給料が安いことに関してと、労働時間が長いことに関して、

表21 現在の勤務先で不満なこと

(複数回答)

A	対象者 No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
(a)	①			○																						
	③	○	○							○										○						
	⑥	○		○																				○		
(b)	⑤	○																								
	⑦	○	○	○						○	○															
(c)	⑮						○	○																		
	⑳	○							○							○							○			
	㉑	○		○												○						○				
(d)	⑫	○	○																							
	⑬																○						○			
	⑮	○	○																							○

(注) ・A→(a): ホワイトカラー労働者, (b): サービス職労働者, (実態調査より作成)
(c): 「熟練的な」ブルーカラー労働者, (d): 「不熟練な」ブルーカラー労働者。

選択肢

1. 給料が安い 2. 休日が少ない 3. 残業が多く、手当もちゃんと出ない 4. 手当ではちゃんと出るが、残業が多い 5. 残業は少ないが、手当がちゃんと出ない 6. 夜勤がある 7. 通し番がある 8. 福利厚生が充実していない 9. 仕事がきつい 10. 仕事にやりがいがない 11. 自分の資格が生かせない 12. 高校で学んだことが生かせない 13. 職場で学んだことが生かせない 14. 潜在能力を引き出してくれない 15. やる気を起こさせてくれない 16. 自分を正当に評価してもらえない 17. 仲の良い同僚が少ない 18. A工の先輩がいない 19. 上司と合わない 20. 職場が自分と合わない 21. 昇進が遅そうだ 22. 会社に将来性がない 23. 家から遠い 24. その他() 25. とくにない

表 22 今の会社に勤め続けるか

勤めつづけるつもり	③ ⑫* ⑬ ⑮*
辞めるかもしれない／辞めるつもり	①* ⑥* ③⑦ ⑮ ②⑥* ③⑧*
わからない	⑤

(注) ・*は、今やっている仕事そのものが好きと語ったケース。 (実態調査より作成)

表 23 今の会社を辞めるかもしれない／辞めようと思う理由

①*	業界再編によって造船部門が玉野に集約されることによって、勤務地が変わるから。そこ行ったらなんもない。しかも遠いし。
⑥*	給料が安いから。
⑬	夜勤や通し番があるから。
②⑥*	給料が安いから。技術・技能を向上させたいから。
③⑧*	将来性がないから。売れる車がない。

(注) ・*は、今やっている仕事そのものが好きと語ったケース。 (実態調査より作成)

それぞれ2名が不満に思っている。「不熟練な」ブルーカラー労働に従事している3名では、給料が安いことに関しては全員が、労働時間が長いことに関しては2名がそれぞれ不満を感じている⁽¹¹⁾。

彼らは、総じて、給料と労働時間に関して不満に思っている。なかには、それゆえに今の勤め先を辞めようかと考えている人もいる(表22・23)。

(3) 「労働は嫌い」か？

前節でみたように、彼らにおいて労働条件は良くない。総じて、給料は安いし、長時間労働が常態化している。そのことを彼らは不満に思っている。こうした労働条件の劣悪さには、企業社会の縮小・再編が少なからず関係している。とりわけ、「不熟練な」ブルーカラー労働に従事している3名のこれまでの労働生活の歩みは、そうした企業社会の変容のインパクトにかなりの程度晒されてきた歴史でもあった。

このように、彼らにおいて労働とは、良好とはとてもいえない条件の下で取り組むものとなっている。それに、そもそも、彼らが最も生きがいや充実感を感じるのは労働においてではない。よって、彼らにとって労働とは、生計費獲得のための苦役にすぎないのだろうか。彼らは、嫌々ながら働いているのだろうか。適当にやり過ごしているのだろうか。本節では、労働に関する彼らの志向性についてみることにする。

表24は、「働くこと」は自分にとってどういうことかについてお聞きした結果を示したものである。「16. 我慢の対象」や「17. お金を得るだけのこと」のみを選択した人は1人もいない。⑫と⑬は「19. その他」のみを選び、両名とも具体的には「生活のため」としている。しかし、⑫は、後でみるように仕事そのものは好きだとしている。⑬は、「(働くのは) 自分の生活のため。でも、適当にはやらない」としている。

以上からわかるように、彼らの中で労働の手段主義的志向を有する人はほとんどいない。嫌々ながら働いている人も、適当にやり過ごしている人も皆無である。むしろ、いい加減な仕事をしている上司や同僚を批判する人が数名いた。

ここで注意したいのは、彼らは、必ずしも仕事そのものを嫌っている訳ではないということ

表 24 「働くこと」はどういうことか

(複数回答)

A	対象者 No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
(a)	①				○	○	○	○												
	③					◎		○												
	⑥								○						◎					
(b)	⑤		○																	
	②7	○	○	○	○	○		○	○	○			○		○	○	○	○		○
(c)	⑮																			○
	②6					◎				○				○						
	③8			◎	○			○									○			
(d)	⑫																			○
	⑬															○				
	⑬8		○	◎		○							○							

(注) ・ A→(a)：ホワイトカラー労働者，(b)：サービス職労働者，(c)：「熟練的な」ブルーカラー労働者，(d)：「不熟練な」ブルーカラー労働者。
・ ◎→1 番そうだと思うこと。(実態調査より作成)

選択肢

1. 自分で会社を大きく成長させること 2. 自分で一人前になって、独立していくこと 3. 家族を養うこと 4. 社会人としてまわりから認められること 5. 仕事を通して、自分を成長させること 6. 自分の将来の希望のためにお金を稼ぐこと 7. 仲間との人間関係を大切にすること 8. 仕事に打ち込み技能を上げたり、資格を取ったりすること 9. 社会に貢献すること 10. 良い仕事をするために、昇進すること 11. 昇進して地位を上げること 12. 世間を知ること 13. 生活に張りを出すこと 14. 趣味を仕事にすること 15. 平凡に働き生活すること 16. 我慢の対象 17. お金を得るだけのこと 18. ある年齢になったら、やらなければならないこと 19. その他 ()

である。彼らが勤務先で不満に思うこととして語っていたことは、もっぱら勤務先における労働条件や処遇のあり方に関することであって、仕事そのものに関してではなかった。

むしろ逆に、彼らにおいては仕事そのものを好む傾向が強い。労働生活に関してお話をうかがっている際に、「仕事そのものは好き」という内容のことを明示的に語った人は、11 名中 6 名いる(表 25)。しかも、そのうちの 4 名は、今やっている仕事の技術・技能を向上させるために、会社内外の教育を受けたいと思っている(表 26)。あとの 2 名も、現在、OJT を通して仕事を「覚えている最中」で、今のところ

はそれ以外の教育を受ける余裕がないということであって、技術・技能の向上を望んでいない訳ではない。

ここで注目すべきなのは、このように仕事そのものは好きで、技術・技能を向上させたいと思っているのが、ホワイトカラー労働や「熟練的な」ブルーカラー労働といった、必要とされる知識・技能水準が比較的高く、裁量権も幾分かあり、やりがいがあると一般的に目されて

表 25 今やってる仕事そのものは好きか

好き	① ⑥ ②6 ③8 ⑫ ⑬8
好きではない	②7

(実態調査より作成)

表 26 今やってる仕事の技術・技能を向上させるために会社内外の教育を受けたいか

受けたい	⑥* ②7 ②9* ③8* ⑫*
受けたいとは思わない	①* — 今覚えているから。 ③ ⑮ — 社内でやってるので間に合ってるから。 ⑬* — 覚えている最中だから。 ⑬

(実態調査より作成)

(注) ・ *は、今やっている仕事そのものが好きと語ったケース。

いる労働に従事している人達だけではない、ということである。

当初、私は、必要とされる知識・技能水準が低く、裁量権もほとんどなく、やりがいもないと一般的には目されている、いわゆる「不熟練な」ブルーカラー労働に従事している人の場合、仕事に面白みややりがいを感じられないだろうと思っていた。しかし、そうした私の浅薄な予想は見事に覆された。そうした労働に従事している人においても、同様の志向性がみられたのである。

「不熟練な」ブルーカラー労働に従事している3名中2名(⑫⑬)は、「仕事そのものは好き」だとしている。サイディング(外壁貼り)と、最近は内装の作業も行なうようになった⑫は、次のように語っている。

⑫ ま、今んとこ好きなんですよ、仕事が。

……中略……

⑫ 仕事が楽しいっていうんすか。

筆者 はあー。やりがいありますか？ 仕事に。

⑫ そうですね。

しかも⑫は、技術・技能を向上させるために、会社外で教育を受けたいと思っている。彼は、これまで、親会社の住宅メーカーが行なうサイディング関係の講習会や研修に参加しているし、そのメーカーが設けている認定施工士の資格を取得している。しかし、彼はそれに飽き足らず、その上更に、大工さんから、家を建てる際に必要とされる知識や技能について学びたいと考えているし、「パソコンとか、あと要するにやっぱカラー・コーディネートとか、(内装の時に役立つ) インテリア・コーディネートとか」についても学びたいと思っているのである。

⑬は、現在勤めているSSの今の所長(57歳)が02年3月に退職するからその後任に、という大抜擢を断っている。彼にとっては、管理職に登用されることよりも、現場で働く方が良いのだ。

⑬ 役職っちゅうもんに対して全然関心ないし、いっつも所長は黙ってスタンドにいらんて、もう、出来ないし。性に合わないっちゅうか。して、うん、やっぱし自分でね、運転して配達してる方好きだから。

筆者 はあー、なるほど。

⑬ うん、全然興味ないっちゅうか。

筆者 はあー。やっぱずっと現場に出たいんすか？

⑬ 現場の方いいね。うん。1カ所で黙って(聴き取り不能)全然。

……中略……

⑬ (昇進するよりも現場で働きたいという考えは)うん、当たり前だね。

そう思うのは彼だけではなくそうである。少なくとも、彼の友人にもそう考える人がいるという。このことは、「ノンエリート」青年の中では、立身出世に背を向ける価値観が、どれ程かはわからないが、ある程度、広まっているということを示唆しているのかもしれない。

筆者 周りみてもやっぱ当たり前っすか？ その、やっぱ、出世するよりは、役職つくよりはやっぱずっと現場でいたいって人、やっぱ多いっすか？

⑬ いや、周りは、まあ、友達関係はまあそういうのあるけども、ま、やっぱ会社行けばみんなやっぱし出世したい人ばかりなんじゃないかな。

日本のブルーカラー労働者にとって、昇進とは、管理職へと上向することによってブルーカ

ラーの仕事から脱する可能性が高まることを意味する。日本の経営では、そうしたキャリア形成をいわばインセンティブとし、自発的同意の調達に“武器”としてきた。しかし、彼のような志向性を有する者にとって、昇進はなんらインセンティブとはならないだろう。

この「不熟練な」ブルーカラー労働に従事している⑫⑬のお二人とお話していて気づいたことが2つある。1つは、「不熟練な」労働にも、それなりかもしれないが、技能形成の厚みがあるということである。

○最低限、身につけていなければならないことについて

⑫ ま、目に見えるところなんで、まあ外壁って見えるところなんで、やっぱり、うん、アバウトだったらダメなんですよ。

……中略……

⑬ (前略)だから、自分で、ま、「や、決めてよ」って言われた時には、やっぱり、何ていうんすか、色彩の、そういうセンスっちゅうか、そういうの、うん。

……中略……

⑫ だから単品で例えばすごいいいものを使っても、色の、例えば強弱とかありますよね、で、屋根もまあ絡んでくるんですけど、だから、それ、一個一個見たらいいもんなんすけど、全部貼っちゃって見、ちょっと、ちょっと合わないなど。っていうのが多いっすね。今は。だから、やっぱそういうとこっすかね、身につけたいのは。うんー。ま、最低限。

○身につけるのに苦労したところについて

⑫ うーん、苦労したところはやっぱり、あれですね。うん、ま、土木とかって結構、アバウトだったじゃないですか。だけどこの場合、やっぱ、キチッともうミリ単位まで追わなきゃダメなんで。で、そういうとこと、あと、クギってあんまり使ったことないんですよ。(中略) 道具の使い方に、やっぱ、苦労しましたね。

⑬ それだね、その一、船の、うん、油の積み方だね。

筆者 はあー。難しいんすか？

⑬ 感覚の問題かな、あれ。

筆者 感覚の問題？

⑬ ゲージ(=計器)もなんもないから。

……中略……

⑬ 勘っちゅうか、例えば、お、音とか。あとこう、なんちゅうのか(な)、(油を)入れるどこあって、(その他に)エアーが、あの一、ぬ、抜けるとこあんだよ、あの空気がね。して当然油入れればこっちから空、空気出てくっから、そこに袋を当てて、したら満タンになったら袋がプクプクって少し動くんだよね。ま、そういう感覚とか。あとは、その一船がかしがってるか、平らかとか。

……中略……

⑬ 一番かかる量でね、今まで最高で…5、6時間かったことあるかな。

「不熟練」労働＝単純労働だから、技能らしい技能など要しないだろう、と決めてかかっているいけない。実際に働いている方々に仕事内容について虚心にお聞きすることが大切だと改めて

痛感した次第である。

気づいたことのもう1つは、彼らは、自らの労働の中に、技能形成の余地ややりがいを読み込んでいるし、読み込もうとしているし、読み込みたいと思っているということである。

⑮はいう。確かに「所詮配達だって思ってる人いるだろうし、会社ん中に」。でも、「結局うちの会社の人は誰も船（に重油を入れることは）できないけどもね、俺できる」。そういう「プライド持ってね」、「そやって思っとく方が、段々段々ね、やる気ちゅうか、まあこっちも意地張って（やるようになるし）」。

そうやってどんどん技能を向上させたい。それには上限はないし、あると思った時点でその人は「終わり」だと彼はいう。

○今の職場で“仕事が一人前”とはどういうことか

⑮ やっぱし中途半端にしないで、あの、自分の担当はキチッと全部やって、うん、でないのかな。

筆者 はあー。じゃもう一人前ですか？

⑮ いや、別にそういう訳でないとは思いうけどもね。まだ。うん。まだまだこれから覚えることもあると思うけども。

……中略……

筆者 どれぐらいかかります？ 一人前になるには。

⑮ …うん、一人前ってやっぱし、その、人それぞれで、うん、あれだけでも。わかんないけどね、それはね。うん、やっぱしどこまで覚えればいいっちゃうこともないと思うし。

筆者 あー、ああ。

⑮ うん。うん。自分で一人前だと思ったら、も、そこで終わりだからね。

⑫も、同様に、技能形成に上限はないと考えている。技能形成に関して「納得したら終わり」だということである。

○今の職場で“仕事が一人前”とはどういうことか

⑫ うーん、まあ、総、トータルのにみれることと、あと一やっぱ先一、間近なことじゃなくて、先のことみえないと、ダメー、ですね。

……中略……

⑫ （前略）ジョイント（＝合わせ目）がどこにしたら見かけがいいとか、そういうものもあるんで。

……中略……

筆者 ああ、それじゃトータルのってことはあれっすかね、例えば、その、合わせ目どこにするかっていうこととか、先みるっていうんで、

⑫ そうですね。もう、外観全般ですね。

……中略……

⑫ （今の勤め先は外装の会社だけど、最近内装も手掛けるようになった。今後は施工を大工さんに）外注に出しても、家1軒ぐらい建てれるような感じにしたいんすよね、ばくとしてはやっぱり。

……中略……

⑫ （前略）外のセンスだけじゃなくて、やっぱ中の、例えば、内装の壁をどういう風に

するとか。

……中略……

- ⑫ (トータルの的にみれるようになるにはどれぐらいかかるかという)や、永遠のテーマだと思いますけどね。ええ。

筆者 ほおー。じゃ、家1軒建てれるようになるっていうのも、これも永遠のテーマ？

- ⑫ そうですね。だから多分納得したら終わりだと思うんすよね。

……中略……

- ⑫ (HIP HOP の) DJ でもそうっすから。

筆者 あー。これでいいと思ったら終わりっすか？

- ⑫ 終わりっすね。だから物事多分何でもそうだと思うんすけど。

筆者 そうですね。

以上みてきたように、彼らにおいては、仕事そのものを好む傾向が強い。しかも、そうした志向性には、仕事の中に技能形成の可能性ややりがいを読み込む意志と願望が込められている。そうした意志や願望も含めた、仕事への肯定的評価やこだわりを職業志向ととらえることにしたい。

(4) 企業と職業の狭間で

彼らにおいて、労働の手段主義的志向は希薄である。また、企業主義的志向も彼らの中には見当たらない。それは、表24で示した「あなたにとって、『働くこと』はどういうことですか」という質問に対する選択肢の選択状況からもうかがわれる。「1. 自分で会社を大きく成長させること」を選択したのは、いずれは独立開業して理容業プラスアルファの店を経営したいと思っている③⑦のみであるし、「11. 昇進して地位を上げること」という立身出世主義的な考えを持つ者は皆無である。

彼らにおいては職業志向が強い。それを維持し、実現するには2つのことが必要となる。1つは、労働条件の向上である。例えば、給料があまりにも安ければ、生活のために転職するということにもなりかねない。これでは、職業志向の安定的実現は困難である。もう1つは、技術・技能の向上である。技術・技能の陳腐化は、担当している仕事からの解任の根拠となり得るし、そもそも本人の側の、仕事に対するやりがいの喪失につながってしまう。

では、どうやって、労働条件や技術・技能の向上を果たし、職業志向を実現するのか。1つには、勤めを継続する中で果たすということが考えられる。もう1つには、転社によって果たすということもあり得る。

彼らの中にも、後者のルートを取ろうかと考えている人達がいる。表22の今の会社を辞めようかと考えている6名中の⑥②③⑧の3名がそうである。この3名は、「職」の安定的な継続と充実のためにも転社することを考えているのである。

しかし、企業中心社会である日本社会では、そうしたルートには特有の困難が伴うことになる。横断的職業別労働市場が成り立っている場合であれば、転社によって労働条件の向上と技術・技能の向上の両方を実現できる可能性は高い。しかし、日本ではそうした労働市場が成り立っている分野が非常に少ない。彼らの労働分野もそうである。そこでは、労働条件の向上と技術・技能の向上がゼロ・サムの関係になっている場合が多く、転社によってその両方を実現することは困難である。

こうしたことを示す事例が彼らの中にもある。㊤は、給料アップとともに、「おもしろい」し「奥が深い」と感じている溶接の技術・技能の向上を求めている。彼は、今の会社に対して不満に思うことの1つとして、「やる気を起こさせてくれない」ことをあげ(表 21 参照)、具体的には、自分に発言権を与えられていないこともあって、新しいことにチャレンジしたくてもなかなかさせてもらえないと述べている。このまま今の会社に勤め続けても、技術・技能の向上はそれほど期待できない。むしろ先がみえている。彼はそう思っているのである。

しかし、そのために同業他社へ転職しても両方を実現させることは難しい。彼は今、公共職業能力開発施設である道立高等技術専門学院の溶接の指導員に転職する道も視野に入れて、今後の身の振り方を考えている(既に職業訓練指導員の資格を取得している)。

㊤ (同業他社への転職は) うーん、あんまりないです。

……中略……

㊤ 1ヵ所にいたらやっぱり人間関係とか狭いですよね、自分のみえてくる。(中略)いろいろみてみたいっていうのはありますけどね。

筆者 それは人間関係だけを、ですか？

㊤ いや、仕事も、どっちでも。

……中略……

㊤ 溶接でもやっぱりいろいろありますから。まだ知らないことも多分あると思うんですけども。

……中略……

㊤ 金属もいろいろ種類はありますし、うちでは全然やらない金属もありますから。

筆者 あの一、合金やったりとか？

㊤ チタン、チタン合金とか、アルミ合金とか。ま、全然やらないんで。そういう専門の会社があるんですよ。

筆者 はあー。それは道内ですか？

㊤ 道内は少ないですけど。

筆者 やー、それで移動できたらいいんすけどね。

㊤ ええ。

筆者 もしも職訓の教員になる道と、それから同業他社で今よりも条件が良くて、そいで仕事もステップ・アップが出来ると(いう道があつて)、どっちも選べるという風になったらどっち選びます？

㊤ ……同業の会社に入ります。

筆者 あ、やっぱり。

㊤ ええ。その一、教員は何時でもできるし、年取ったあとでも出来ますから。

……中略……

㊤ 今やってるような仕事は、その、圧力容器(の溶接)とかっていうのはなかなかいいです。

筆者 あー。あの、そ、そこまで高度な、

㊤ は、ないっすね。

同業他社への転職は困難である。しかし、仮に実現できれば、技術・技能の向上はある程度

期待できる。だが、その場合、給料などの処遇の低下は否めない。その点は㊹も認識している。一方、職業訓練指導員に転職すると、給料は今よりもアップする。しかし、技術・技能の向上がデッドエンドになってしまうということが十分に考えられる。ここには、企業と職業の狭間にある「ノンエリート」青年像が端的に示されている。

5 「ノンエリート」=落ちこぼれ？ 負け犬？

彼らは、自分（達）が「ノンエリート」であることを自覚している。そうした「ノンエリート」としての生き方に、彼らは落ちこぼれ意識などの負い目を感じているのだろうか。本章では、これまでみてきた友人関係や労働との関わりも視野に入れて、その点について考察する。

以下、まず(1)で、学校歴主義に対する彼らの考えについてみる。彼らのライフコースは、「エリート」―「ノンエリート」の二極化の傾向を強めている階層化の影響を受けている。こうした階層化は、学校歴主義にもとづいている。彼らは、学校歴主義をどう思っているのだろうか。

次いで(2)で、その上で、今後、どのような生き方を彼らが望んでいるのかについてみることにする。

(1) 学校歴主義に対する考え

学校歴主義は、日常性のレベルでは「ランクの高い学校に入って、有名大企業に就職すれば、いい生活ができる」という考えとしてある。それに対する彼らの考えを示したのが表27である。11名中8名が否定している。しかも、その多くが、自分の子どもにも、自分と同じような考えを持ってほしい、同じような生き方をしてほしいと思っている。残りの3名は両義的評価をとっている。しかし、この3名は、将来、自分の子どもに学校歴主義的な生き方をするように強く言うことはしないとしている。総じて、彼らは、学校歴主義と一定の距離を置いており、全面的に受容している人は皆無である⁽¹²⁾。

彼らは、これまで学校歴主義の“無風圏”にいた訳ではもちろんない。かつて彼らは、学校歴主義の“暴風圏”の真っ只中にいたのだ。

A工は、後志地方北部をその範囲とする後志第1学区における学校間格差構造の中で、「中の下」に位置する。そうしたA工の中で、彼らが属していた造船科は「底辺」にあった。よって、対象クラスの人達の約8割が「成績ランクで仕方なく」A工を受験し、しかも全体の3分の2が「成績不振」のため第2志望の造船科に回されてきた。そのため、対象クラスには、二重の「輪切り」によって選別された不本意入学者がかなりいた。そのこともあって、退学を考えた人が数名いた。

しかし、高校3年であった91年11月の時点では、約8割の人がA工造船科に入って良かったと語っていた。その理由として多かったのは、「専門的な知識や技術を身につけることができたこと」(10名)、「友達が良かったこと」(10名)、「先生が良かったこと」(6名)、「満足のいくところに就職できたこと」(5名)であった(複数回答)。

本事例の11名も同様である。彼らの中で、「成績ランクで仕方なく」A工を受験した人は7名(①③⑤⑥⑫⑮⑳)，第2志望の造船科に回されてきた人は5名(③⑥⑬⑮⑱)であった。しかし、高校3年の11月の時点では、③を除く10名がA工造船科に入って良かったとしていた。その理由として彼らがあげていたことは、「専門的な知識や技術を身につけることができたこ

表 27 「ランクの高い学校に入って、有名大企業に就職すれば、いい生活ができる」という考えについて（その1）

対象者 No.	a	b	c	d
①	○	○	×	○
「ランクの高い学校に入って、有名大企業に就職すれば、いい生活ができる」という考えに対する評価 ① うん、まあ確かに一般論（としては、そういう考え）もありますよね。でも、実際は、まあどうだったか、まあ自分のやりたいことが出来れば、「いい生活ができる」ではないかと。 筆者 だと、これは必ずしも違うだろうってこと？ ① まあ、そうですね。 筆者 うんー、自分のやりたいこと。 ① うん。が、あれば、まあ見つければですね。で、出来れば。 筆者 あー、それは必ずしも有名大企業に入んなきゃ出来んってことじゃなくて？ ① うん。まあ、そうですね。 筆者 うんー。 ① うん、逆に、そつ、有名大、大企業に入った方が出来ないでしょ うね。自分の（やりたいことは）。 筆者 なぜです？ ① いや、いろいろ組織とかいろいろあるでしょう。 筆者 あー。 ① うん。自分1人じゃ、うん、動けるものと。 筆者 はい。あー。 ① その周りは面倒だとかなんかな、要は動けなかったり。 筆者 あ、自分が動きたくても周りが面倒だからやめろって言われたり？ ① うん、そつ。 ○そういう考えを持つようになった訳 ① 実際、まあ、確かに、まあ、まあ居ても…。 筆者 うん？ ① うん？ まあ確かに会社に居ても、まあ実際、なんだろう。うん。色々案出しても、周りは動いてくれないですよ。 筆者 あー。 ① そういう風に、向こうは面倒だとか。うん。結局自分が意見出したから、じゃあお前やれっていう風に。 筆者 あー、なるほど、なるほど。 ① って（いう）か、うん。うん、人がいないから結局は、誰もやりたがらないっていう、そういうのがありますよね。 筆者（人が）少なすぎて？ ① うん。そうですね。うん。自分のあれをこなすのが一杯で。うん。新しいことやれっていうのも（出来ないですね）。 筆者 余裕ありませんか？ ① はい？ 筆者 余裕があんまないですか？ ① うん、そうですね。結構、周りに、うん。				自分の子どもにも、同じような考えをもってほしいか／同じような生き方をしてほしいか ① いや、そうですね。うん。 筆者 うーん。 ① ま、やりたいことができれば。 筆者 うんー。…なるほど、なるほど。（やりたいことが）やれば別に、有名大企業とかにこだわる必要ないよ、と？ ① うん。
③			×	○
③ いや、これは違うと思いますよ。 ……中略…… ③ そんな科でも（＝A工で一番ランクが低い科でも）…その、まあいろいろ大企業？ とかに就職してる人も結構いますから。うん。ぼくだって「社」なら、あの、道内の中でも大、大手みたいなもんすよね。 ……中略…… ③ だ（から）、必ずその学力重視っていうのは、ちょっと俺は違うと思いますけどね。 ……中略…… ③ 有名な、その大学とかやっぱ行行って今の就職難の時代とかやってるじゃないすか。それで、そんな名前聞いたこともないような中小企業だとか入ってますもんね。やっぱ、その、学校いいとこ出たからっていい企業に入れるとは必ずしもやっぱ限らないですもんね。				④ ええ。
⑤	○		×	○
⑤ 思いません（笑）。 筆者 あー、はあー、なるほど。っていいますと？ ⑤ 本人努力次第でどうにでも変わると思うんで。 筆者 はあー。 ……中略…… ⑤ 本人の自己マンですよ、こういうのって。 筆者 あー。 ⑤ いいとこ入ったからいいとこ行けるとかっていうのは。 筆者 ふんふん。しかもそれがいい生活か、いい生活か・いい人生かっていうとそんなことはない？ ⑤ うん。				⑤ うん。
⑥	○		×	△
⑥ 今に限って言えばちゅう語なんですけど、これは必ずしもいい生活できるっていうことになんないと思うんですね。 筆者 ぼおー、はい。、といひますと？ ⑥ いや、金稼ぎはできると思うんですけど（笑）。ええ、キザ的な言い方すれば心の充足が不足しがちな気がするんですね。まあ、仕事趣味にしてる人の意見なんですけど。 ……中略…… ⑥ ランクの高い学校、学校もそうなんですけど、何、何て言ったらいい、まあ、こっち専門（学校）卒だったんですけど、大学はまあ確かにランク高いと思うんですけど、大学（は）、専門学校ほどー、一か所突き詰めめかどうかちょっとわかんないで（笑）。 ……中略…… ⑥ 偏見に近いかもしれないんですけど、大学入ったら入ったっていう最終目標になって多少落ちつくと思うんですけど、専門学校だとそこからまだ突き詰めなきゃいけないっていうのあるんで。 筆者 あー。 ⑥ で、まあ、確かに大学のランク低いと大企業にも入れないとは思いますが、ま、下から上がってくのもおもしろいかもしれないですし（笑）。				⑥ 自分の意見はそうだったんですけど（＝左に述べたような考えなんですけど）、まあ、反面で社会的にはそういう意見もあるだろうなあっていう。 筆者 こういう考えが？ ⑥ ええ。 筆者 うん。 ⑥ 金銭だろうなあっていう考えもまたあるんすよね。 ……中略…… ⑥ まだわかんないすね、これ（笑）。 ……中略…… ⑥ でも、きっと同じ、同じ生き方しろとは言わないんですけど、忠告的に言うと思うんですけど。

表27 「ランクの高い学校に入って、有名大企業に就職すれば、いい生活ができる」という考えについて (その2)

対象者 No.	a	b	c	d
⑬	○	○	×	○
			「ランクの高い学校に入って、有名大企業に就職すれば、いい生活ができる」という考えに対する評価 ⑬ いや、全く違うと思います。 筆者 あー。 ⑬ ま、多分、いや、どうなんでしょうね。いや、いい高校っていうのは、例えばランクの、こう高い学校が果していいかってゆったら、ばく違うと思うんですよ。 筆者 はあはあはあはあ。 ⑬ だから自分に合った高校がいいと思いますね。例えば水産にしろ、工業にしろ。 筆者 うーん。 ⑬ 潮陵行ける頭があっても、ばく工業好きだって、ばく水産好きだっていうんだったら、そっちに行った方がいいと思うし。 筆者 うーん。 ⑬ で、有名大企業に就職すれば、まあ確かに安定はされてるんですけど、で、今銀行だって潰れる時代じゃないっすか。 筆者 そうなんですよ。うん。 ⑬ ええ。だからはっきり言って安定っていうのは、これから先無いと思えば。 筆者 あー。 ⑬ ええ。で、これもいい生活っていうのはお金を貰ったらい生活か、ってゆったらやっぱり違うと思うんですよ。お金を持ってもやっぱ心寂しい人もあると思うんで。 筆者 そうですね。ええ。 ……中略…… ⑬ 多分潮陵にどうしても入りたいとかっていうのはやっぱり一種のステイタスだと思うんですよ。	自分の子どもにも、同じような考えをもってほしいか／同じような生き方をしてほしいか ⑬ うん、も、ありますしね。
⑭		○	△	□
			⑬ それは、その通りだ(思う)。 筆者 はあはあはあはあ。 ⑬ うん。その後の自分がどう変わるかで。 筆者 はあ。 ⑬ この後ですね。これはこれで、その通りだと思います。 筆者 あ、これはこれ？ でも、その後はその後？ ⑬ ええ。 筆者 ってことは、その後はこの通りに行くかどうか分からない？ ⑬ わかんない。 筆者 ふーん。はあー。	筆者 子どもができたならば、あれっすか、やっぱランクの高い学校に行かせたいと思います？ ⑬ うん、いやあー、難しいとこだあ。 筆者 うーん。ですよええ。 ⑬ ええ。 筆者 で、大企業に就職させる、たいと思うかどうかっていうことになると、やっぱ難しいっすかねえ。 ⑬ うーん。なんか…。うん、こう、いい大学入れればいい会社入るよとは言うけども、それを多分強制はしないと思う。 筆者 ああー。 ⑬ その道は教えてあげるけど。どれ選ぶかはやっぱり。 筆者 本人次第？ ⑬ ええ。子ども次第。
⑮		○	△	
			⑬ 別にそれはそれでいいんじゃないですかね(笑)。 筆者 ああ、はあはあはあはあ。 ⑬ だけど、今は別に、俺的にはそんなでかい会社に入りたいとか、そういうのはないっすけどね。 筆者 うーん。 ⑬ 逆にちっちゃい会社とかで人間関係いい会社の方がいいっすけどね。潰れなければ(笑)。	⑬ まあ、自分の好きなようにやるのが一番いいとは思いますがね。ただやっぱ、人間関係とかそういうのはね、大事にしないとあれでずからね。 ……中略…… ⑬ どうすれちゃうのはいないと思いますけどね。 筆者 うーん。 ⑬ やっぱ自分に合うやり方、生き方とかもあるだろうし。
⑯	○	○	×	□
			⑬ いや、別に人それ、それぞれだから(笑) いいと思うけど、いい、いい生活っていう意味がわ、まずわかんないね。 筆者 あー。…ふんふんふんふんふん。 ⑬ 価値観の違いなんじゃない。 筆者 あー。 ⑬ そのいい生活っていうのは。 筆者 うーん。あー、なるほど、なるほど。⑬さんにとっての(いい)生活っていうのは？ ……中略…… ⑬ 自分したいことしたい。 ……中略…… ⑬ ま、今の仕事でいえばまあ、車運転して？ うん、そういうことにしても。 筆者 あー、なるほど。最初の方で聞いたことと関係してますね。その、出世とか望まないっていうことと。 ⑬ そういうのは別にいい生活食まないからね。 筆者 あー。 ⑬ うん。やっぱし自分のしたいことしてるのが一番、いい生活してるのかな。 ……中略…… ⑬ (お金を)あんまり多くもらって、仕事しないとかな、そういうの困るし。 筆者 あー。 ⑬ 怠けるとかな。 筆者 あ、やっぱ、嫌いっすか？ それは。 ⑬ うん、基本的に、仕事すること自体は好きだから。	筆者 お子さんにあれですかね。お金が高いとか、出世するとか、この会社は、何ていうんすかねえ、その一、ステイタス、ステイタス高いぞとかっていうので選ぶんじゃないかって、自分のやりたい仕事やられて言いたいっすか？ ⑬ うん。 ……中略…… ⑬ あとは、あと自分でやったことは自分で責任取りなさいっすうだけで。自分で責任取れないことはするなっすうだけで。 ……中略…… ⑬ やっぱし女の人一つのは勉強すれば勉強すればって、ね、あれだけでも、別に勉強が、ま、嫌いならなくていいし。ただしないで苦勞するのは自分だからその(=その)責任は取って、ま、したいことすればいいんでないかっすうだけで。 ……中略…… ⑬ したけど、ま、本人が、ね、そういういい学校行っていいとこで働きたいっすうなら、それはそれでいいし。ま、自分で思ったこととすればいいんでないかっすうだけで。 ⑬ やっぱしね、したいことだけするんだって誰でも出来るからね。その責任をどう取るかだから。 ……中略…… ⑬ だからうちは、うん、子どもにはそれぐらいだね。言うことだった。あとはなんもない。 筆者 あー。も、これだけできたらオッケーですよ。この2つ(=したいこととそれ、責任を取れ)できれば、もう。 ⑬ うん、あとはなんも。うん。

表 27 「ランクの高い学校に入って、有名大企業に就職すれば、いい生活ができる」という考えについて（その3）

対象者 No.	a	b	c	d
㉔	○	○	×	○
			「ランクの高い学校に入って、有名大企業に就職すれば、いい生活ができる」という考えに対する評価 ㉔ ……うん。この。どんな生活しててもやっぱり、その、充実感じゃないすか。充実感がないと、ちょっと物足りないんじゃないかな。 筆者 あー。…ふんふんふんふんふん。となると、あれすかね、仮に、<u>有名大企業に入ったにしても、金だけでは充実感がないかもしれない？</u> ㉔ <u>と思います。</u> ……中略…… ㉔ (大企業に入ればやり甲斐のある仕事ができ、充実感を感じることができんじゃないかという考えもあるが)逆じゃないですかね。 筆者 はあはあはあ。といいます？ ㉔ うーん、充実感があるから、その、仕事とか、仕事のやり甲斐とか？ 普校の付き合いとかも、満足出来るんじゃないすか。 ……中略…… ㉔ ええ。(会社の大きさは関係ない)と思いますけど。 ……中略…… 筆者 (略)あれですかね。最近変わってきてるかな？とも思うんだけど、まだでもこの考え、根深いすかね？ ㉔ うーん、そうすね。 ……中略…… ㉔ 辞めた時とか、自分に何もなくなった時に、何が残ってるかっていう風に考えるんすけどね、ぼくは。 筆者 はあはあ。はい。 ㉔ <u>大企業に入って、うまく行けばまあいいけど、辞めた時に個人の、自分個人で何が出来るか、何が残ってるかっていう風に思</u> <u>うんすけど。だから、大企業に入っても自分で、その、技能だっ</u> <u>たり、そういうのがあるんだったらいいと思うんすけどね。</u> 筆者 うーん。 ㉔ <u>大企業ってそういうのはないですからね。えてして、人に頼っちゃ</u> <u>う。</u>	自分の子どもにも、同じような考えをもってほしいか/同じような生き方をしてほしいか ㉔ はい。 筆者 積極的に伝えたいなって思います？ そんなことはないぞと。 ㉔ はい。 ○そうした考えをもつようになったのは気の合う親しい友人(A24)の影響 ㉔ 彼は、そうですね。あの、高校も定時制だし、会社も色々移ってるし、その小さい所でも一生懸命自分の考えを持ってやり抜く。影響受けますけど。 筆者 うーん。充実感持って働いているってことですか、A24さん？ ㉔ ええ。 筆者 あー。ああ、そっか、それで必ずしもでかなくても、自分の考え持てやれば？ ㉔ うん、そうす。 筆者 あー。高校時代、仰ってましたね、そういえば。
㉕		○	×	○
			㉕ 一部ありますよね。一部はあるけど、絶対そうとはいえないと思います。 筆者 うん。 ㉕ うん。やっぱり、うーん、そうすね。まあなんでかっていわれども、何となく、そう、色々なことをみてたりすれば、そういう風に感じますよね。 ……中略…… 筆者 決してそうではない？ ㉕ 警察(官)になって、捕まってる人いるぐらいすからね。	㉕ (自分の子どもにはランクの高い学校に入って、有名大企業に就職してほしいとは)ああ、俺、思わない。カミさんはどう思うかわからないすけど、ぼくは思わない。
㉖	○	○	△	○
			㉖ いや、これはこれでいいと思うんですけど、あの一、世間性が知らないっていうのが、これも営業やってからなんですけども、よく学校の先生とか、まあ公務員関係ですか、っていうの世間知らないんですよ。世間一般。 筆者 うーん。うんうん。 ㉖ っていうか、世間一般は知ってるんですよ。 筆者 はい。 ㉖ ですけど、その、世間、世間を知らないつつも幅広いすからね(笑)。だから世間の常識とか、そういうのをわかん。わかんない人が多いなあっていうのはちょっと気づいてたんですよ。だから学校の、その、新任の先生とかと話しても、話なんないんですよ。 筆者 あー。ふんふんふんふんふんふんふん。 ㉖ で、周りの先生、やっぱり知ってる先生とか多いすから、あの、話してると、「お前よりガキだ」って言うんすよね。 筆者 うーん。うんうん。 ㉖ 「お前の方が、やっぱりもう18から働いて社会知ってるから、お前の方が大人だ」って。 ……中略…… ㉖ 大体K先生(A工造船料の時の担任)とそういう風な話するのが多いんで。 ……中略…… ㉖ これ(=「ランクの高い学校に入って、有名大企業に就職すれば、いい生活ができる」という考え)ばかりが全てじゃないと思いますけどね。 筆者 うん、ですすね。 ㉖ ええ。好きなことやってもいいんじゃないかな。	㉖ だからまあいい学校入っていいとこに就職するっていうのも、まあ理想は理想ですよ。やっぱり。自分がほんとに高校出て、就職してこういう風な状態ですから、で、それでもちゃんとその世間性を<u>知って、友達が一杯いて、そういうの。</u> 筆者 うーん。 ㉖ そういう風には育ってほしいですけど。

- (注) ・ a : ○→今やってる仕事そのものが好きなケース。 (実態調査より作成)
- ・ b : ○→気の合う親しい友人と年に数回以上会うケース。
- ・ c : 「ランクの高い学校に入って、有名大企業に就職すれば、いい生活ができる」という考えに対して、×
- 違う、△→両義の評価。
- ・ d : ○→子どもにも自分と同じ考えをもってほしい/自分と同じような生き方をしてほしい、△→わからない、□→伝えるが、あとは本人次第。
- ・ 下線部は筆者。

と」(①⑤⑥②③③⑧),「満足のいくところに就職できたこと」(⑬),「先生が良かったこと」(⑫⑬),「その他」(⑮③⑦)であった。

学校歴主義に対する彼らの距離化は、こうした“暴風圏”のくぐり抜けを前提としている。その上でどういった経験が、そうした距離化に関係してきたのだろうか。表27をみるに、職業志向を有する人ほど、友人ネットワークにおける付き合いを享受している人ほど学校歴主義を相対化し、それとは異なる価値観を対置(しようと)していることがわかる。特徴的な事例をあげよう。

⑥——職業志向

⑥ いや、金稼ぎはできると思うんですけど(笑い)、ええ、キザ的な言い方すれば心の充足が不足しがちな気がするんですね。まあ、仕事(を)趣味にしてる人の意見なんですけど。

⑫——職業志向・友人ネットワークでの付き合いを享受

⑫ いい生活っていうのはお金を貰ったらいい生活か、ってゆったらやっぱり違うと思うんですけど。お金を持ってもやっぱり心寂しい人もいると思うんで。

⑬——職業志向・友人ネットワークでの付き合いを享受

筆者 (前略)⑬さんにとっての(いい)生活っちゅうのは？

……中略……

⑬ 自分のしたいことしたい。

……中略……

⑬ ま、今の仕事でいえばまあ、車運転して？ うん、そういうことにしても。

……中略……

⑬ そういふの(＝出世すること)は別にいい生活含まないからね。

……中略……

⑬ (お金を)あんまり多くもらって、仕事しないとかさ、そういうの困るしさ。

筆者 あー。

⑬ 怠けるとかさ。

筆者 あ、やっぱ、嫌いっすか？ それは。

⑬ うん、基本的に、仕事すること自体は好きだから。

②⑥——職業志向・友人ネットワークでの付き合いを享受

筆者 (前略)仮に、有名大企業に入ったにしても、金だけでは充実感がないかもしれない？

②⑥ と思います。

……中略……

②⑥ 大企業に入ってて、うまく行ったらまあいいけど、辞めた時に個人の、自分個人で何ができるか、何が残ってるかっていう風に思うんですけど。だ(から)、大企業に入っても自分で、その、技能だったり、そういうのがあるんだったらいいと思うんですけどね。

筆者 うーん。

②⑥ 大企業ってそういうのはないですからね、えてして。人に頼っちゃう。

前章まででみてきたように、彼らの多くが仕事と友人との付き合いを重視している。彼らの

中には仕事が好きの人が結構いた。それは、ホワイトカラー労働に従事している人に限られない。彼らにおいては、ブルーカラー労働、しかも「不熟練な」それと一般的には目されている労働に従事している人の中にも、仕事を好む人が多くいた。彼らにおいては、少なからぬ人が、仕事の中に技能形成の可能性とやりがいを見出す意志と願望を持ち、実際に見出している。

そして、彼らのほとんどが、幼い頃から、友人との付き合いを享受する生活を送ってきたし、今も送っている。これから、家族ぐるみでそうした生活を送って行くことだろう。それが、彼らの人生の軸線となっている。

彼らは、仕事と友人との付き合いを通して、自分たちなりのライフスタイルと生きる意味を見出し、つくり上げてきたのだと思われる。だからこそ、「ランクの高い学校に入り、そこを経て、有名大企業に勤めてステイタスと高い給料を得る——そういう生き方ばかりが全てじゃない。俺（たち）みたいな生き方もアリだ」と実感的に確信し得たのだろう。

この間、私は、彼らと話をしていた、彼らが醸し出す「落ちつき」ともいえるべき雰囲気に触れ、「大人だなあ」と感じるのが度々であった。なぜ彼らが「大人」だと私は感じてしまうのか。そもそもこの場合の「大人」とは何か。これらについては未だ思案中であるけれども、次のように思う。

彼らは、「ノンエリート」であるということで「落ちこぼれ」意識や「負け犬」意識を抱いてはいない。むしろ、彼らは、「ノンエリート」としての生き方に手応えを感じ、自らの生き方としてけれん味なく引き受けている。だからこそ、学校歴主義を相対化し得たのではないか。私が彼らを「大人」だと感じてしまうのはこのことと関係しているのではないか。

(2) これからの生き方について

では、その上で彼らは、これからどんな生き方をしたいと思っているのだろうか。表 28 は、「これからどんな生き方をしたいと思っていますか」という質問に対する、選択肢の選択状況を示したものである。「5. 人より上に立ち、社会的に認められる人間になる」を選択した人が皆無だということが示唆するように、彼らは競争主義的な生き方をしたいとは思っていない。

おそらく彼らは、「自己責任」イデオロギーによって支えられかつそれを助長している、「勝ち組」を目指す競争に乗り、何としても勝ち残ろうとは思っていないのではないか。自分の子どもに関しても同様に、何が何でもそうした競争で勝ち残らせようとは思っていないのではないか。そうした競争から降りる、ないしはそもそも乗らないのではないか。この点については、今後、またお会いし、お話をお聞きする中で確かめて行きたい。

表 29 は、これからの生き方の具体的な内容として彼らが語ったことを示したものである。事柄として多いのは、やはり、仕事と、友人との付き合い・家族との生活の2つで、前者が4名(①③⑥②⑥)、後者が5名(⑫⑬⑮⑮③③)となっている。

仕事に関することをあげた4名のうち①⑥②⑥の3名は、職業志向を有している。いずれもが、技術・技能を磨いて行くことを重視したいと考えている。

友人との付き合い・家族との生活に関することをあげた5名はどうだろうか。⑫は、地位や名誉ではなく、「やっぱ人間の本質的なハートみたいなのを、やっぱ、みて」友人と付き合って行きたいと考えている。

⑬⑮③③の3名は、家族との生活に関して語っている。⑮は、彼が父親代わりになっている2人の甥との関わりを中心に、父親や姉も交えた家族との生活を大切にしたいと思っている。近々

表 28 これからどんな生き方をしたいか (2つまで)

対象者 No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
①		◎					○				
③	○			◎							
⑤		○					◎				
⑥	◎						○				
⑫		◎									○
⑬							○	○			
⑮				○				◎			
⑱		○						◎			
㉔				○		◎					
㉟		○									◎
㊳	○							◎			

(注) ・◎→1番そうだと思うこと。

(実態調査より作成)

選択肢

1. 自分の能力や技術をみがき、それを仕事に生かす 2. 自分らしさや個性を大事にする 3. 社会の決まりを守り、人に迷惑をかけない 4. 仲間や友人を大切に、人間関係を豊かにする 5. 人より上に立ち、社会的に認められる人間になる 6. 困難に負けず、たえず努力して向上する 7. あまり無理をせず、自分の能力や立場に合った生活をする 8. 家庭生活を大切に、家族で協力し合う 9. ボランティア活動に参加するなど、人のために役立つ生き方をする 10. 社会の問題に関わり、積極的に世の中を変えていく 11. その他 ()

結婚する⑬は、「自分の能力や立場に合った生活を、生活を家族でする」ようにしたいと考えていると共に、「年取ると自分の親のことも考え出して」くるとしている。2歳の息子を持つ㉔は、「子どもに好かれる親になりたい」と、「自分の中でやっぱ理想(を)持って」いる。そのモデルは、「人間性で」「勝てない」と思っている自分の父親である。

この3名が示唆するように、彼らは親のことをさり気なく気に掛けてもいるようである。他にも、親の老後のことが気に掛かるようになったと語っていた人がいた。彼らの場合、親子の断絶はないように思われる。

そして、友人との付き合いと家族との生活の両方について言及しているのが、㉔である。彼は、気の合う親しい友人との家族ぐるみの付き合いを、既婚者3名の中で最も親しくしている人である。彼はいう。

⑱ だから、ね、結局そやって e₁₈さんと酒飲んでもいっつもお互いに、いや金がないとかって、そういう時はま、少ないお金出し合う時もあれば、「したらうち、ちょっとあるから、うち出すよ」ってお互いにやってるぐらいだから。ま、それでもね、酒飲んでは楽しいし、話してれば楽しいし。やっぱし、うちも、ね、まあ、生活苦し、苦しくても、うん、喧嘩し、ま、喧嘩してもいいけど、うん、笑えればそれでいいんでないかな。

家族、そして友人と「仲良くて、まあ、貧乏でも生活できればそれでいいんでないか」——これが彼の人生哲学の基軸になっている。

彼は、お金がたくさんなくてもよい人生を送れると考えている。とはいっても、もちろん、今の給料で満足している訳ではない。4章でみたように、彼は、今の勤務先で不満なことの1つとして、「給料が安いこと」をあげていた。確かに、彼の場合、11名中最も長時間働いている

表 29 これからどんな生き方をしたいか（2つまで）（その1）

対象者 No.	a	b	c
①	○	○	②
① 要は自分の能力とか、を磨くっていうの、なんだか自分の能力っていうのは、能力っていうのはあまり期待できないっていうか。 筆者 はっ。 ① 足りないっていうか。（聞き取り不能）今まで？ 例えばさっき言ったU、さんっていましたよね。 筆者 U、さん？ ① うん。 筆者 あ、大卒、 ① うん。 筆者 はい。 ① すこい上の人とかいっぱい見てきてるから。うん、あとは、元々防熱グループ、6人いたって言いましたよね。 筆者 はい。 ① 最初そのうちの1人が東大生なんですよ。 筆者 はー。 ① うん。要は、上の人をいっぱい見てきてるから。頭のいい人。そういうのを見てると、なんか自信がないっていうか。うん。そういうのありますね。っていうか、逆に東大生なんか、もうほんとに、今までこっちでも、ねえ、小学校、中学校とか（で）頭のいい人はいないけど、お前頭いいなあとかなんかいろいろあったけど、もうそういう次元じゃなくて、もっともうほんとに、うん、頭のいい人が、うん、実際に見てきて。 筆者 幾つぐらいの人ですか？ ① その人まだ29とか、そのぐらいですかねえ。 筆者 今、29ぐらい？ ① ぐらいでしょうね。 筆者 はあー。実際、 ① だから、そういう人達見ると、うん。 ① 出来ました、この人た？ 頭良かったですか？ ① 良かったですね。だってもう計算とか早いし。 筆者 はあー。 ……中略…… ① 結構会社にもいっぱいいるんすよね。東大生とか。 ……中略…… ① そういう人達見ると。 筆者 ……うん。 ① うん。自分の能力っていうもの、結構。 筆者 あー。 ① うん。そこまで行かないっていう風に（思う）。 筆者 はあはあはあはあはあ。うーん。 ① それだったらどっちかって（て）いうと、まだ2番の「個性」とか、<u>そっちの方が</u>。 筆者 うん。…ふんふんふんふんふんふん。 ① やっぱ2番ですね。うん。ま、ほんとどっちかって（て）いうと、ねえ、1番とか（の）<u>自分の能力とか（技術をみがいて仕事に生かすという答えを選びたいという気持ち）</u>、あるけども、ま、そんなキザなって、っていうか。			
③		④	③
……中略…… ③ ま、友人等もやっぱあるんですけど。			
⑤	○	⑦	⑤
○「7. あまり無理をせず、自分の能力や立場に合った生活をする」について ⑤ 一生懸命ちゅうのは、うん。会社のために、そういうのは、うん。 筆者 あー。は、やりたくない？ ⑤ うん。自分で生活できる分だけどうかなれば、いんでないかと。 ……中略…… ⑤ 考え方に、あれなんでしょうね。ゆとりが出来たちゅうか。 筆者 はあはあはあはあはあ。はあー。（中略）7を選んだならば、あー、霸気がないと、元気がないと、もっと挑戦せんと、で特に若いんだからと、 ⑤ 言われるでしょうね。 筆者 ええ。とかっていう人いますでしょ？ ばか逆、違うん、それ違うんじゃないかっていう気がしてね。 ⑤ うん。だから、ま、そういう考えをされる自体が、うん。ねえ、普通の、一般の人は絶対そういう考えでしょう（笑い）。 ……中略……			
⑥	○	①	⑥
⑥ あまり無理する性格じゃないんで。 ……中略…… ⑥ この場合の無理って、あの、仕事し過ぎとかそういうのっていうよりも、何、何て言うんでしょう。あまり、関わり、関わるちゅうんすか。深く掘り下げないように、程々にしとくっていう主義なんですよ。 ……中略……			
⑤ 取り敢えず安全圏を確保して、その中で行動するっていう主義なんすよ。 筆者 あー。その中で技術を磨く？ ⑥ で、技術磨けば多少広がっていくんで。その上でまた行動するっていう。 筆者 あー。地道ですね。 ⑥ （笑い）あまり無理して失敗するのも嫌なんですよ。			

表29 これからどんな生き方をしたいか(2つまで)(その2)

対象者 No.	a	b	c
12	○	○	⑫ 自分を守るような嘘は一番よくないと思うんですね。 筆者 はあー。 ⑫ 逆についた方もやだし、つかれた方も多分やだと思うんですね。 ○「2. 自分らしさや個性を大事にする」について ⑫ 俺一番やっぱり思うのが、(知り合いのラッパーが言っていた)「金より大切なハート」っていうのを一番よく使うんですね。 筆者 はあー。 ⑫ ええ、だから、まあ、それにはいろいろあるんですけども、お金、例えば今何でもお金で買えるっていうじゃないですか。 筆者 そうですね。 ⑫ 例えは恋愛だってお金で買えたり、自分の、何ていうんですか、奥さんもお金で買えたり。 筆者 そうですね。 ⑫ ええ、友達もお金で買えたりとか。そ(う)いうんじゃないですか。 ……中略…… ⑫ だから僕自身もやっぱり友達とかそういうの選ぶ時、地位とか名譽だけじゃなくて、やっぱり人間の本質的なハートみたいなのを、やっぱ、みて。うん。あれですね。 ……中略…… ⑫ して、なんなんだろう。と。いやあ、いいフレーズだなあと思って、んで、よくこう、いろんなこう考えてみたんですよ。したらやっぱ「金より大切なハート」っちゃうのはやっぱりそういうあれなんじゃないかなと。 筆者 うんうんうんうんうん。 ⑫ だからお金より大切ななんだからあって。 ○「11. その他(『人に迷惑をかけない』)」について ⑫ 優等生(=信念を持った真面目な人ではなくて、真面目な振りして人にどうみられるのかを気にしている人)にみられるっていう奴はやっぱり人の、人にはめられることじゃないし、人に認められることじゃないんですよ。で、結局ボロ、自分のボロみないの隠して生きてる訳じゃないですか。(後略) ……中略…… ⑫ 今最近の言葉なんですけど、プレイヤー、プレイヤーって言葉あるんですよ。 ……中略…… ⑫ (法に触れつつギリギリの仕事をする)ハスリングだったらもう、体がもたないから、そういう生活はもうやめよう、だけどプレイヤーで、プレイヤーってまあ遊び人なんですけど、あ、悪い遊びじゃなくて健全な遊びでありますよね、なんか、例えばクラブに出掛けたり、出掛けたり楽しんでくるとか、一般的に「あの入道なんだよー」って言われるかもしれないんですけど、やっぱりそういうプレイヤーでいけたらいいっていうのは(ありますね)。うん。 筆者 はあー。その、最近の言葉とか仰ってる。 ⑫ ま、最近って言うか、まあ、一応、その、僕たちこのヒップ・ホップやってるとこの、ヒップ・ホップのその、黒人が使う言葉なんですよ。
13	○	7 8	⑬ えー、だからもう、年取るごとに、これからの生き方の選択肢は狭まっていく訳で。そこで、まあ都会から(移って)農家になる人もいれば、そ(う)やって無理して。そこまでの、そこまではしたくないなあと。 筆者 うんうんうんうんうんうんうん。 ⑬ ある範囲、仕事がある範囲で、自分の出来る範囲の仕事があるんならそれを、合わない、合わないからやめるっちゃう感じ。 筆者 うんうんうんうん。で、家族、これから結婚して、ま、家族を養うと? ⑬ うーん。年取ると自分の親のことも考え出して。 筆者 あー、なるほど。 ⑬ 別に(笑い)。
15	○	⑬ 4	
19	○	⑬ 2	筆者 こんな家族、こんな家庭は築きたいという風に、あの、特に強く思うことありますか? ⑬ いや、特別なけど、うん。仲良くって、まあ、貧乏でも生活出来ればそれでいいんでないかって思うけど(笑い)。 ……中略…… ⑬ だから、ね、結局そやってeさんと酒飲んでみてもお互いに、いや金がないかって、そういう時は、少ないお金出し合う時もあれば、「したうち、ちょっとあるから、うち出すよ」ってお互いにやってくるぐらいだから。ま、それでもね、酒飲んでれば楽しいし、話してれば楽しいし。やっぱ、うちも、ね、まあ、生活苦しい、苦しい、うん、喧嘩して、まあ喧嘩してもいいけど、うん、笑えればそれでいいんでないかな。 筆者 はあー。はあー。 ⑬ うん。その方が面、面白みあると思うしね。金ばっかしあったって面白くないからね。全部みつかって、ね、充実してしまえばね、犬も見えてこないし、頑張らうっていう。そういう(聴き取り不能)が…… 筆者 あ、充実しちゃったら、 ⑬ そうそうそう。もう、それから、もうちょっと頑張っているなと覚えないとかな、そういう気持ちもなくなっちゃうかもしれないし。 ……中略…… ⑬ 満たされ過ぎればね。 ……中略…… 筆者 あー、いい、いやー素晴らしいあれですね、あー、素晴らしい家庭ですね。仲良く笑えればそれでいい、と。 ⑬ うん。 筆者 楽しいと。 ⑬ うん。そうでないかな。したけど、それが一番難しいけど。やっぱしいれば喧嘩もするし、ね。 ……中略…… ⑬ 子どもがさあ、騒いだらとかね、うるさい怒る時もあるしさあ。ね。うん。それが一番難しいことかもしれないね。 ……中略…… 筆者 ひょっとしたらお金稼ぐ方が簡単な時の方があるかもしれないで すね。 ⑬ うん。簡単だと思う。 筆者 あ、やっぱし。 ⑬ うん。 ……中略…… ⑬ あんまし金あったからって、全部金で片づいちゃえばね、面白くないからね。 筆者 あー。 ⑬ うん。金ない中でどうやってやってくっちゃうのが面白いとどこから(笑い)。 ⑬ うーん、やっぱしそういう人(=金で片づくと考えている人)はちょっと、多いし。 ……中略…… ⑬ っちゃうか、基本的にあれだよな。人間味がなくなっちゃうか、寂しいんだよな。 ……中略…… ⑬ そういう、モノとかさ、ね、そういう金だけで片づくんでなくて、やっぱし、ね、そういうお互いのその話とかさ、そういうもので(聴き取り不能)ないと、うん、寂しいと思うよ。 筆者 うーん。 ⑬ ね、その人間同士のね、あれがないとき。 筆者 あー。 ⑬ うん。別に金で片づくんだらもう、会わなくなっちゃって? 相手の口座に入れるだけで済むかもしれないし。 ……中略…… ⑬ したら、やっぱね、そういう、ね、人間同士の関わりもないし。 ……中略…… ⑬ (人間同士の関わりには煩わしさやトラブルがあるが)それもまた、ね、やっぱり人間同士だから、うん、あんまり無いのも困ると思うし。 ……中略…… ⑬ だ(から)そういうの全部ひっくるめて、そういう付き合いだらうからね。
26	○	⑬ 4	○6について ⑬ うーん、仕事でも、普通の、普段の生活でも。 ……中略…… ⑬ 仕事面が多いですかね。
27	○	⑬ 2	⑭ 何をしたいって聞かれたら答えるのはすごい難しいんですけど、でも、なんか、こうテレビに出る、新聞に出る、そういう社会的、社会的、うーん、なんでもいいんですよ、別に、いいことでも悪い、悪いことは(い)やけど、なんかこうすごいあって思われるような。 筆者 うんうんうんうんうんうんうん。 ⑭ うん。は、変わったなあ、変わったことあるんだなあ、こういうこともあるんだあって(人が)思うような風に思わせるような、うん、人間にならなっちゃうのがありますよね。 筆者 で、しかもそれは自分らしさや個性を生かしたい? ⑭ うん。もちろん、それには自分が個性があるからこそ、それがつかっちゃう感じ。うん。 筆者 はあー、なるほど。 ⑭ うん。なんか変わったことしたいっていう気持ちですね。だから結局。 ……中略…… ⑭ 変わったことがして、人によくみられたらいいと思うんですよ。

表 29 これからどんな生き方をしたいか（2 つまで）（その 3）

対象者 No.	a	b	c	
㊤	○	○	㊤	○ 8 について ㊤ 自分の中でやっぱ理想持ってますから。 筆者 ほほほ。どんな理想ですか？ ㊤ こういふ親父になりたいいう。 筆者 どんな？ ㊤ いやあやっぱ子どもに好かれる親になりたいいすから。 筆者 はい。ふーん。 ㊤ たとえ子どもが2人いようが3人いようが。 筆者 うーん。子どもに好かれる親といいますと？ ㊤ うーん。まあ、ぼくの親父がそうなんですよ。 筆者 あー、あああああ。 ㊤ 何時まで立っても、その、憎めないんです、親父。 筆者 ほはおほおほお。 ㊤ なんて。カッコよくゆうと、ほんとにあの、カッコいいお父さん？ 筆者 年取っても。 筆者 はい。 ㊤ みんなに自慢できるお父さん。
				筆者 うーん。うんうん。 ㊤ そういう風に、なりたいたとは思ってますね。 ……中略…… ㊤ 親父には勝てないと思ってますから、未だに。 ……中略…… ㊤ 人間性で。 筆者 ほおー。 ㊤ も、親父ももう、とにかく知り合いが多い親父ですから。来る者を拒まずで（笑い）。 筆者 ほおー。 ㊤ で、嫌いな人でも仲良くなろうっていう風に一応こう試みるんですけど、ダメな人間はダメな人間で、その、ほんとに浅く付き合うってか、そんな構わないうってうか。 筆者 はい。 ㊤ だからやっぱどこ行っても、あの一親父の息子であれば、「ああ、あいつならだいたいよだ」という風を感じてゆわれてるんすよわ。

(注) ・ a : ○→今やってる仕事そのものが好きなケース。 (実態調査より作成)
 ・ b : ○→気の合う親しい友人と年に数回以上会うケース。
 ・ c : 選択肢。○で囲ったものは、一番そうだと思うもの。
 ・ 下線部は筆者。

選択肢

1. 自分の能力や技術をみがき、それを仕事に生かす 2. 自分らしさや個性を大事にする 3. 社会の決まりを守り、人に迷惑をかけない 4. 仲間や友人を大切に、人間関係を豊かにする 5. 人より上に立ち、社会的に認められる人間になる 6. 困難に負けず、たえず努力して向上する 7. あまり無理をせず、自分の能力や立場に合った生活をする 8. 家庭生活を大切に、家族で協力し合う 9. ボランティア活動に参加するなど、人のために役立つ生き方をする 10. 社会の問題に関わり、積極的に世の中を変えていく 11. その他（ ）

にもかかわらず、給料はかなり低い。しかし、だからといって、大金持ちになりたいとは思っていない。むしろ、そんなに多く持てない方がよいときえ思っている。

㊤ (前略)金ばっかしあったって面白くないからね。全部みつかって、ね、充実してしまえばね、次も見えてこないし、頑張ろうっていう。そういう（聴き取り不能）が…。

筆者 あ、充実しちゃったれば、

㊤ そうそうそう。もう、そっから、もうちょっと頑張っているいろんなこと覚えたいなあとか、そういう気持ちもなくなっちゃうかもしれないし。

……中略……

㊤ 満たされすぎればね。

お金がたくさんあると、何よりもまず、働かなくなる。しかし、彼は、それはしたくないと考えている。前節でみたように、彼は、「(お金を)あんまり多くもらって、仕事しないとかさ、そういうの困るしさ」「怠けるとかさ」と述べている。彼は、「基本的に、仕事すること自体は好き」で、職業志向を有している。

そして、お金がたくさんあると、何事も金で片をつけるようになるだろう。そうすると人との関わりがなくなってしまう。それもしたくないと彼は考えている。

㊤ うーん、やっぱしそういう人(=金で片つくと考えている人)はちょっと、多いし。
 ……中略……

㊤ っちゅうか、基本的にあれだよな、人間味ないっちゅ(う)か、寂しい人だよな。
 ……中略……

㊤ そういふ、モノとかさ、ね、そういう金だけで片づくんでなくて、やっぱし、ね、そういうお互いのその話とかさ、そういうもので（聴き取り不能）ないと、うん、寂しいと思うよ。

……中略……

- ⑬ (金で片つくんだったら)したら、やっぱりね、そういう、ね、人間同士の関わりもないし。

人との関わりの中では、煩わしさを感じたり、トラブルを抱えることになることは往々にしてある。その点は彼も十分承知している。彼はいう。「だ(から)そういうの全部ひっくるめて、そういう付き合いだろうからね」。

「全部金で片づいちゃえばね、面白くないからね。(中略)金ない中でどうやってやってくかちゅうのが面白いとこだから(笑い)」, 仕事も生活も。そうした状況の中でも、家族・友人共々仲良く、笑いのある生活を送ることができればそれでいいし、そうした人生が一番だ。「したけど、それが一番難しいけどね」。

—「ノンエリート」としての生き方に手応えを感じる人生観が、ここにその輪郭を現しつつあるように思う。

6 おわりに

本稿ではこれまで、彼らの多くがその中で最もいきがいや充実感を感じるとする友人関係と、その一方で、企業社会の縮小・再編のインパクトにかなりの程度晒されながらも、そこでの仕事そのものを好む人が少なくない労働生活について中心的に検討してきた。それらを踏まえて、本研究が示唆することは何かについて最後に述べることにしたい。

彼らの場合、人間関係のパターンが、「未婚の時は友人—結婚後は、企業主義的な職縁と家族」という、これまで男性労働者に典型的であったパターンと同様になることはない。彼らにおいて企業主義的な職縁は皆無である。そして、プライベートな人間関係が結婚後、家族に限定される傾向が強まるとも思えない。彼らの多くが、気の合う親しい友人と恋人ぐるみ・家族ぐるみの付き合いを現にしているか、今後、そうした付き合いをしたいと思っている。彼らは、そうした友人や家族とのつながりを人生の軸線に据えているのである。

一方で、彼らは、仕事を重視している。少なくとも人が仕事そのものを好み、技能形成の可能性ややりがいを仕事の中に読み込む意志と願望を持っている。すなわち、仕事を通して職業志向を実現させたいと思っている。そうした志向性は、ホワイトカラー労働や「熟練的な」ブルーカラー労働に従事している人達に限らず、「不熟練な」ブルーカラー労働と一般的には目される労働に従事している人達においてもみられる⁽¹³⁾。

彼らの多くが、そうした友人との(家族ぐるみの)付き合いと仕事の両方を、現在住んでいる所で行ないたいと思っている。すなわち、住み慣れた街で、馴染みの友人との(家族ぐるみの)付き合いを享受し、なおかつ仕事を通して職業志向を実現する、そういう人生を送りたいという志向性が彼らの中にはある。「エリート」の生き方とは対極的なそうした生き方に彼らは手応えを感じている⁽¹⁴⁾。それは前章でみた通りである。

なかには、友人ネットワークとしての職業社会への志向性を有する人もいる⁽¹⁵⁾。

①⑫⑮③⑧の4名の場合、友人ネットワークが、職場社会と現在、重なっているか、かつて重なったことがある。①⑮の気の合う親しい友人は、現在、それぞれ同じ職場社会のメンバーである。③⑧の場合、気の合う親しい友人の1人が以前、今の職場にいた。⑫は、A工卒業後、5つの企業を渡り歩いてきた。3社目の、電力会社の2次下請企業では、気の合う親しい友人と

一緒であった。その人のつてで、⑫は、この会社に入社した。会社の業績不振による給料減さえなければこの会社に勤めつづけていたと、彼は今でも残念に思っている。

よって、この4名は、友人ネットワークとしての労働社会への志向性を有していると思われる。⑫の場合、その点が明瞭である。彼は、友達付き合いで大切なのは互いに対等であることだと述べた際、その脈略で職場の人間関係に触れ、そこでは負担の平等化がなされるべきだと述べている。

⑫ 誰かが大変で、誰かが楽とか、嫌いなんですよ。辛いんなら、みんなが辛いよって。楽するんなら、みんなで楽しようよって。誰か1人が、っていうのが嫌いなんすよね。

そして今の職場において、後輩（男性、21歳）が辛そうにしている場合、作業を代わったりしているという。

①と⑬も、「『働くこと』はどういうことか」という質問に対して、回答の1つとして「7. 仲間との人間関係を大切にすること」を選択している（表24参照）。⑮も、働く上で、職場の人間関係は大切だと述べている。

こうした、友人ネットワークとしての労働社会への志向性を有していると思われる、この4名のうち、①⑫⑬の3名は職業志向を有している。よって、①⑫⑬の3名、とりわけ顕在的には⑫は、友人ネットワークとしての、職業を軸とした労働社会、すなわち職業社会への志向性を有していると思われる。

しかしながら、こうした、気の合う親しい友人との（家族ぐるみの）付き合いを享受することと、仕事を通して職業志向を実現させること、この両方を住み慣れた街で行ないたいという願いが実現するのは、現状では難しい。

職業志向を安定的に実現して行くには、労働条件の向上と技術・技能の向上の両方が必要となる。彼らの中には、転社によってそれらを確保しようかと考えている人もいる。そうした考えの根底には、技術・技能の向上を求める気持ちもそうだが、良好ではない労働条件に対する懸念もある。今やっているのと同じような仕事を担当することになり、なおかつ今よりも若干でもいいから給料が高くなり、休みがもうちょっと多くなるような転社をしたい、できればそれで技術・技能が向上すれば申し分ない、というのが本音のようである。

しかし、横断的職業別労働市場の成り立っている分野が限定的で、企業中心社会となっている日本社会では、そのルートはかなり険しいものとなっている。同業他社に転社できれば、確かに技術・技能の向上は果たせるかもしれない。しかし、一般に転社すると、給料などの労働条件が低下するのは否めない。それどころか、リストラ圧力が高まっている今日、転社すること自体がそもそも困難になっている。4章・(4)の⑳のケースは以上のことを端的に物語っている。

でも、もし万が一、労働条件の向上と技術・技能の向上の両方を実現できるような転社が可能となったとしよう。しかしながら、ここでも特有の困難が伴うことになる。4章・(4)の㉑の言葉はこの点についても示唆している。札幌圏、とりわけ小樽には、彼らが携わっている仕事を包含する産業がそれほど集積していない。要するに、その域内には、そうした転社を可能にする企業があまりない⁽¹⁹⁾。そのため、そうした転社をもしもするとしたら、住み慣れた街で暮らして行きたいという意に反して、その地を離れなければならないのである。

彼らの多くが、友人との（家族ぐるみの）付き合いの享受と職業志向の、共に地域スケール

の実現を求めている。しかしながら、そうした願いは、上述のように、現状において矛盾を孕まざるを得ない。おそらく、これからも、そうした希望とそれと食い違う現実とのギャップを大なり小なり感じつつ、彼らは生きて行くことになるのだろう。

こうした矛盾的状况の中から、どういった「社会」が形成されてくるのか⁽¹⁷⁾。今後、グローバル化に伴う、企業社会の変容を軸にした産業セクター全体の変容と、それらと相まった地域社会の変容がますます進行し、事態は流動的になるだろう。そうした変貌の渦中における、かつその当事者としての彼らの推移を、今後みて行く中で探ることにしたい。

〔附記〕

本稿は、これまで行なってきた一連の調査の一部にもとづいたものに過ぎず、中間報告の域を出ていない。論じ足りない部分が多々あるし、そもそも取り上げるのを見送ったものさえある。論証の不備も自覚している。別稿を用意し、更に分析を進め、吟味したい。

本稿は、2001年度唯物論研究協会第24回研究大会（2001年10月27・28日、於・宮城教育大学）での発表をもとにしている。発表の際にお寄せいただいた質問や意見は本稿を執筆する上で大いに参考になった。とりわけ、横浜市立大学の中西新太郎先生と鹿児島県立短期大学の中山一樹先生からは、示唆に富む質問・意見・コメントと励ましをいただいた。中西先生、中山先生をはじめ、御発言下さった方々に厚く御礼申し上げる。

お話をうかがったA工出身の方々とその親御さん、A工の諸先生方に御礼申し上げます。お一人お一人のお名前をあげて、それぞれの方々に御礼の言葉を述べたいのですが、プライバシー保護のためそうも行かず、何ともそっけない、しかも非礼な謝辞となることをお許し下さい。

私は、皆様に、研究面も含めていろいろな面で支えて頂きましたので、今までやって来ました。これまで皆様からどれだけ励まされ、勇気づけられ、教えられたことか。言葉では表現することができないくらいです。皆様と出会えたことは、研究も含めた私の人生にとって大きな幸運であります。感謝しております。どうもありがとうございました。

(2002年2月16日脱稿)

〈注〉

- (1) そうした変化は、単に産業セクターにとどまるものではなく、日本社会全体の変容の要因となっている。日本社会が企業中心社会だからである。後藤道夫氏がいうように、1960年代から90年代にかけての日本社会は、「企業主義的統合」を中軸として成り立つ『日本型大衆社会』として存立してきた。90年代以降の、グローバル化に伴う企業社会の縮小・再編は、そうした日本社会における社会統合の要を揺るがすものである（後藤（1996））。

- (2) 本節の議論の詳細については拙稿（2001）の3章を参照。

「エリート」―「ノンエリート」の分化は、日本の社会編成と深く関わっている。日本の社会編成は、家族、学校、産業の各セクターとその連関を骨格としている。過度の普通教育化と単線化を特徴とする学校セクターと、企業中心的で、職業・職務の不明確性を特徴とする産業セクターの間では、「能力」を基準にした配分が行なわれている。その際、学校歴が「能力」の裏付けとして機能している。学校歴は、一元的能力主義にもとづいた選別の中でどの程度えり抜かれた存在なのか（「エリート」）、あるいはそうでないのか（「ノンエリート」）を示す存在証明として機能するようになっているのである。

日本社会における「エリート」とは、現時点では、日本の経営下における中核層たる長期雇用層、端的には大企業におけるそれである。

日本社会において「エリート」―「ノンエリート」の分化が乗り越えられる可能性が非常に小さいことは、私も承知している。しかし、そうした可能性は無視し得る程度なのかは疑問である。「エリート」―「ノンエリート」の分化は固定的・安定的だとは限らない。とりわけ、変動期にある今日では、その流動性が高まり、部分的にせよそうした分化に抗うような変化が生ずる可能性も否定できない。「エリート」―「ノンエリート」に括弧をつける所以である。

- (3) A工は、1939(昭和14)年に北海道庁立A工業学校として開校した。91年度の時点では、A工は全日制課程と定時制課程を擁し、全日制課程は電子科、電気科、機械科、建築科、土木科、工業化学科、造船科の7科から成っていた(A工業高等学校(1991))。A工は後志管内で唯一の工業高校であり、造船科を有するのは北海道ではここだけであった(造船科を擁する工業高校は、かつて全国で18校あったが、91年の時点では9校にまで減少していた)。

- (4) 一連の調査の皮切りとなった(a)調査は、A工造船科の方々や諸先生方の御理解・御協力と、当時の指導教官であった小林甫氏(当時、北海道大学教育学部教授、現在、北海道大学大学院文学研究科教授)の御尽力があって実現の運びに至った。そして、(a)調査では、筆者も含めた20名でお話をうかがった。A工造船科の方々や諸先生方、小林氏、そして調査員として御協力下さった院生・学生の方々に感謝する次第である。なお、それ以外の調査は全て筆者が行なった。

- (5) このクラスにおける人間関係は、高校3年(1991年)の11月時点では、大まかにいって次のような状況であった。①から⑧までと、⑨から⑰までは比較的明瞭に区別できる集合体であった。前者は、成績優秀な人が多い、おとなしい人達の集まりであった。人間関係はこの外にはあまり広がっていなかった(この人達を除くあとの人達の場合、クラスメートだけでなく、それ以外の人間関係も有している人が多い)。部・同好会活動に熱心な人は少なかった。アルバイト経験者も半数と少なく、それも短期のものであった。

後者には、あらゆることに積極的な人達が集まっていた。クラスの役員(室長、副室長、書記、会計)を経験した者や学校行事でリーダー的に行動する人が多く、しかも部・同好会で積極的に活動している人が多かった。アルバイトにも積極的でほとんどの人が長期で定期的なアルバイトを経験していた。ちなみに成績は全員が中位であった。

⑬から⑲(実態はバンド)、⑳から㉑と㉒、㉓と㉔の3つはある程度区別できるが、ゆるやかに結合していた。成績は中位から下位の人が多かった。「帰宅部」の人が多いのに対して、全員が長期で定期的なアルバイトを経験していた。

㉕から㉖までの8人では、成績上位が2人、中位が5人、下位が1人となっていた。部・同好会で積極的に活動している人は半数、アルバイト未経験者が3人であった。

- (6) こうしたとらえ方については熊沢誠氏の所論に拠っている。氏は、「どこの国でもふつうの労働者は労働の日常生活についての必要性和可能性を共有する可視的なかまとの協同の営みのなかに生きている」とし、「その協同の営みの場」を労働社会と定義している(熊沢(1980) p.116)。氏によれば、労働社会は「その内部に構成メンバーが遵守すべきインフォーマルな規範を育てることを通して、資本の要請が労働者個人に与える衝撃を間接的にする」(同)という。熊沢(1976) pp.141-72, 同(1993) pp.75-105も参照。

- (7) ジェンダー的視点からの究明が、本稿では不十分である。この点については、今後、検討することにした。その際の課題として、本文では、「ぐるみ」の今後の展開に関するものとして2点提示した。それ以外の課題として、以下、更に2点あげておく。

1点目。彼らが多忙な中でも友人ネットワークを形成し、そこで付き合いを享受し得ているのは、家事労働を免除されているからではないか。未婚で実家に住んでいる5名の場合、家事をあまり手伝っていない。それには、彼らが長時間労働をしていて家事をする余裕がないということがもちろん関係していよう。しかし、それだけでなく、ジェンダー的な規範も関係しているのではないか。すなわち、母親からすれば彼らが子どもであるということだけでなく、息子であるということも、彼らが家事を免責されていることに関係しているのではないか。これが娘であったならば、そうは行かなかったのではないか。

2点目。先述のように、彼らの場合、気の合う親しい友人の多くが男性である。そうした関係は、ホモソーシャルな関係——そこではホモエロティシズムとホモフォビア(同性愛嫌悪)が相互充進している(上野・竹村(2001) pp.182-4、における竹村和子氏の発言を参照)——なのだろうか。彼らにおいては、ホモソーシャルリティが強いのだろうか。

(8) この点については都市社会学的パーソナル・ネットワーク論を参考にしている。それに関しては拙稿(1999) pp.146-7, 同(2001) pp.238-9, p.251の注(2)参照。

(9) 以下で述べるように、趣味を媒介にした、友人ネットワークという「場」を越えた「場」の設定を行なおうとしている人もいる。

彼らは総じて、友人と趣味を介してつながっている。逆にいえば、彼らにおいて趣味は、1人きりで楽しむものではなく、友人と楽しむものとなっている。その意味では、趣味を楽しむことは、友人を介して開かれた行為となっている。

そうした、他者に開かれたものとしての趣味を更に展開しようとしている人もいる。⑫がそうである。彼は友人と、2001年11月に、小樽でラップのパーティーを開く予定でいる。こうした試みは初めてではない。彼は以前にも、HIP HOPのグループの人達と、年に2、3回パーティーを開いているし、小樽のコミュニティ・FMラジオ局で番組を担当したこともある(最初は月1回の放送だったが、最終的には毎週1回になったという)。

彼によれば、小樽にはHIP HOP好きが結構いるが、集まることのできる場所がないという。そこで、「みんな集めて、1発、ドデカイことをやる予定なんすよ」とは彼の弁である。地元のタウン誌も巻き込むつもりだという。

ラップのパーティーでは、各自は自らの好みとその時の気分に任せて行動する。そこで何をするか、何が起こるかは「場」の創発性に委ねられている。その意味では、友人ネットワークと共通した性質を持つ。

こうした、友人ネットワークという「場」を越えた「場」から創発される「社会」形成にも、今後、目を向けて行きたいと考えている。

(10) 天然ガスは、沸点が非常に低い(-158~164℃)。そのため、それを液体状態で維持するには、高圧維持、超低温維持、あるいは両者の組み合わせのいずれかの方式をとる必要がある。LNG船では、超低温維持方式がとられている。よって、いかに防熱するかが鍵となる(糸山(1991))。

(11) ⑬は、勤務先で不満なこととして、16と22を選択している。前者の「16. 自分を正当に評価してもらえない」の内容は、ボーナスが低いことである。彼は、その場合の査定の方にも問題があると述べている。

(12) 彼らの親と同じ世代で、階層的にも共通している小樽市立T中学校の生徒の母親の場合でも、これと同様の結果が得られた(拙稿(1995))。

学校歴主義に対する評価の、世代間の連続性・共通性として理解してよいのだろうか。これは地域文化ないしは地域的な階層文化を示唆するのだろうか。今後、検討することにした。

(13) 「若年者就業実態調査」(労働省)によると、20歳から24歳までの人において、「初めての会社」を選ぶときに最も重視した理由として、「会社の規模・知名度」や「会社の将来性」を挙げる人の割合が1985年時と比較して1997年時では大幅に低下しているのに対して、「仕事の内容・職種」を挙げる人の割合は逆に上昇しているという(図1)。

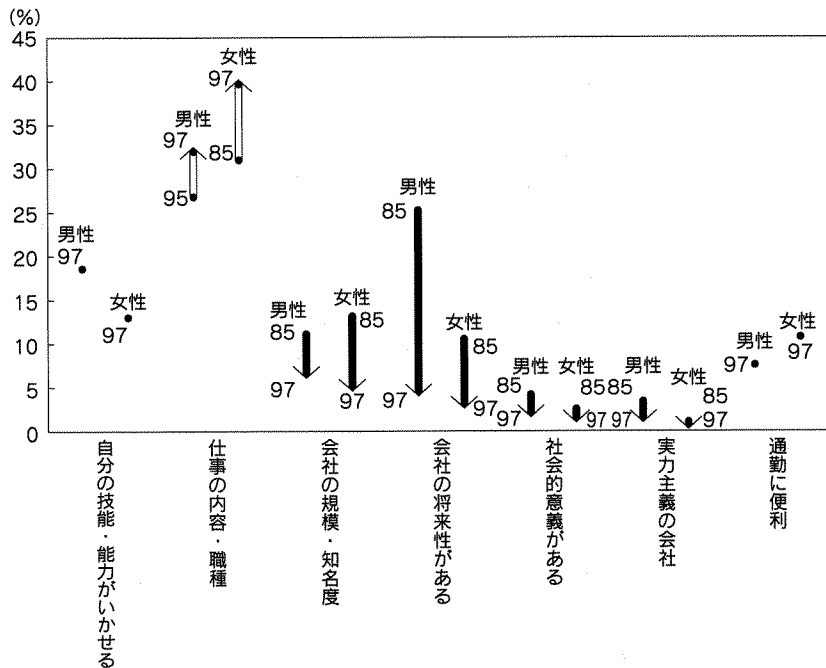
この調査結果と本研究で得た知見とを考え合わせると、青年層においては企業主義的志向が低下し、職業志向が増大しつつあるといえるのではないか。すなわち、今日、青年の中では、企業主義的志向から職業志向への転換が胎動しているのではないか。

私は、青年において増大しつつあるだろう職業志向と、職業を軸にした産業セクターの再編成に向けた営み——すなわち、「社会的な職業」(浅川(2001) pp.3-4)の確立と、そのための諸制度(横断的労働市場、横断的職業別労働組合、公的職業資格制度)の構築・整備及び職業教育の再編・充実化——とは共振し得ると、現時点では考える。

こうした共振を積極的に増幅させようとするのであれば、そうした職業志向に込められている、技能形成の可能性ややりがいを読み込む意志と願望を「社会的な職業」にどう組み込むか、そのために「社会的な職業」の可塑性をどう保障するかが重要となるだろう。

その点について考える場合、前提として、仕事内容や技能及びその階梯、労働過程のあり様が技術水準によって決まるとする素朴な生産力主義の観点に立つ技術決定論や、経営側のイニシアチブによって決定されとするとする経営側決定論からの脱却が必要である。具体的な仕事内容や技能、労働過程は「中立的な科学技術」の産物ではない。また、それらは、日本的経営の「成功」局面にあっても、経営側の完全なフリーハンドで作られていた訳でもない。それらは、労資関係の力学が作用する中において作られ合う歴史的な人為的構築物

図1 最も重視した「初めての会社」選択理由の推移（20～24歳）



資料出所 労働省「若年者就業実態調査」

(注) 1) 図中の数字は調査年を示す。

2) 「自分の技能・能力がいかせる」、「通勤に便利」は1985年では調査されていない。

3) 「賃金の条件が良い」、「休暇等の条件」、「勤務地」、「転勤が無い」、「福利厚生が良い」、「賃金・労働時間・休日の労働条件の良い会社」、「その他」、「不明」の調査項目を省略しているため全体で100にならない。

4) 1985年調査と1997年調査では選択肢及び標本からの復元方法が異なっているため、両者の厳密な比較は困難。

出所 労働省編 (2000), p.160 より転載。

であり、よって可塑的である。この点については浅川 (1992) 参照。

- (14) 仕事において「エリート」に求められるのは、「職」に生きることではなく、日本の企業社会の中核層の一員として、ゼネラリストとしての「能力」を発揮しつつ競争的環境において生き残り、長期勤続することである。その一方で、「エリート」には、友人関係を切ってゆく、あるいは友人関係が切れてしまうこと、すなわち友人関係の短期化・暫定化を受容することが求められる。
- (15) この場合の職業社会とは、熊沢 誠氏が主張しているところのものである。氏は、労働社会には、職業社会も含めて4つのタイプがあるとしている (熊沢 (1993) pp.102-5)。
- (16) よって、その域内で転社をするとなれば、技術・技能の向上はなかなか望めず、これまでの彼らの転社歴が往々にしてそうであったように、関連性のほとんどない仕事をホッピングすることになる。
- (17) 拙稿 (2002) において、彼らが形成しようとしてきた／している「社会」の構成と原理について検討している。参照願いたい。

＜引用文献＞

A工業高等学校 (1991) 『学校要覧』。

青森銀行 (1998) 「転換期を迎える県内ガソリンスタンド業界」、『経済トピックス』No.309, http://www.a-bank.co.jp/re/htm/et/et98_309/etidx.html

- 浅川和幸 (1992) 『「無人化ライン」における労働過程・職場社会の研究』, 小林甫・浅川和幸『大企業労働者の生活と文化における〈同化〉の中の異化——電機産業M社グループ・S社を通しての実証的研究』北海道大学教育学部附属産業教育計画研究施設研究報告書第40号。
- 浅川和幸 (2001) 『情報処理産業と専門学校——北海道の情報系専門学校を事例に』(『調査と社会理論』・研究報告書18) 北海道大学教育学部教育社会学研究室。
- Bellah, Robert N. et al. (1985), *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*, University of California Press (島蘭 進・中村圭志訳 (1991) 『心の習慣——アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房)。
- 後藤道夫 (1996) 「非『市民社会』から『日本型大衆社会』へ」, 渡辺治編『現代日本社会論——戦後史から現在を読む30章』労働旬報社。
- H電力 (2000) 『経営効率化計画』, <http://www.hepco.co.jp/company/keiei/k3/index.html>
- 乾 彰夫 (2000) 『「戦後の青年期」の解体——青年期研究の今日的課題』, 教育科学研究会編『教育』第650号, 国土社。
- 糸山直之 (1991) 『LNG 船——英知の生んだ船』成山堂書店。
- 古賀義弘・井上秀次郎・足立 浩『総合重機——陸・海・空に展開する世界競争』(日本のビッグ・インダストリー③) 大月書店。
- 小西二郎 (1995) 「小樽市手宮地区における家族の生活史と子育て・教育的価値——小樽市立T中学校の生徒の親に関する事例研究」, 小林 甫編著『青年期発達と《家族—学校—企業のトリアーデ》に関する社会学的基礎研究』1992/93/94年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書。
- 小西二郎 (1999) 「変動期における青年の〈友人ネットワーク自己〉の連関に対する分析視角の検討(上)——高橋勇悦氏の『1.5次関係』論を手掛かりにして」, 『北海道大学教育学部紀要』第79号。
- 小西二郎 (2001) 「変動期における青年の〈友人ネットワーク自己〉の連関に対する分析視角の検討(下)——高橋勇悦氏の『1.5次関係』論を手掛かりにして」, 『北海道大学大学院教育学研究科紀要』第83号。
- 小西二郎 (2002) 「『ノンエリート』青年の『社会』形成?——北海道小樽市A工業高校出身者を事例として」, 唯物論研究協会編『唯物論研究年誌』第7号, 青木書店 (2002年10月刊行予定)。
- 熊沢 誠 (1976) 『労働者管理の草の根』日本評論社。
- 熊沢 誠 (1980) 「企業のなかの職場社会」, 『ジュリスト増刊総合特集』第18号, 有斐閣。
- 熊沢 誠 (1993) 『新編 民主主義は工場の門前で立ちすくむ』(現代教養文庫1494) 社会思想社。
- 中西新太郎 (2000a) 「縁辺化される若者たち——社会システムの崩壊と知性の変容」, 『世界』2000年5月号, 岩波書店。
- 中西新太郎 (2000b) 「青少年暴力と現代日本社会」, 教育科学研究会編『教育』第654号, 国土社。
- 日本経済新聞社編 (1991) 『北海道の中堅170社』日本経済新聞社。
- 小樽市 (2001) 『小樽市統計書』(平成12年版)。
- 労働省編 (2000) 『労働白書』(平成12年版) 日本労働研究機構。
- 谷江武士・青山秀雄 (2000) 『電力——自由化と原発で転機を迎える電力産業』(日本のビッグ・インダストリー④) 大月書店。
- 上野千鶴子・竹村和子 (2001) 「ジェンダー・トラブル——アイデンティティの攪乱はどこで, どのように…」, 上野千鶴子編著『ラディカルに語れば…』平凡社。
- 渡辺 治 (1997) 「支配層の21世紀戦略と教育改革」, 教育科学研究会編『教育』第617号, 国土社。
- 渡辺 治 (1999) 「90年代教育改革はなぜおこったか——第17回中間研究集会講演より」, 歴史教育者協議会編『歴史地理教育』第592号。
- 渡辺 治 (2000) 「財界の教育要求と教職員組合運動——『日の丸・君が代』と教育の多様化をつなぐもの」, 全日本教職員組合編『季刊エデュカス』第28号, 大月書店。